

平成4年度

順天堂大学大学院体育学研究科修士論文
保健・体育学専攻

子どもの生活背景と体力及び健康状態
－農村部と都市部の現状を比較して－

健康管理学専攻 11011
蓮見 仁

論文指導教員 野原三洋子 教授

合格年月日 5 年 3 月 2 日

論文審査委員

主査

山本武彦

副査

鈴木立明

副査

吉澤 宏

目 次

	頁
第 1 章 緒 言	1
第 2 章 関連文献の考証	3
第 3 章 本研究の目的	15
第 4 章 方 法	16
第 1 節 調査対象	16
(1) 当該農村地区の概要	16
(2) 当該都市地区の概要	16
第 2 節 調査方法	17
第 3 節 調査内容	17
第 4 節 調査期日	18
第 5 節 回収状況	18
第 6 節 分析方法	19
第 5 章 結 果	20
第 1 節 対象の概要	20
(1) 回答者の年齢構成	20
(2) 家族形態	20
(3) 主たる家計維持者の職業	21
(4) 居住環境	22
(5) 親の小中学生の時の出身地	23
第 2 節 子どもの体位、体力及び健康状態	23
(1) 体位	23
(2) 体力	24
(3) 健康状態	25
第 3 節 子どもの生活の現状	26
(1) 遊びの現状	26
1) 遊び場	27
2) 遊び友達	27
3) 遊びの種類	28

(2)	スポーツクラブ	28
(3)	学習塾・習い事（おけいこごと）	29
(4)	外遊び時間	30
(5)	テレビ視聴時間	31
(6)	就寝・睡眠時間	32
(7)	家事手伝い	33
第4節	対象の食生活の現状	34
(1)	摂取内容	34
(2)	摂取時の状況	35
(3)	外食	35
(4)	親の調理への意識	36
第5節	子どもの体力、体格、健康状態と諸関連	36
(1)	親の出身地との関連（体力及び意識）	36
(2)	子どもの就学前の身体活動に対する親の意識態度	37
(3)	親の運動への関心及び実践	38
(4)	主たる家計維持者の職業と体力	39
(5)	居住環境と親の怪我への心配	39
(6)	曾・祖父母の同居と間食の問題	39
(7)	体力と肥満度	40
(8)	スポーツクラブ及び塾加入の有無と諸関連	41
1)	外遊び時間	41
2)	体力	42
3)	健康状態	43
(9)	子どもの就学前の身体活動に対する親の意識態度	44
(10)	子どもの体力と性格	45
(11)	肥満度と性格	45
(12)	家事手伝いの有無と体力	45
第5章	考察	47
第1節	農村部の子どもを取り巻く生活の現状	47
第2節	居住環境と子どもの体力・健康状態とのかかわり	49

第3節	生活の現状と体力、健康状態とのかかわり	50
第4節	曾・祖父母の同居と子どもへの影響	58
第5節	子どもの体力と性格への影響	60
第6章	結 論	62
第8章	要 約	64
	謝 辞	67
	文 献	68
	欧 文 要 約	72
	付 表・資 料	75

第1章 緒 言

ここ半世紀の抗生物質の普及、科学技術の飛躍的な進歩による医療の急速な進歩、食生活の充実や身近な環境保健の向上などは、わが国の死亡構造を大きく変えた。その結果、平均寿命が延び、主要死因は感染症から悪性新生物、心疾患及び脳血管疾患等の循環器系疾患へと変化してきた。そして、少死のみでなく少産化により高齢化社会を視野にとらえることになったが、高齢者が健康で自立できることは経済面からみても極めて重要である。

生命保険文化センター¹⁾が1992年の夏に全国の20歳以上の男女3500人を対象に行った調査で、老後必要なものとして「健康が必要」と回答した人は、9割（複数回答）にものぼり、また将来に不安を感じているのは、自分の介護60%（複数回答）、自分の健康52%、配偶者の健康51%であった、と報告している。

このことから、人々が健康に関心を持つ一方、老後の生活に不安を感じているということが明白である。よって、早い時期から健康生活を確立するようなライフスタイルを身につけることが、生涯健康の観点から見ても重要であろう。

一方、近年、成人病が低年齢化傾向¹²⁾⁴⁹⁾にある、との報告が数多くあり、子どもの健康が危惧されている現状にある。その中でも小児肥満の発生数が多く、この背景には、一つに食生活において動

物性食品の摂取過多、食物繊維を含む食品の摂取の減少及び加工食品利用の増大など⁷⁾や誰でもすぐ口にできるハンバーガーに代表されるファーストフード店の発展で、子どもはエネルギーを過剰に取り入れることになってきていることがあげられる。さらに、交通機関への依存の増大及び遊び場の減少や交通事情による危険性の増大、受験勉強や学習塾に通うことによる全般的な運動不足で、過剰摂取のエネルギーを使い切れないでいる現状もある。

高齢化社会を健康に過ごすためには早い時期からの健康によいライフスタイルを身につけることが重要であり、そのためには、親が子育ての中でこのことを意図して実践し、子どもが健康な生活を送れるように対応していける素地をつくることが重要である。

第2章 関連文献の考証

第1節 生活習慣と健康

”健康”に関して様々な見解がある。Dubos⁴⁵⁾は疾病の問題さえ解決すれば、そのまま健康がつくりだされるわけではなく、健康とは毎日遭遇する環境からの挑戦に対して反応し、さらに適応する個人的態度のあらわれであると定義しており、曾田⁴⁶⁾は健康の条件を、①疾病異常がない、②身体的および精神的活動力と作業能力の充実、③形態的特徴の充実、④整理的機能の完備、⑤環境に対する抵抗、順応性の良好さ、小児においては順調な成育、としている。また福田⁴⁷⁾は、”身体的・精神的に、形態・機能ともに、客観的にも主観的にも満足しうる状態”であり、かつ”社会的な生活が十分営める状態”を具体的に健康とよんでいる。

Breslow²⁾はアメリカアラメダ郡に住む20歳以上の人を対象に、WHOの健康の定義の中の身体的・精神的・社会的という三つの側面のそれぞれについてどのような状態にあるかを明らかにする目的で調査を行った。そして日常生活習慣について詳細に検討し、健康の維持・増進に好ましい七つの日常生活習慣を見出した。これらは、①喫煙をしない、②飲酒を適度にするかまたはまったくしない、③定期的にかなり激しい運動をする、④適正体重を保つ、⑤7～8時間の睡眠をとる、⑥毎日朝食を摂る、⑦不必要な間食をしない、で

これらをより多く行っている、いわばライフスタイルのよい集団と、悪い集団とを9年間追跡した結果、死亡率に数倍の差があること、また若年者ほど、健康習慣の死亡率への関与が強いことを立証した。さらにこれを平均寿命でみた場合、“せいぜい三つ以下しか好ましい健康習慣をもっていない”45歳の男性群では、“六つ以上の健康習慣をもっている”同年齢男性群に比べて、11年間も平均余命が短い、という結果を発表した。このように不摂生な日常生活を送っている者は、健康上好ましい日常生活を送っている者に比べて、倍も早く年をとるものと解釈できる³²⁾。

以上のことから、7つの健康習慣を子どもの頃から身につけることが重要で、そして、親がこのことを意識して子どもに養育する必要があるだろう。

また、健康によい生活習慣とは「食習慣」「運動」「休養」を適切にとることと一般的に言われている。以下では、それらと子どもとの関わりに関する文献について述べようと思う。

(1) 食習慣

現代、健康上の関心は脳卒中・心臓病・癌などの成人病に集っているが、これらの成人病は栄養や食べ方などの食習慣でつくられるといわれるほど、食べ物と密接な関係にある⁵⁴⁾。

原ら⁴⁾は、学童の食生活と食習慣について肥満及び肥満傾向児を中心に調査したところ共通して見られたのは、①母親が食事の支度をしない、②母親の夕食の支度にかかる時間が短い、③食事の味付けが濃い、④朝食を摂らない、朝食を学童や子どもだけでさせる、⑤夕食を家族とともに食べない、⑥外食、市販弁当、インスタント食品に頼るなどがみられた、と報告している。

力石ら⁵⁵⁾も横浜市の食生活と学童の暮らしに関する調査研究の中で、食生活を取りまく家庭生活の問題点として、生活背景としては明らかに核家族化が進み、主婦は外に出る機会が増え、それに伴い、主婦の意識や行動共に食生活に対するウエイトが軽くなり、家庭の食生活の中に食の外部化が浸透しつつあることが伺われた。家庭料理を母や姑から習得する者は減り、逆にテレビや雑誌等からの食に関する情報が大幅に増えた。更に家族生活の個別化が進み、親は仕事、子供は受験というように家族は同じ家の中で暮しながらも銘々各自の生活時間の枠の中で生活する傾向が強くなり、子供の生活時間も夜型傾向が強くなり、健康に何等かの問題を持つ者が、3人に1人の割合で存在していた、などの報告した。

以上、現代社会においては、核家族化、母親の就業、さらに少産化、高齢化など、家族のライフスタイルは今後もさらに変化していくことが予測される。しかし、親がたとえ職業を持ち続けても子ど

ものの栄養や味付け、食べ方など、または運動志向への動機付けなど、よい生活習慣を身につけさせるよう教育的意図を持って実行すれば、子どもは健康を保ち、そして、成人病の低年齢化をも防ぐことが可能となろう。

（２） 遊び（運動）

子どもにとって、遊びは目的であり、生活そのものであるといえる。そこでは様々な知識を得、また、工夫し、創造しながら子どもなりの社会生活に必要な様々なことがらの基礎を築く。そして子どもが成長・発達する過程で、さまざまな形で精神的発達、身体的発達に影響を及ぼす¹⁵⁾。よって、遊びをすることは子どもの将来の人間形成にとって極めて重要な意味を持ち、また健康な生活を送るためにも重要である。

遊びについて小林¹⁶⁾は、近年では、都市化の進展、都市のスプロール現象、交通量の増大、さらには農村事情の変貌等により、児童にとって適当な自然のオープン・スペースや遊び場が著しく不足となり、一方、核家族化の進行や家族規模の縮小化とも関連して、過保護・過干渉の養育態度が前進しつつあり、これらの諸要因が複合して、子どもの特に戸外遊びの発展を阻害している。さらに戸外遊

-lderは、より優れた運動コントロールは、思考・知覚・情緒の優れたコントロールにつながる¹⁸⁾と述べている。

また、遊びの種類が子どもの運動能力にどのように関係するかについて本間⁸⁾は、①ボール投げでは、日頃ボール遊びをしている群の方がしていない群よりも高い値を示す傾向にあり、ボール投げの能力は練習の程度によって差が大きいということからみて日頃の経験によって能力も高まる、②かけっこ、おにごっこ、などのスピード、敏捷性を要素とする遊びを行うことは、ジグザグ走のような同じ要素を要求する運動能力を高めることになる、③自転車遊びは運動能力を高める直接的な要因となるといえるものではなかった、④複合遊びを日頃よく行うことが調整力、敏捷性、スピードなどを高めることになる、⑤外遊びの頻度と運動能力では、毎日外で遊ぶ群の方が時々しか外で遊ばない群より高い値を占め、また外遊び時間と運動能力の関連は明かではない、⑥母親の養育態度との関連では明かな関係はみられない。従って戸外で遊ぶことが多く、遊ぶ内容も運動遊びをよく行うことが運動能力を高める重要な要因になる、と報告している。

大山^{50) 51)}の調査結果から、動的遊びをしている児童は、静的遊びをしている児童より運動能力が発達する傾向を示した。また体力は運動の遊びや時間の形態、遊び場の有無といった条件よりも運動

45以上を肥満群と3群に大別した。その結果、肥満群は運動能力テスト成績に不利な要因であり、またやせ群と普通群の成績にはほとんど差が認められなかったとしている。

（３） 睡眠（休養）

井上¹¹⁾は、都内に在住する小学校1年生を対象にその母親と子ども自身に対して、大がかりな「子どもの生活時間調査」を実施した。この調査は10年前にも同様な調査を行ったもので、それと比較している。その結果、総合的にみると①「宵っばりの朝寝坊」への移行、②学校生活時間の延長、③テレビ視聴時間の減少、④室内遊び時間の増加、⑤戸外遊び時間の減少、⑥日曜日の外出時間の大幅な増加がみられた。そして、これらの変化の原因として、①と⑥は、子ども自身の変化というよりも父母の生活様式の変化に影響されたもの、②は、カリキュラムの過密の結果、④と⑤は、相互に関連し、いずれも地域の遊び場環境の貧弱さに主として原因があり、それはまた⑥の影響を受けた結果である、と報告している。

また、遅くまで起きているチビっ子深夜族の追跡調査¹⁹⁾でも、その半分以上が、翌日の生活に影響が現れ、担任の先生に「なんとなくぼんやりしている」、「無気力さがめだつ」と思われていた。

このような生活時間のみだれは子どもの健全な発育発達を妨げ、

尚且つ、健全な大人への道を妨げるだろうが、近年この傾向がさらに強くなってきている。

第2節 調査対象の地域性

子どもの体力や健康状態というものは子どもの住む環境に大きく影響される。

その一つに都市化が考えられる。都市化とは一般的に、農村、漁村、山村など村落がしだいに都市に変化していく過程を指し、農村的な地域が都市的な地域へと変化するプロセスとされている¹⁴⁾。このような都市化が児童の体格に及ぼす影響について、大山⁵²⁾は農村サンプルと都市サンプルの児童の生活環境・家庭環境を体格などと比較した調査をしており、その結果、①都市化の要因のうち体格は、家庭の職業・経済・共働きの有無・運動時間・睡眠時間・運動の好き嫌い・広場の有無・遊びの形態・偏食の程度・牛乳飲用および肉食の程度との結びつきが強く、これらの影響を受けやすいことが推測されたこと、②身長および体重の発育にはリズムがあり、そのサイクルは都市児童の身長では約4か月、農村児童のそれは約6か月と推定されたことを報告している。

もう一つ考えなければならないことは、都市環境が子どもに健康

阻害²⁰⁾を及ぼすことである。

まず、オープンスペースの不足は幼児の戸外活動を制限し、身体的発達はもちろんのこと、戸外における友人との集団的遊びの機会の減少などがもたらすことで、その結果、情緒や社会性の発達への影響も重大な問題である。

第2として物的な環境破壊によって自然の循環メカニズムをも破壊することにもなり、人類の生存にとって、重大な危険を招く。Ritterは紫外線を発見したが、その紫外線の人体への作用としては、人体皮膚に対してその充血を来す紅斑作用、ビタミンD生成、胃液分泌・増加や血球の増生など新陳代謝促進作用、日光消毒の殺菌作用などが知られ、紫外線の不足は人体の健康に悪影響をもたらすと報告している²¹⁾。また紫外線が子どもの発育に与える影響について宇留野は、東京の一地区で日光浴をさせている乳児と、させていない乳児の発育（身長・体重）を比較した結果、日光浴をしている乳児の方が発育がよかったと報告している²²⁾。

第3は「都市の家族の形態や意識と関連する問題」が考えられるが、大橋⁴⁸⁾は、都市の家族には、小規模な核家族が多く、近代的な生活意識を保有し、親子関係においては、子どもに対する親の期待感がたかく、また乳幼児期における過保護傾向が目立つというが、事実、親の健康教育においても、疲れないように余り遊ばせない、

かぜをひかないように厚着をさせる等の過保護の態度が前進し、子どもの健康増進に不可欠な、適当な鍛錬の機会を消失している点が問題であるとしている。平井⁵⁾は、都市の児童の心身の発達を阻害する因子として、遊びの空間の消失・遊び時間の減少・遊びの相手になる児童数の減少・両親の養育態度にかたよりが生じたことなどをあげている。

このように、都市環境が及ぼす子どもの健康阻害は大きいといえる。そして、前述した3つの問題点が子どもたちの生活や健康状態への影響について、遊びとの観点から、高城ら⁶⁵⁾は、大都市また比較資料として中都市・農村に分け、園児計450人を対象に調査を行った。その結果、大都市で「持病がある」子どもの発現率が高かったことと「微症状」を有したものが比較的多かったこと、を報告している。

さらに、都市部で高層階に居住している子どもにとって、そこに住むことが外遊びの疎外要因になるかどうかについて議論がなされる。山本ら⁶⁹⁾は、高層集合住宅と子どもの遊びや発達に関する研究の中で、高層階に居住することは、外遊びにマイナスの影響を与えるが、母親などの介在によって、その影響のあり方は変わってくる、と報告している。

以上から、「食習慣」「運動」「休養」と子どもとの関わりにつ

いての文献を見てきたが、それらを規則正しくとること、つまり、健康によい生活習慣を身につけることが、子どもの発育・発達によい影響を与えられられる。

第3章 本研究の目的

高齢化が進むにしたがって人々が自立し活気ある生活にすることは、国の経済からみてもその重要性を増してきている。そのために早い時期から健康によいライフスタイルを身につけることが有意義である。一方、健全な成長を助長し、体力づくりや健康づくり、さらには健康についてのセルフコントロール等が生涯健康の観点から一層重要になってきている。

そこで、本研究では農村と都市の2地域の児童を対象にこれらの現状を把握し、体力や健康状態との関連を検討すると共に、生涯健康づくりの対策への方向性を見いだすことを目的とした。

第 4 章 方 法

第 1 節 調査対象

調査対象は千葉県下にある本埜村の小学校 2 校（A 校，B 校）と習志野市の小学校 1 校（C 校）の小学 4～6 年生の男女とした（以下 A・B 校は”農村部”，C 校は”都市部”とする）。

（１） 当該農村地区の概要⁴²⁾

「農村」と選定した本埜村は、千葉県下の北部に位置し、首都 40 キロ圏、県都千葉市 30 キロ圏という都市近郊の農村で、地形は平坦な田園地帯である。総面積は約 2245ha（田：1069ha，畑：202ha，宅地：94ha，山林：394ha，雑種地：15ha，その他：471ha）で気候は内陸型に近く、年間平均気温は 13℃ から 14℃ と概して温暖であり、降雨量は年間 1,300mm 前後である。また平成元年の人口は 4710 人で 1 世帯当りの平均世帯人員は 4.5 人であった。

（２） 当該都市地区の概要^{34) 35) 36)}

「都市」の住宅地として習志野市を選定した。習志野市は総武線沿線にあり、首都圏の中核都市として発展を続けている。総面積は約 2079ha（田：3ha，畑：235ha，宅地：1017ha，山林：10ha，雑種地：277ha，その他：537ha）で、年間平均気温は 15℃ 前後である。

また平成元年の人口は145,304人で1世帯当りの平均世帯人員は2.9人であった。

第2節 調査方法

協力頂いた各小学校において、調査についての主旨及び記入方法を説明した協力依頼状と調査用紙を、担任から児童に渡して家庭に配布した。

本埜村と習志野市の対象校の児童の保護者に記載を依頼し、記入後は指定した期日に児童を通して担任に提出させ、回収した。尚、対象学年に複数の子どもがいる場合は、上の子を対象とした。

また、体力テスト・健康診断については、調査表とは別に平成4年度に各学校で行われたものを参照した。

第3節 調査内容

調査表に記した内容の主なものは、

- ①生活時間（親子の就寝、睡眠時間、TV視聴、外遊び時間など）
- ②食生活について
- ③運動への関心、遊び場所、遊び内容、遊び友達などについて

- ④ 塾，習い事について
- ⑤ 養育態度について
- ⑥ 健康状態について
- ⑦ 家族構成，職業，居住状況，出身地域など

尚、平成4年5月に、順天堂大学体操教室に通う小学生計80名を対象に生活習慣に関する予備調査を行い、調査内容の妥当性をその後検討して確認した。

第4節 調査期日

調査期間は以下の通りである。

- ・ M1 小学校 1992（平成4）年6月22日（月）～27日（土）
- ・ M2 小学校 1992（平成4）年6月16日（木）～20日（月）
- ・ N 小学校 1992（平成4）年7月9日（木）～11日（土）

第5節 回収状況

回収状況は、表1の通りである。

農村部に当たるA校，B校は141人（男子：80人，女子：61人）、8

9.6%、また都市部に当たるC校では188人（男子：97人，女子：91人）、79%であり、全体では329人の83.1%の回収率であった。回収率については農村部で有意に多かった（ $p<0.01$ ）。

第6節 分析方法

各個人データの集計及び分析は、NEC-PC9801VM、分類集計プログラムを用いて処理した。

第 1 節 対象の概要

(1) 回答者の年齢構成

質問紙に回答した親は、農村部141人、都市部188人の計329人であった。

その年齢構成は、表2に示したが、農村部での年齢幅は30歳以上で、最も多い年齢層は「35～39歳」の43.9%、次いで「40～44歳」の33.9%であった。即ち、30歳代が61.2%を占め、40歳代は36.7%であった。

一方、都市部での年齢幅は25歳以上で、最も多い年齢層は農村部同様に「35～39歳」で43.1%を占め、次いで「40～44歳」が37.6%であった。即ち、30歳代が52.5%を占め、40歳代は46.4%であった。

年齢構成については、農村部で30歳、都市部で40歳代の回答者が目立った。

(2) 家族形態

調査対象の家庭の世帯人員数の割合を図1に示した。

農村部では「6人家族」が最も多く31世帯の22.1%を占め、次に「5人家族」及び「7人家族」が並んで27世帯の19.1%を占めていた。平均世帯人員数は5.6人であった。

一方、都市部をみると過半数を占めた世帯人員数は「4人家族」の59.0%で、平均世帯人員数は4.3人であり農村部より1.3人少なかった。また両地区の世帯人員「5人家族」以上の割合を比較してみると、農村部で94世帯の66.7%、都市部で50世帯の26.6%で農村部で有意に多かった($p<0.01$)。このことから、農村部では複合家族世帯、都市部では核家族世帯の傾向がみられた。このことは図2に示した曾・祖父母の同居の有無によって裏付けることができる。農村部について、曾・祖父母との同居の有無では、92世帯が同居で全世帯の65%（複数回答）を占めた。一方、都市部では、22世帯が同居で全世帯の11.7%を占めていた。特に「曾父」「曾母」が都市部には全くいなかったことが目立った。尚、国民生活基礎調査²³⁾の1世帯当りの平均世帯人員は3.05人で、三世代世帯の占める割合は13.5%であるということから、調査対象地域である農村部では全国の世帯人員および三世代世帯の平均値を上回っており、都市部では、三世代世帯において全国平均値より下回っていた。

（3） 主たる家計維持者の職業

主たる家計維持者の職業を図3に示した。

農村部については「専業」及び「兼業」を含めての「農業従事者」である者は43世帯の30.5%であり、農業従事者以外の職業に当たる

「自営業＋会社員及びその他の職業従事者」にある者の割合は62.8%であった。これに対して都市部の「農業従事者」は4件の2.1%であり、「自営業＋会社員及びその他の職業従事者」は89.5%にのぼった。

主たる家計維持者の職業の内訳は、2地域間に差がみられた（ $p < 0.01$ ）。

（４） 居住環境

「どのような種類の住宅に住んでいるか」について図4をみると、農村部では「一戸建て」が100%であるのに対し、都市部は22.6%にとどまり、一方、マンション、アパートなどの「集合住宅」が77.4%と多くみられた。この居住環境については2地域間に地域差がみられた（ $p < 0.01$ ）。

（５） 親の小中学生の時の出身地

親が小中学生の頃に一番長く住んでいた地域についてみると（表3）、農村部では「現在の村」いわゆる「地元」出身が41人の34.5%で一番多く、次いで「県内の町」が多かった。一方、都市部では県外の市出身者が56人の30.1%で一番多く、次いで「東京都23区内」が39人の21.0%であったことから、都市部に当たる地区は他か

ら移り住んで来たものが多いという結果であった。

また、両地区とも「県内出身」がどのくらいいるのか見てみると、農村部では91人の76.5%、都市部では57人の30.6%であり、農村部で有意に「県内出身」が多かった（ $p<0.01$ ）。さらに、都市部の県外の出身地域を見てみると、「東京都内」「県外の市」「県外の町」が目についた。このように都市部に住む親の出身地は比較的人口の多い地域、つまり、都市的地域から移り住んで来たものが多い傾向であった。このことは、福田など¹³⁾や渡辺⁶⁸⁾の交通の発達に伴って通婚圏は広がっていくとする報告や、人口が多い都市部の方が少ない農村部より通婚圏が広いとする辻等⁶⁷⁾の通婚圏に関する報告と一致するものであった。

第2節 子どもの体位、体力及び健康状態

(1) 体位

調査全児童の身長、体重、ローレル指数の平均値及び標準偏差を地域、男女別にまとめたのが表4である。

まず両地区の身長を比較してみると、4年生男子で農村部が都市部より有意に低い（ $p<0.01$ ）のであるが、5、6年生になると差がなくなっている。一方、女子でも有意な差はなかったが男子と同じ

ように農村部で、都市部を平均的に下回る傾向にあった。

次ぎに体重についてみると、4年生男子で農村部より都市部が平均して5.6kg高かった。しかし、学年が上がるにつれて農村部の体重が都市部を越えてきていることが分かる。女子については、両地区とも同等であった。

最後にローレル指数で体型を分類した。その分類であるが、伊藤ら¹⁰⁾の使用したローレル指数115未満をやせ群・115～144を普通群・145以上を肥満群の3群に大別した。男子では都市部の4年生が農村部よりやや高い値を示しているが、学年が上がるにつれて体重同様に農村部で高くなっている。女子では農村部が都市部を全学年で上回っていた。以上から全体的にみると、農村部では小柄で体重が重い、都市部では身長が高く体重が軽いという傾向にあった。

尚、身長及び体重に関して2地域とも文部省体育局発行の平成3年度版体力・運動能力調査報告書の中の農村的地域と都市的地域のそれぞれの体格の平均値と比較してみると、有意な差はなかった。

(2) 体力

体力については各小学校で平成4年度に行われた体力診断テストの成績をもとに検討した。

体力診断テスト各種目の得点(1～5点)のうち、4点あるいは

5点をとった者（以下”上位得点群”とする）と総合判定（A～E）でAあるいはBをとった者（以下”上位群”とする）の男女の人数とその割合をまとめたのが表5である。

農村部で上位得点群の占める割合が多かった種目は、瞬発力を測定した「垂直とび」と筋力を測定した「握力」であった。一方、都市部は、敏捷性を測定した「反復横とび」、筋力を測定した「背筋力」、柔軟性を測定した「伏臥状態そらし」と「立位体前屈」、さらに持久性をみる「踏台昇降運動」であった。総合判定でも上位群が多かったものは都市部で48人の47.1%であり、対象者の過半数近くが上位群を占めており、農村部と比較して有意に多かった（ $p<0.01$ ）。尚、文部省体育局発行の平成3年度版体力・運動能力調査報告書の中の体力診断テスト合計点と比較すると、農村部では農村的地域の平均値に比べ低く、都市部では都市的地域の平均値より高い傾向にあった。

（3）健康状態

健康状態については各学校で行われた健康診断記録（視力・目の疾病及び異常・虫歯の状況・心臓の疾病及び異常の有無・尿蛋白・尿糖）を使用し、この記録をまとめてみたところ、「目の疾病及び異常の有無」において、「有」と回答した者が農村部で10.6%、都

市部では0.0%であった。従って、農村部で目の疾病及び異常の出現率が有意に多かった ($p < 0.01$)。その他の項目については差は認められなかった。

一方、アンケート調査で親に、日常の子どもの健康状態及び様子を尋ねてみた (図5)。農村部で多かった回答は「猫背である」「歯並びが悪い」「すぐ横になりたがる」「貧血」「集中力がない」「体の痛みを訴える」であった。この中で特に有意に多かったものは「猫背である ($p < 0.1$)」であった。また都市部に比較的多く見られたものといえば「アレルギーがある」「疲労を訴える」「あくびばかりする」「ぜんそくがある」「背筋が曲がっている」「皮膚がカサカサしている」「虫歯がしやすい」「元気がない」「だるそうにしている」などであり、有意に多かったものは「背筋が曲がっている ($p < 0.1$)」「皮膚がカサカサしている ($p < 0.05$)」「元気がない ($p < 0.05$)」であった。

特に、都市部に「アレルギーがある」が多かったという点では、高城ら⁶⁶⁾の「子供の遊びと健康状態」の調査で都市児童は「冬になると皮膚がカサカサになる」「湿疹がしやすい」「あせもがしやすい」の皮膚の耐寒性、抵抗性の虚弱傾向が農村児より比較的高い発現率を示していた、という報告と関連づけられる結果であった。

第3節 子どもの生活の現状

(1) 遊びの現状

1) 遊び場：対象者のよく遊ぶ場所を地域別に比較したものが図6である。

2) 地域の男女とも一番多く遊ぶ場所は「家の中」（農村部：46.2％、都市部：45.9％）であった。次ぎに両地区の居住環境の違いもあって男女とも農村部では「庭先」で30.5％（都市部で庭先で遊ぶものは2.1％）、都市部では「公園」の22.9％であった（農村部で公園で遊ぶものは1.4％）。次いで、農村部男子15.0％、都市部男子11.3％、女子8.8％が「空き地」で遊んでおり、農村部女子だけ「校庭」9.8％であった。第1位は両地区とも「家の中」が多かった。これは、「子ども白書」⁴⁰⁾の中の現代っ子の遊び場の調査でも自宅の中（43％）が圧倒的に多かったことや、対象は異なるが、平井・千羽ら⁶⁾の幼児の遊び場の調査で、都市幼児は、自分の家の屋内が56％で、農産村幼児は36％といずれも、遊び場の中で1位を占めていたという報告と一致するものであった。

2) 遊び友達：日頃の遊び友達の人数を尋ねたところ図7の通りであった。両地区とも「2，3人の友達」と遊ぶものが60％を越えていた。

3) 遊びの種類：それぞれの地域において、先に示した「遊び場」などの因子が影響するであろう子ども達の遊びの種類について、よくする遊びを上げてもらった（図8）。

その結果、農村部男子は「野球」31.3%、「自転車乗り」22.5%、「走り遊び」および「室内ゲーム」8.8%の順であり、女子については「自転車乗り」21.3%、「TV」13.1%、「走り遊び」および「トッチボール」11.5%の順であった。

一方、都市部は男子で「サッカー」18.6%、「野球」15.5%、「室内ゲーム」12.4%の順で、女子では「走り遊び」18.7%、「読書」17.6%、「自転車」12.1%の順であった。都市部男子の遊びは、農村部男子のものとさほど変わらなかった。

（2） スポーツクラブ

学校で行っているクラブ活動及びスポーツクラブの参加の有無について尋ねた。その結果、農村部では69人の49.3%、都市部では100人の54.1%と2地域ともほぼ過半数の参加が認められた（図9）。

ではどんなスポーツクラブに通っているかというと、上位3つをみてみた。男子は農村部で「野球」16人（30.2%）、「バトミントン」14人（26.4%）、「水泳」12人（22.6%）であり、都市部では「サッカー」27人（31.8%）、「水泳」21人（24.7%）、「野球」

15人（17.6％）の順であった。また女子は、農村部で「バスケットボール」7人（31.8％），「水泳」及び「バトミントン」4人（18.2％）であり、都市部は「水泳」20人（45.5％），「バスケットボール」14人（31.8％），「バレーボール」6人（13.6％）の順であった。さらにそれぞれの通っている日数を尋ねたところ、農村部で男女とも週2回以上通っているものは少なかったが、都市部では非常に多く、多いものでは「毎日」通っているものもいた。

（３） 学習塾・習い事（おけいこごと）

図10に学習塾・習い事の参加の有無について示したが、加入しているものは農村部で95人の68.4％、都市部では185人の84.3％で、都市部については加入していないものはわずか29人しかいなく、都市部で有意に多いことが認められた（ $p<0.01$ ）。

どんな種類の学習塾，習い事に通っているかというところ、男子では2地域とも「学習塾」が最も多く（農村部30人：45.5％，都市部50人：50.0％）、次いで農村部では「そろばん」14人（21.2％），「習字」12人（18.2％）で、都市部では「習字」23人（23.0％），「そろばん」11人（11.0％）の順であった。一方、女子では農村部で「ピアノ」25人（30.1％），「習字」20人（24.1％），「学習塾」16人（19.3％）であり、都市部では「学習塾」51人（47.2％），「

ピアノ」32人（29.6%），「習字」30人（27.8%）の順であり、都市部男女共、農村部に比べ「学習塾」加入者が有意に多かった（ $p < 0.01$ ）。

（４） 外遊び時間

日常の平均外遊び時間については表6に示した。

これをみると、農村部男子については「平日」1時間46分、「休日」4時間48分で、休日は平日の約3倍遊んでいた。「休日の前日」では平日及び休日の外遊び時間の間の値を示した。一方、都市部男子は、「平日」1時間18分で農村部より30分短く、また「休日の前日」2時間5分で農村部よりも1時間短く、さらに「休日」3時間19分で農村部より1時間30分短く遊んでいた。休日の外遊び時間は農村部同様、平日の約3倍の時間であった。

一方、農村部女子については、「平日」1時間15分、「休日の前日」2時間12分、「休日」3時間27分であり、都市部女子より「平日」で17分、「休日の前日」で53分、「休日」で1時間4分も長く遊んでいた。

全体的にみると日常の平均外遊び時間は農村部男子で、3時間12分、女子で2時間18分、また都市部男子で、2時間14分、女子で1時間33分であった。農村部は都市部より週日1時間近く多く遊ん

でいた。また、農村部女子と都市部男子の外遊び時間がほとんど変わらないことや、日常を通して都市部男子の外遊び時間が農村部女子の外遊び時間とほとんど変わらなかったことから、都市部の子どもの外遊び時間の少なさが目立った結果であった。

日常の外遊び時間については2地域間に地域差が認められた ($p < 0.01$)。

(5) テレビ視聴時間（ファミリーコンピュータも含む）

都市部において外遊び時間が農村部に比べ少ない結果を得たが、その代わりにテレビ視聴などの室内遊び時間が農村部に比べ長いのではないかと推測した。

その結果を表7に示したが、「平日」では男子23.2分、女子で1時間16分、また「休日の前日」で男子25.5分、女子で平日とほぼ同じ1時間17分、さらに「休日」では男子37.9分、女子1時間33分と、農村部が都市部よりかなり長く遊んでいた。特に農村部女子の日常の平均TV視聴時間は3時間45分で、農村部男子の3時間8分を大きく上回っていた。また、農村部女子の「平日」と都市部女子の「休日」の視聴時間が約3時間と同じ事からも農村部女子は、“よくテレビをみている”ということがわかった。

テレビ視聴時間については農村部で都市部より有意に長かった（

男子： $p<0.05$, 女子： $p<0.01$ ）。

（６） 就寝・睡眠時間

子どもの就寝・睡眠時間などのいわゆる生活時間を考える際、その親の生活時間と深く関係するのではないかと考え、対象者の親の就寝・睡眠時間も尋ねた（表８）。

まず、親の平均時間をみると、「平日の就寝時間」は、農村部で22時42分であるのに対して都市部では23時12分と、約30分、都市部の親は農村部の親に比べて遅くまで起きていた。「睡眠時間」では、農村部7時間、都市部6時間42分と都市部の方が短かった。「休日の前日」、「休日」の就寝時間でも都市部の方で約30分遅く、睡眠時間については変わらなかった。「休日の前日」になると両地区とも普段よりは遅くまで起きていた。

以上から親は、農村部では早寝早起きの傾向にあり、都市部は遅くまで起き、朝は農村部よりもやや遅く起床するという傾向であったが、睡眠時間は農村部より都市部の方がやや短かった。

2地域間に有意差が見られたものは表８の通りである。

一方、子どもの就寝・睡眠時間を見てみると、農村部は就寝時間が早く、都市部はやや遅い傾向であった。睡眠時間については「平日」で都市部が農村部より有意に長かった（ $p<0.05$ ）以外は差はな

かった。

以上のことから、子どもの就寝時間は親の就寝時間に影響している結果であった。

（７） 家事手伝い

機械化の発展に伴い子どもの家事労働への参加が減少し、それが子どもの生活に影響しているのではないかと考え、子どもの家庭での手伝いの状況を尋ねた。

その結果、図11に示すように農村部では51.4%、都市部ではそれよりやや多い59.3%であったのだが、全体的に見てみると2地域とも、およそ2人に1人しか手伝いをしていない状況であった。

次ぎに手伝いをするものの中で「力を使うものが多いか」を5段階方式で尋ねた（図12）。「非常にある」と回答したものは都市部で1人だけで、「比較的ある」と回答したものは農村部6人の8.2%で、都市部は5人の4.4%だけであった。「ふつう」と回答したものは農村部33人の45.2%で都市部は41人の36.0%であった。

以上から2地域とも家事手伝いで力を使うものは非常に少ないといえた。

家事手伝いと家事手伝いで力を使うものに関して、2地域間に有意な差はなかった。

第4節 対象の食生活の現状

(1) 摂取内容

対象児童の日頃の飲食物摂取状況を図13に地域及び男女別に示した。まず朝食であるが「毎日食べる」および「大抵食べる」ものが2地域とも95%近くおり、残りの5%に欠食時が見られた。尚、規則正しく朝食を摂取する児童と欠食児のローレル指数を検討したところ有意な差は得られなかった。また夕食では、100%近くのものが食べていた。

全体的にみて農村部で多く摂取していたものは、「ジュース」、「炭酸飲料」であり、少なかったものは、「チョコレート、クッキーなどのお菓子」及び「牛乳」であった。都市部で多く摂取していたものは「チョコレート、クッキーなどのお菓子」及び「牛乳」で、少なかったものは「ジュース」及び「炭酸飲料」であった。

以上をまとめると、農村部において都市部より有意に多く摂取していたものは「ジュース」($p<0.1$)、「炭酸飲料」($p<0.01$)などの糖分の多く含んだ嗜好飲料を摂取する傾向にあった。その逆に都市部が農村部より有意に多く摂取していたものは「チョコレート、クッキー等のお菓子」($p<0.05$)、「牛乳」($p<0.05$)であった。

(2) 摂取時の状況

栄養の面は十分でも、食べることを通して心が豊かに育たなければ子どもの健康は増進されないと考え、食事に際して家族がどの程度日常揃って食事ができるかについて尋ねた。

図14をみると家族が朝食で「必ず揃う」と回答したものでは、都市部が農村部の12.1%を上回る22.3%であり、有意に多かった ($p < 0.1$)。しかし、「必ず揃う + 殆ど揃う」では農村部が都市部を上回る結果となった。一方、「全く揃わない」を見ると都市部が多いことに気付く。さらに「余り揃わない + 全く揃わない」を見ると、都市部で有意に多かった ($p < 0.1$)。

次ぎに図15の家族揃っての夕食の状況を見ると、「必ず揃う + 殆ど揃う」と回答したものは農村部で60.3%であるのに対して、都市部は35.6%と農村部より有意に低かった ($p < 0.05$)。また、都市部で「余り揃わない」と回答したものは農村部の約2倍の値であった。

このことから都市部では家族揃っての朝食あるいは夕食が農村部より行われていない結果となった。

(3) 外食

1ヶ月の外食、店屋物利用状況では2地域とも平均1～2回が最も多く全体の6割を占めた。2地域間に有意な差は認められなかった(図16)。

(4) 親の調理への意識

親の調理への意識を示したのが図17で、農村部で「野菜を多くする」22.7%、「油や脂肪分を多くしない」17.0%、「栄養のバランスを考えて調理する」15.1%の順に意識して調理していた。一方、都市部については「栄養のバランスを考えて調理する」28.2%、「野菜を多くする」18.6%、「油や脂肪分を多くしない」13.3%の順であり、2地域で親の調理への意識に有意な差があった ($p<0.01$)。

第5節 子どもの体力、体格、健康状態と諸関連

(1) 親の出身地との関連（体力及び意識）

子どもの体力は親の小中学生の時の出身地の環境に影響するのではないかと考え検討を試みた。

その結果を表9に示したが、農村部では体力上位群が下位群を上回った出身地として、「現在の村」「県外の町」「県外の村」であり、尚、上位群が下位群を上回った地域は「県外の村」で、下回った地域は「東京23区内」「県外の市」で有意な差はあったのだが、標本数が少ないことから有意だとはいえなかった。都市部で上位群が多かった出身地は、全地域であった。その中で有意に多かった地域は「現在の市」($p<0.01$)、「東京都23区内」($p<0.01$)、「県

外の市」 ($p<0.01$) であった。しかし、確かに地域ごとに有意な差が認められたのだが、農村部で上位群が少ない出身地でも、都市部になると多い場合もあったことから、親の出身地は直接、子どもの体力に関係しているとはいいい難い結果となった。

次に出身地を大きく「市」「町」「村」「東京都23区内」「東京都23区外」に分け、それぞれの出身者の親が子どもの就学前に活発に動き回る外遊びをどの程度行わせていたかを検討した(図18)。人数の違いから「よくさせた+比較的させた」と「余りさせなかった+全くさせなかった」の両者を比較するのは困難であるが、前者のみをみると、特に都市部において、親が「市」の出身者に、子どもに活発に動き回る外遊びを行わせていた傾向にあった。

(2) 子どもの就学前の身体活動に対する親の意識態度

就学前に子どもに対して活発に外遊びさせることは、後の子どもの体力及び成長発達を助長させるのではないかと考え、その検討を試みた。

図19に示したように「よくさせた+比較的させた」群と「余りさせなかった+全くさせなかった」群に分け検討したところ、農村部では「よくさせた+比較的させた」群で体力上位群が12人(18.2%)であるのに対して「余りさせなかった+全くさせなかった」群では

1人（10.0％）であった。また、都市部でも農村部と同様に「よく＋比較的させた」群は41人（39.4％）で「余りさせなかった＋全くさせなかった」群は2人（18.2％）であったことから、就学前に親が子どもに活発に動き回る外遊びを意識して行わせることが、後の子どもの体力を助長する結果となった。

（３） 親の運動への関心及び実践

親の運動の好き嫌いが子どもの体力に影響しているかどうかを検討した（図20）。

その結果、農村部で「非常に好き＋比較的好き」な群は「余り好きではない＋嫌い」な群より、体力上位群がやや多かった。都市部でも同様の結果であった。よって、親が運動を好きである方が嫌いであるよりも、子どもの体力によい影響を与えるといえた。

尚、「非常に好き＋比較的好き」な群と「余り好きではない＋嫌い」な群の間での子どもの体力に有意な差は得られなかった。

さらに、親の運動の実践が子どもの体力に影響しているのはいかと考えこの点について検討した（図21）。

その結果、2地域で体力上位群の出現率は、「よくする＋比較的する」群より「余りしない＋殆どしない」群で多かったことから、親の運動の実践と子どもの体力との関係は見いだされなかった。

（４） 主たる家計維持者の職業と体力

主たる家計維持者の職業で農業かそれ以外かを子どもの体力と検討したところ有意な関係は得られなかった。

（５） 居住環境と親の子どもに対する怪我への心配

居住環境と子どもの外遊びに対する怪我への心配を尋ねた。

その結果、図22に示すように農村部は「集合住宅」がなく「一戸建て」のみであったが、「あまり心配しない」41.2%と一番多く、次いで「どちらでもない」24.8%であった。都市部は居住環境に関わらず「あまり心配しない」が多く、次いで「どちらでもない」であった。居住環境による親の子どもに対する怪我への心配に有意な差は見いだされなかった。

（６） 曾・祖父母の同居と間食の問題

まず、曾・祖父母の同居と子どもの間食摂取量については有意な差は得られなかったが、曾・祖父母と同居している子どもの方がしていない子どもより間食を比較的多く摂取している傾向にあった。特に、農村部で「祖母」がいる者に間食摂取量が多かった（図23）。
では、このように曾・祖父母と同居している子どもがしていない

子どもより間食摂取量が比較的多ければ、子どもの体位にも影響してくるのではないかと考え、それについてローレル指数を用い検討してみた。

その結果、農村部ではローレル指数110未満の「やせ群」が、曾・祖父母と同居している子どもで39人、同居していない子どもで5人（ $p<0.01$ ）であり、141以上の「肥満群」では同居している子どもで24人、同居していない子どもで9人であった。

一方、都市部では曾・祖父母が同居している子どもが全体の17%しかいないため検討し難いのだが、明らかに同居している子どもに多かったのはローレル指数141以上の「肥満群」であった（ $P<0.01$ ）（図24）。

以上から、曾・祖父母と一緒に同居している子どもに「やせ」および「肥満」が比較的多いという結果であった。

（7） 体力と肥満度

体力と肥満の関係を示したのが図25であるが、体力上位群ではローレル指数120～130の基準値を含むその前後の値を示すものが多く、体力下位群ではローレル指数160以上の肥満児が多く見られた。

（8） スポーツクラブ及び塾の加入の有無と諸関連

1) 外遊び時間

スポーツクラブ及び塾加入の有無及び塾などに加入していれば当然、遊ぶ時間が短くなる。そこで「平日」「休日の前日」「休日」のそれぞれの日において、加入している児童と加入していない児童の外遊び時間を比較した。

まず「平日」での農村部のスポーツクラブ加入者と無加入者とを比較してみると、図26に示したように加入者で「4時間以上」遊んでいるものが無加入者よりやや多く、全体的にみて加入者の方が外遊び時間が長かった。塾加入者では「1時間30分未満」が多く、無加入者はそれ以上遊んでいるものが多かった。都市部ではスポーツクラブ及び塾加入者において「30分未満」しか外遊びをしていないものが目立った結果となった。また塾無加入者の外遊び時間は加入者よりも有意に長かった ($p<0.05$)。

以上から平日の外遊び時間において、農村部のスポーツクラブ加入者は無加入者よりも長く遊んでおり、また都市部については、加入者と無加入者の外遊び時間に差はなかった。塾では2地域とも無加入者の方が加入者より長く遊んでいた。

次ぎに「休日の前日」の外遊び時間を図27に示した。スポーツクラブ及び塾加入の有無を問わず、都市部は農村部と比較して「1時間未満」の外遊び時間が目立ち、その逆に農村部は「3時間以上」

の外遊び時間が目立つ結果となった。「休日の前日」も「平日」同様に農村部でスポーツクラブ加入者は無加入者より長く外遊びをしており、都市部では加入より無加入の方がやや多く外遊びをしていた。塾では2地域とも無加入の方が加入者より長かった。

最後に「休日」の外遊び時間を図28に示した。外遊び時間が多くとれるであろう「休日」でも都市部では「30分未満」が、特にスポーツクラブ加入、無加入および塾加入者に見受けられた。2地域とも「4時間以上」が目立ち、特に農村部でそれが顕著であった。

以上、週日を通して2地域ともスポーツクラブ加入者は無加入者より外遊び時間が比較的長い傾向にあり、体力に好影響を与えていると推測できる結果であった。また塾加入の有無では無加入の方が加入者よりも長い時間外遊びをしていた。

2) 体力

先でも述べたようにスポーツクラブ及び塾加入の有無において、児童の外遊び時間によって体力に差が現れたが、その加入の有無が体力にはどのように反映しているのかを検討した(図29)。

その結果、農村部のスポーツクラブ加入者は体力上位群が13人の28.2%で無加入者は5人の10.0%であった。また無加入者での体力下位群は加入者よりも有意に多かった($p<0.01$)。一方、都市部で

も加入者に上位群が多かった。しかし、無加入者に農村部同様下位群が多い結果は現れなかった。

次ぎに塾加入の有無であるが、2地域とも上位群に加入、無加入で体力に有意な差はなかったのだが下位群が加入者に、農村部で25.8%、都市部に7.9%で無加入者より有意に多かったことも特徴的であった（農村部： $p<0.05$,都市部： $p<0.01$ ）。

3) 健康状態

設問で親に、日常の子どもの様子および子どもが訴えている自覚症状を尋ねたが、それらの訴えはスポーツクラブ及び塾の加入の有無によって違ってくるのではないかと考え、その関係を検討した。

表10に示したスポーツクラブでは、農村部で「猫背」、都市部で「転んだとき手が出ない」「虫歯ができ易い」であり、2地域を合わせた全体のものでは、加入者に比較的多い項目として「アレルギーがある」「疲労の訴え」であり、無加入者に出現率が有意に多かったものとしては、「あくび（ $p<0.1$ ）」「歯並びが悪い（ $p<0.05$ ）」「虫歯ができ易い（ $p<0.1$ ）」であった。

次ぎに塾の加入の有無との関係を示したのが表11であるが、加入者に地域を問わず比較的多かった項目として「アレルギーがある」「疲労の訴え」「喘息がある」「歯並びが悪い」「虫歯ができ易い」

「集中力がない」「体の痛みを訴える」であった。また都市部の加入者に「全身にだるさを感じている」というものも少なからずあった。

スポーツクラブおよび塾に加入しているものは地域を問わず、「疲労の訴え」「すぐ横になりたがる」「集中力がない」「体の痛みを訴える」など少なくなき、特に塾に加入しているものに訴えが顕著に出現していた。

（９） 子どもの就学前の身体活動に対する親の意識態度

先で、就学前に親が子どもに活発に動き回る外遊びを意識して行わせることが後の子どもの体力を助長する結果を得たが、さらに精神的要素にあたる「積極性」にも影響するのではないかと考え検討した。尚、子どもに「積極性」があるどうかは５段階方式で親に尋ねた。

２地域とも「余りさせなかった＋全くさせなかった」群は人数が、農村部で回答数17件、都市部では12件と小数であったので考慮しなかった。「よくさせた＋比較的させた」群では「積極的＋比較的積極的」＜以下”積極的群”とする＞（農村部：52.5%，都市部61.4%）である群が「やや消極的＋消極的」群＜以下”消極的群”とする＞（農村部：13.1%，都市部11.0%）を有意に上回る（ $p<0.01$ ）

結果となった。このことから、就学前に親が子どもに活発に動き回る外遊びを意識して行わせることは、後の子どもの性格に好影響を与える結果となった（図30）。

（10） 子どもの体力と性格

子どもの体力と積極性について検討したところ、図31の通り2地域とも体力上位群が体力下位群よりも顕著に積極的群が出現した（ $p<0.01$ ）。

（11） 肥満度と性格

子どもの体位が子どもの性格に影響しているかどうか検討した（図32）。

その結果、消極的群の人数が少ないこともあり積極的群と比較検討できなかった。しかし、一つだけいえたことは120～130の基準値を含めその前後に積極的群が多いことである。

（12） 家事手伝いの有無と体力

家庭での手伝いの有無によって体力があるかどうか検討した。

図33のように農村は手伝いの「ある」群では体力上位群が12.5%であるのに対して、「ない」群では30.6%で手伝いの「ない」群に

体力上位群が存在した。一方都市部では体力上位群「ある」群で38.0%、「ない」群で33.3%でやや「ある」群に体力が高いものが存在していた。

以上の結果から、2地域間でそれぞれ異なっていたことより、手伝いの有無に体力は関係しないといえた。尚、家事手伝いの内容別によっても今後検討する必要がある。

人々が健康な生活を送るためには、Breslow²⁾の七つの生活習慣にもあるように、定期的にかかなり激しい運動をすることが重要で、そのためには体力は重要な要素である。一般的には、体力という言葉は、狭義の意味でとらえられ、生体がいかに力を出すか（行動を起こす能力）、いかに長く続けられるか（行動を持続する能力）といかにうまく行えるか（行動を調整する能力）などに分類³⁷⁾される。このように考えると体力とは、人間生活を営むにあたって、その基盤となる身体的能力である³⁸⁾、といえる。よって体力がない人よりもある人の方が健康生活を送るのに、よい条件をもっているといえる。

ここでは、前章の結果から子どもの生活背景が体力や健康状態にどのように影響しているのかを考察していきたい。

第1節 農村部の子どもを取り巻く生活の現状

対象地域別に1世帯当りの世帯人員数をみると、農村部では「6人家族」が22.1%と最も多く、平均世帯人員数は5.6人であった。一方、都市部では「4人家族」が59.0%と最も多く、平均世帯人員数は4.3人であった。平成2年の国民生活基礎調査²⁴⁾では平均世帯人員は3.05人であった。よって、農村部はそれよりも2.55人多かった

ことや4世代世帯および3世代世帯の出現率が65%であったことから、複合家族傾向にあったといえる。一方都市部では、4世代世帯はいなく3世代世帯のみ（11.7%）が存在したことから核家族化傾向にあったといえよう。

2 地域における主たる家計維持者の職業で農業に関連があるかどうかを見たところ、農村部の農業従事者は30.5%で、都市部では2.1%であった。

尚、農村部として本埜村に住む専業農家と農業収入の多い一種兼業農家の推移⁴³⁾を見ると、1979年当時は292世帯（100%）であったのに対し、現在（1988年）は164世帯（56%）と減っている。これは、本埜村が時代と共に農業の産業化における位置づけが変わったため、農業以外の収入の多い二種兼業農家に移行している世帯が増えたと推測される。そして、本埜村にその典型を見たといえよう。

一方、農業近代化または教育への投資等は少産化や養育の変化をまねいた。特に子どもの家事手伝いの中でしつけが行われ、そして社会への窓口でもあった。子どもは、農業を含めた家事手伝いなどを通して、自然に体力をつけていった。しかし、その労働力が必要となくなった現在、子どもは農業から離れた生活確立するようになり、また自作の農産物の種類も知らない子どもも増加してきてい

る。それにともなう子どもの体力も生活の中で、自発的な手伝いを必要とすることがなくなり、親が身体活動を意図して養育しない限り生活の中の手伝いで、体力は自然とつくことはなくなった。

また、2地域の主たる家計維持者の職業で農業従事者とそれ以外の職業との間に、子どもの体力に関連があるかどうかについて分析した結果、その関連はみいだされなかった。

第2節 居住環境と子どもの体力・健康状態とのかかわり

2地域の環境要因である居住形態について比較すると、農村部では一戸建ての占める割合が100%であるのに対して、都市部では22.6%にすぎず、一方、マンション、アパート等の集合住宅が77.4%と、居住環境に大幅な違いが見られた。しかし、子どもが一番よく遊ぶ場所に両地域共「家の中」と回答した者が多かったということは居住環境以外の要因であろうと推測された。農村部については、たんぼ、畑、原っぱなど、自然と触れ合う機会がたくさんあり、また、子どもの冒険心や探求心が身につく場所が豊富にあるのだが、家の中での遊びを求めたことは、「ファミコン」に代表されるテレビゲームの普及が推測される。都市部については、テレビゲームの普及も考えられるが、その他、交通の過密化、土地の高騰、ビルの乱立な

どで安全で変化に富んだ遊び場が消失したことや、また、遊ぶためにわざわざ学校の校庭や公園などに行かなければならず、遊びに対する意欲をなくしてしまったため、家の中に遊びを求めたと推測される。

第3節 生活の現状と子どもの体力・健康状態とのかかわり

ここではスポーツクラブ・塾加入状況，外遊び・テレビ視聴時間，就寝・睡眠時間，家族の食生活と体力，健康状態との関連について考察した。

まず、学校でのクラブ活動や地域のスポーツクラブ加入者は、2地域共、約2人に1人が参加していた。また、塾や習い事をしている者が農村部68%，都市部84%で都市部に多かった。

深谷³⁾は、東京都下の小学4～6年生約二千名を対象として、塾通いの調査を行った。その結果、塾についてであるが、クラスの何人かが塾へ行き始めると、行かない子は取り残されている感じて、その子も通塾する。それを見て、残りの子が塾へ行くという感じで、結果として、塾通いの効果は信じていなくとも、通塾率が高まってきた。また、塾通いの影響であるが、食欲がなくなった、睡眠時間

が減ったとは思ってはおらず、遊び時間の減少を訴えているものが多かった、と報告している。本調査の2地域を比較してみても（表6）、都市部の子どもの平均外遊び時間は週日、農村部より非常に少なかった。その分、都市部ではテレビ視聴時間（ファミコンをしている時も含めて）が長いだろうと予測したが、結果は逆に短かった。このことから、農村部はよく外で遊び、よくテレビを見る傾向にあり、都市部ではその逆で、余り外で遊ばず、テレビを見ている時間も少なかった。

このように、都市部の子どもの外遊び時間が少ないということは、身体活動の時間も少なく、その結果、体力や運動能力への影響があまり期待されないのではないかと推測された。しかし、2地域の子どもの体力診断テストの判定は表5に示すごとく、都市部において有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

清水⁵⁷⁾は、日常生活の中で身体活動を意図した多角的な育て方が、その子どもにとって後の身体活動により望ましい、と指摘している。このことに関連して、親が子どもの就学前に活発に動き回る外遊びをさせた場合はどうかについてみると、農村部70.2%，都市部76.6%で共に多かった。また、親が子どもと一緒に活発に動き回る外遊びをしたかについては、農村部22%，都市部44.1%で都市部の方が親が子どもの就学前に一緒に活発に動き回る外遊びをした者が有意

に多かった ($p<0.01$)。子どもと一緒に活発に動き回る外遊びの回答者を多くした要因として、都市部については子どもが自由に遊べる場所まで時間がかかり、また交通量も多く危険であるという背景のもとに親の意識や行動の違いが推測された。このことから都市部では親が意識して子どもの身体活動を助長するように関わりあっていたとみることができる。

一方、農村部は遊び空間が多く幼少期から比較的安全に自由にいつでもどこでも遊べることができるため、外遊びをさせる必要を意識することに到っていない人の割合が多かったと推測された。その結果、身体活動がやや低迷していると考えることができよう。

以上のように親が子どもに対して身体活動に対する意識を持つことや養育をすることが、子どもの発育、発達または将来の体力によい影響を及ぼすと考えられた。

このうち、体力への影響として大山⁵³⁾は、動的遊びをしている児童は静的遊びをしている児童より、運動能力は発達する傾向を示した。つまり、運動の質が体力に影響するとすれば、都市化に伴って運動できる広場が縮小しつつあることは重視されなければならない。また、体力は運動の時間や遊びへの形態、遊び場の有無といった条件よりも運動への意識、つまり運動のすき・きらいが最も大きなウエイトをしめており、すきな児童はそうでない児童より体力はすぐ

れていた、ということを報告している。清水⁵⁸⁾は、就学まで母親が戸外で遊ばせるように意図して育てた子どもは、小学校1年の段階で身体活動を好み、戸外での遊び時間が長い、このことから、乳幼児期にできる限り戸外で遊ばせ、より多くの身体活動の体験を積ませておくことが重要である、と報告している。

以上から、本節では清水⁶⁰⁾の報告を参考にし、小学校5、6年の時点で就学前の親の態度が子どもの体力診断テストの成績にどのように反映しているかを検討した。その結果、活発に動き回る外遊びをさせた群はそうでない群より顕著に体力上位群が多かった。このことから就学前に親が意識して子どもを戸外で遊ばせることが、子どもの後の体力によい影響を与えるということが裏付けられる結果となった。さらに、子どもと一緒に遊ぶ、子どもと外出したときに歩く、子どもが遊びやすいような服装・靴などの配慮をする、子どもが汚れて帰ってきても怒らないといったような、身体活動を助長する態度⁶²⁾や子どもの遊びに関してあまり干渉し過ぎないといった態度が、一層、体力を助長するのではないかと考えられた。

都市部については、遊び場の減少で家の中での遊びが多くなると考えられたが、小学校に入学して自ら外遊びを求めるような子どもにするためにも、就学前の親の配慮は大切だと考えられた。

次に、親の運動への好き嫌いとお自身自身が実際に運動しているかど

うかが、子どもの体力に影響するのではないかと考え、その検討を試みた。その結果、2地域とも親が運動をすることが好きな子どもに体力上位群が比較的多く出現した。このことは、清水⁶¹⁾の子どもの健康に及ぼす母親の意識・態度の調査で、母親の生育過程で身体活動を好んできた者は、そうでない母親と比べて、子どもをより積極的に戸外で遊ばせており、自らが身体活動を好めば、自分の子どもも積極的に戸外で遊ばせる、という報告に裏付けられる結果であった。また親自身が運動をしているかどうかについては、子どもの体力との関係は見いだされなかった。このことより、親自身の運動実践にこだわるよりも子どもに対する親の運動や身体活動への意識、理解などが子どもの発育・発達を促すのではなかろうかと考察された。

子どもの遊びについてであるが、Hurlockは、遊びには、身体的、治療的、教育的、社会的、道徳的価値を認めているが、児童期における遊びの実現状態は、将来の人間形成にとって、極めて重要な意味をもつものである¹⁶⁾と述べている。また、Havighurst⁶³⁾は、人間は各発達段階で果たすべき課題があるという発達課題について概念づけている。児童期（6～12歳）の課題として、①ゲームに必要な身体的技能、②自己に対する健全な態度、③友だちとの協調、④正しい性役割、⑤読み、書き、計算の基礎的技能、⑥日常生活に必

要な概念形成、⑦良心、道徳性、価値観の確立、⑧自主性、独立性、⑨民主的な社会的態度、をあげている。ほとんどの課題を達成するためには遊びを通して学んでいくもので、遊びを十分にしないで次のライフステージに行くことは成長発達の面で好ましいことではなく、人生を乗り切っていく上でも遊びは大切なことである。さらに、幼少期から親が意識して子どもに戸外で活発に遊ばせることが後の子どもの体力にも、よい影響を与えようといえよう。

スポーツクラブの体力に及ぼす影響について検討したところ、2地域でスポーツクラブに加入している者の割合はほとんど変わらなかったが、しかし、加入者の体力をみると、農村部での体力上位群は28.2%であるのに対して都市部はそれより多い39.5%であった。つまり、同じ加入状況でも都市部の子どもに体力上位群が多く出現した背景には、加入の割合は同じでも通っている回数が都市部で多かったことや、早い時期から専門の指導者に遊びを含めいろいろなスポーツを習っていることが体力上位群を多くした要因と考えられた。

正木²⁶⁾は「最近の子どもは体格はよくなったが、体力がない」とよくいわれるが、実際は体力は年々向上している。にもかかわらず、尚、体力低下を実感させている点として、かつては体力がもっとも

充実していたのは20歳代中頃であり、最近の体力合計点のピークは17歳と若くなっており、体力充実の年齢の早熟化がみられる。そして、正木²⁷⁾は「子どものからだーからだをみつめる」の中でポーランドの人類学者ナポレオン・ヴォランスキーは、この体力のピークが早くなるほど、それ以降の低下が著しいといっている。さらに、この点での早熟化は早老化につながる、と述べ、青年期の体力がかつてに比べて低下しているという実感から、子どもの体力低下が予感される結果となった、と述べている。

このことから、全体的にみて都市部で体力が高かったということは、農村部に比べて体力のピークが早かったとも解釈できよう。

次にスポーツクラブ・学校のクラブ活動、塾・習い事の加入の有無によって健康状態はどうであるか検討してみた（表10，11）。

その結果、まずスポーツクラブ及び学校のクラブ活動の加入の有無に見られた特徴として人数を見ると、農村部の無加入者に猫背、また、両者に集中力ないなどといった、生活面のゆるみや怠惰による訴えが多くみられた。一方、都市部で塾及び習い事の加入者において、猫背、疲労の訴え、背筋が曲がっている、すぐ横になりたがる、集中力がないなど、都市部の児童に塾による疲れのほか、アレルギーの訴えが多かった。その理由として、自然とふれあう遊び場

がない、食生活の不規則、親との会話がな、などといったことが
ストレスになったりしており、また心身の健康を損ねている状態に
あると考えられた。

2 地域の家族揃っての食事の状況であるが夕食において農村部は
殆ど揃うと回答した者が60.3%であるのに対して、都市部は35.6%
で有意に低かった ($p<0.05$)。都市部で夕食に家族揃うことは少な
いという背景に、先の子どもの塾、父親や母親の通勤時間や勤務時
間の都合が考えられよう。家族バラバラに食事をとることや不規則
な食事は子どもの栄養の面、精神面あるいは成長発達の面で好まし
くなく、都市の方に問題が多いと考えられた。

乳幼児期から15歳までという生まれてから中学時代までの成長発
達の盛んなときに、基本的な生活習慣をしっかりつけ、大人に向か
って羽ばたく準備をする必要がある。その中で健康的な食習慣（食
事の内容、方法）を習慣づけながら学習させていくことは、子ども
の成人病の予防をはじめ健康なライフスタイルづくりにおいて、き
わめて大切な親の役割⁴⁴⁾である。また、親子の接触の大切さの面で、
職場の週休2日制、学校での週休2日制の他、父親の育児休暇など、
今後考えて行かなければならない問題である。

第4節 曾・祖父母の同居と子どもへの影響

農村部で顕著にみられたのが曾・祖父母との同居であった。この曾・祖父母との同居が子どもの性格形成と関係してくるのではないかと考えた。

西久保⁴¹⁾によれば、出生率の低下は、家庭における子供同士の育ち合いの機会を減少させることになるだけでなく、親のエネルギーが子供に”ほどよく”注がれにくくなり、子供の社会化にとってマイナスになる。その意味で、三世代世帯家族のよさが見直されるようになってきているともいえる、と述べている。このことから、祖父母の存在がよい方向に働けば子どもの成長・発達によい影響を与えると推測される。

しかし、中原³³⁾によれば、親子の場合は、子どものどの発達段階においても、常に、内在する自己活動の可能性を百パーセント実現するための方略を考えあう関係を維持することができるが、祖父母－孫関係のように、かわいさが先行し、かつ養育に対する責任意識の希薄さを伴いやすい場合には、子どもに対して大人が一方的に支配し、子どもが無条件に服従するような関係を固定化しがちになる。この場合、子どもの自我は未成熟のままに青年期を向かえることになり、依然として支配的な関わりを保とうとする家族に対して、いわゆる”家庭内暴力”のような行動を発動せざるをえない状態へと

追いやる危険性がある、と述べている。

以上から、祖父母の存在が、孫に対して、食生活、その他のしつけの面で甘やかすといった行動がとられれば、子どもの成長発達によい影響は与えないと考えられる。そこで今回は、子どもの間食の状況を把握し、曾・祖父母の同居が食習慣においてどのように関わっているのかを検討することにした。

まず、曾・祖父母の同居の有無別に子どもの間食摂取の程度を分析してみた。2地域とも同居しているものとしていないものに有意な差はみられなかったのだが、同居しているものの中で、間食を毎日食べていると回答した者は、特に、祖母との同居者に多かった。

次に曾・祖父母の存在が前述した長島の報告のように、孫への甘やかし、特に、子どもの望むままにジュース、菓子などを与えるとか、食事も子どもの言うままになるので、子どもに自制心、あるいは自立心が育たず、甘いおやつ等を欲しいだけ食べてしまうことにより肥ることになるのではないかと考え、その関係について分析した。

その結果、曾・祖父母と同居している子どもに、農村部は「やせ」($p<0.01$) および「肥満」群が、都市部では「肥満」群($p<0.01$) が有意に多くみられた。尚、農村部におけるやせ群の出現であるが、図13に示したように農村部では全体的にみてジュース、炭酸飲料な

どの摂取が多い傾向にあったが、そのことが、三度の食事をしっかり食べることを阻めているのではないか、また2地域の「肥満」群の出現は食物の過剰摂取が原因ではないかと推測できた。

第5節 子どもの体力と性格への影響

一般的に体力は行動を起す能力、行動を持続する能力、行動を調整する能力などに分類される。そして体力とは、人間生活を営むにあたって、その基盤となる身体的能力であるといえよう³⁹⁾。

すなわち、子どもの健全な成長発達を促すためには、体力は必要条件であり、また体力をつくるというプロセスは健康の糧になっている。

松田ら²⁹⁾は、幼児の運動能力と遊びの中で、遊び友達の多い、つまり社会性の発達した幼児には運動能力の優れたものが多いと述べている。また、松永³¹⁾は運動能力の劣る幼児が社会性に欠けているという報告している。以上のようなことから体力をつけることは、物事を実行する時の原動力となる。そこで、対象地域の体力上位群とその性格特に積極性があるかどうか分析してみた。その結果、図31に示すごとく2地域とも体力上位群は体力下位群に比べ積極的な者が有意に多かった。積極的かどうかは親に尋ねたのであるが、親

も体力がある者を積極的と見ていたと推測できた。

以上、考察してきたことから、子どもの体力、健康状態を規定している要因は多々あるが、中でも、親の子どもへの運動、身体活動への意識態度は子どもの後の体力に好影響を与えるということが明らかにされた。また、2地域とも遊び場の第一位が「家の中」でありファミコンに代表されるテレビゲームの普及が考えられる。そして農村部ではオープンスペースが豊富にあり、子どもが安全に遊ぶことができるため、親が子どもの幼少期に意図して活発に動き回る外遊びをさせているものが都市部に比べ非常に少なかった。特に、農村部においてよく遊ぶ場所が「家の中」であったことから、農村という子どもにとって遊び環境の恵まれた場が十分に利用されなくなっているのではないかと思われた。さらに農村部においては将来自分の役割を果たすといった能力を身につけるための基礎となる家事手伝いが少ないことが調査から得られたが、この点について見直す必要があると思われた。

以上、子どもの体力や健康状態については、親が健康な生活習慣を身につけ、それを意図して養育することに大きな関係があると思われた。

本研究の結果及び考察から次のような結論を得た。

- 1) 現在、家事手伝いをしているものの割合は農村部で51.4%、都市部で59.3%であった。その中で比較的力を使うものがある、と回答した者は農村部8.2%、都市部4.4%であった。農村部についてはかつての、子ども＝労働力という関係の中、手伝いをすることで体力が自然についていったが、調査結果から家事手伝い自体少なくなっているということは、子ども＝労働力といった関係はさらに成り立たなくなっていると推測される。よって親が子どもの幼少期から、身体活動を意識した養育をしなければならないと考察された。
- 2) 本調査で、2地域とも体力上位群は体力下位群にくらべ、親が子どもの就学前に活発に動き回る外遊びをさせた者が多かった。また、農村部において外遊びをさせた者の出現率は18.2%で都市部の39.4%を有意に下回っていた ($p<0.01$)。このことから子どもの体力をつけるためには、幼少期は遊び場などの環境よりも親が子どもを遊ばせようとする意識態度が重要であると考察された。
- 3) 2地域とも体力上位群に積極的な性格の者が有意に多くみられた ($p<0.01$)。このことから、体力をつけることは子どもの性格形

成あるいは社会性にもよい影響を与えるものと思われた。

4) 主たる家計維持者の職業が農業かそれ以外かでは子どもの体力には有意な関係は見いだされなかった。

5) 2地域とも塾に加入しているものに、「疲労の訴え」「すぐ横になりたがる」「集中力がない」「体の痛みを訴える」などの自覚症状を訴えているものが多かった。

6) 曾・祖父母と同居している子どもと同居していない子どもとの間に間食摂取量に有意な差は認められなかった。しかし、農村部で「祖母」と同居している者に間食を毎日食べている者が多くみられた。また、曾・祖父母と同居している子どもに、農村部で「やせ」($p<0.01$) および「肥満」児が、都市部では「肥満」児が多くみられた。

日常生活の仕方が成長発達の助長と健康の保持・増進に大きく影響する。規則正しい生活確立し、健康な衛生習慣を身につけ、そして、成長発達段階や年齢にそった食のとり方、運動への動機付けと適切な運動の実施などを含め健康によいライフスタイルを身につけることは生涯健康の観点からきわめて重要である。

本研究では、子どもの生活背景を把握し、それらが体力や健康状態にどのように関わっているかを明らかにして今後の生涯健康のための教育に役立つ基礎資料を得ることを目的とした。

調査対象地区は、農村部として千葉県下にある本埜村と都市部として習志野市を選定した。そして、対象地区内の小学校の協力を得て、平成4年6～7月にかけて、小学4～6年生の児童（農村部159人、都市部238人）を対象にし、その保護者（主に母親）に質問紙を用いて質問し調査を行った。

質問紙は、対象者の生活時間、食生活、遊び場等、塾の加入状況、養育態度、健康状態等で構成した。

回収率は農村部89.6%、都市部79.0%であった。

その結果は以下の通りであった。

- 1) 現在、家事手伝いをしているものの割合は農村部で51.4%、都市部で59.3%であった。その中で比較的力を使うものがある、と回答した者は農村部8.2%、都市部4.4%であった。農村部についてはかつての、子ども＝労働力という関係の中、手伝いをすることで体力が自然についていったが、調査結果から家事手伝い自体少なくなっているということは、子ども＝労働力といった関係はさらに成り立たなくなっていると推測される。よって親が子どもの幼少期から、身体活動を意識した養育をしなければならないと考察された。
- 2) 本調査で、2地域とも体力上位群は体力下位群にくらべ、親が子どもの就学前に活発に動き回る外遊びをさせた者が多かった。また、農村部において外遊びをさせた者の出現率は18.2%で都市部の39.4%を有意に下回っていた ($p<0.01$)。このことから子どもの体力をつけるためには、幼少期は遊び場などの環境よりも親が子どもを遊ばせようとする意識態度が重要であると考察された。
- 3) 2地域とも体力上位群に積極的な性格の者が有意に多くみられた ($p<0.01$)。このことから、体力をつけることは子どもの性格形成あるいは社会性にもよい影響を与えるものと思われた。
- 4) 主たる家計維持者の職業が農業かそれ以外かでは子どもの体力には有意な関係は見いだされなかった。
- 5) 2地域とも塾に加入しているものに、「疲労の訴え」「すぐ横

になりたがる」「集中力がない」「体の痛みを訴える」などの自覚症状を訴えているものが多かった。

6) 曾・祖父母と同居している子どもと同居していない子どもとの間に間食摂取量に有意な差は認められなかった。しかし、農村部で「祖母」と同居している者に間食を毎日食べている者が多くみられた。また、曾・祖父母と同居している子どもに、農村部で「やせ」($p<0.01$) および「肥満」児が、都市部では「肥満」児が多くみられた。

謝辞

本研究を終えるにあたり、終始ご指導と、あたたかい励ましを賜りました野原三洋子教授にたいして、心から深く感謝申し上げます。

常にあたたかくご指導とご鞭撻を頂きかつ審査していただいた、山本武彦教授，鈴木克明教授，ならびに吉儀宏助教授に謹んで感謝申し上げます。

また、調査，集計，分析などに際し、ひとかたならぬご尽力をいただきました、土屋基助教授に深く御礼申し上げます。

本調査の実施にご協力いただいた、本埜村立第一および第二小学校，習志野市立向山小学校の校長先生をはじめとする諸先生方、そしてお忙しい中をご回答していただいた対象児童の保護者のみなさま方に、厚く御礼申し上げます。

さらに、研究期間中における本学の諸先生方のご援助、ご協力に対し、深謝申し上げます。

最後に、お手数をおかけした図書館ならびに事務局職員の皆様、また日々お手伝い下さった同研究室の大学院生、石川裕哲君ならびに生涯健康ゼミ及び人間生態学ゼミの4年，3年の学生諸君に心から感謝いたします。そして、大学院生一同のあたたかい友情に感謝いたします。

文 献

- 1) 朝日新聞：平成5年1月16日，朝刊から引用
- 2) Breslow.L: Persistence of Health Habits and Their Relationship to Mortality. PREVENTIVE MEDICINE,9,469-483(1980)
- 3) 深谷昌志：心理学の立場から－塾通いを手がかりとして．母子保健情報，12，(2)，21-28，(1986)
- 4) 原まどか，鈴木慎一郎，青木継稔，相沢 昭，須藤 弘：最近の小児・学童の食生活および食習慣－とくに肥満との関連について．臨床栄養，71，(2)，129-134，(1987)
- 5) 平井信義，千羽喜代子他：児童の生活構造の時代的変遷に関する研究，第一報．大妻女子大学家政学部紀要，9，(1973)
- 6) 平井信義，千羽喜代子他：前掲書 5)
- 7) 久岡文子，篠宮幸子，坂東絹恵：母親の指導態度と子供の食生活の関係．四国女子大学紀要，10，(1)，29-37，(1990)
- 8) 本間純子：幼児の運動能力に影響を及ぼす要因に関する研究－特に運動遊びについて．日本体育大学紀要，7，125-136，(1978)
- 9) 伊藤洋子，小川正行：児童生徒の体型と身体機能に関する研究－第2報 体型と運動能力との関連：学校保健研究，24，(6)，293-300，(1982)
- 10) 伊藤洋子，小川正行：前掲書 9)
- 11) 井上健治：子供の生活時間と遊び．東京大学教育学部紀要，13，(1973)
- 12) 株式会社学習研究社 編：今「子共」が危ない 「驚異の科学」シリーズ ⑩，28，東京(1992)
- 13) 印旛村史編さん委員会：印旛村史 通史，1-2，印旛村：千葉県印旛郡印旛村(1984)－土屋 基，野原三洋子：地域における人間生態学的アプローチのための基礎研究．順天堂大学紀要，34，32-57，1991,1992より引用
- 14) 北川健次：都市化，平凡者大百科事典，(1985)
- 15) 小林芳文：子どもの遊び－その指導理論．164，光生館
- 16) 小林芳文：前掲書 15) 1
- 17) 小林芳文：前掲書 15) 167
- 18) 小林芳文：前掲書 15) 167

- 19) 小林芳文：前掲書 15) 8
- 20) 小林芳文：前掲書 15) 44
- 21) 小林芳文：前掲書 15) 45
- 22) 小林芳文：前掲書 15) 46
- 23) 厚生統計協会 編：国民衛生の動向 平成3年．厚生の指標，38，(9)，40，(1991)
- 24) 厚生統計協会 編：前掲書 23)
- 25) 栗本閱夫，吉儀 宏，岩波 力：調整能力“上位群”と“下位群”に組分けられた幼児の比較．体育科学，7，106-114，(1979)
- 26) 正木健雄：からだをみちめる，双書・子どものからだ I．72-84，大修館書店：東京(1981)
- 27) 正木健雄：前掲書 26) 145-151，
- 28) 松田岩男，杉原 隆，南 貞己，和田 尚：幼児の運動能力と居住地区，遊び，母親の養育態度との関係について．東京教育大学部紀要，10，41-47，(1971)
- 29) 松田岩男，杉原 隆，南 貞己，和田 尚：前掲書 25)
- 30) 松永恵子：幼児の運動能力に関する一考察－性格との関係－．体育学研究，13，(5)，195，(1968)
- 31) 松永恵子：前掲書 30)
- 32) 森本兼曩，星 旦二：生活習慣と健康 ライフスタイルの科学．3-7，HBJ 出版局：東京(1989)
- 33) 中原弘之：親子関係．長島貞夫監修 性格心理学ハンドブック，104-105，金子書房：東京(1983)
- 34) 習志野市広報課 編：暮らしに役立つ市民ハンドブック，習志野市：10，(1992)
- 35) 習志野市広報課 編：習志野市勢要覧，習志野市：10，(1992)
- 36) 習志野市総務部行政課 編：習志野市統計書 平成3年版，習志野市：(1992)
- 37) 名取礼二：健康・体力づくりハンドブック その理論と指導．34，大修館書店：東京(1983)

- 38) 名取礼二：前掲書 37)
- 39) 名取礼二：前掲書 37)
- 40) 日本の子どもを守る会：子ども白書．羽仁説子 編，1974年版
- 41) 西久保禮造：親子関係．長島貞夫監修 性格心理学ハンドブック，336，金子書房：東京(1983)
- 42) 本埜村総務課 編：本埜村勢要覧，本埜村役場、(1989)
- 43) 本埜村総務課 編：前掲書 42)
- 44) 野原忠博，朝野 聡，野原三洋子：健康生活の社会学，82-93，高文堂出版社：東京(1990)
- 45) 岡田 晃，田中恒男：新健康管理論．4-5，南江堂：東京(1988)
- 46) 岡田 晃，田中恒男：前掲書 45)
- 47) 岡田 晃，田中恒男：前掲書 45)
- 48) 大橋 薫：都市社会学，川島書店：1971
- 49) 大国真彦：小児期の栄養と食生活．母子保健情報，10，(2)，42-57，(1985)
- 50) 大山良徳：都市化が児童の体格・体力に及ぼす影響．学校保健研究，21，(10)，464，(1979)
- 51) 大山良徳：運動能力の発達に關与する諸要因の因子分析的研究．体育学研究，13，(1)，58-65，(1968)
- 52) 大山良徳：前掲書 50) 51)
- 53) 大山良徳：前掲書 50)
- 54) 力石サダ，高橋みどり，三浦貴子：横浜市の食生活と学童の暮らしに関する調査研究，第1報－子供の生活背景と食生活実態概況．神奈川栄短紀要，21，47-54，(1989)
- 55) 力石サダ，高橋みどり，三浦貴子：前掲書 54)
- 56) Rubin,E.C.,and Braun,J.B.;Behavioral and learning disabilities associated with cognitive-motor dysfunction.Perceptual and Motor Skills 31,26(1968)
- 57) 清水信純：子どもの健康生活に及ぼす母親の意識・態度－身体活動との関連において．88-90，順天堂大学大学院体育学研究科修士論文：(1987)

- 58) 清水信純：前掲書 57)
- 59) 清水信純：前掲書 57)
- 60) 清水信純：前掲書 57)
- 61) 清水信純：前掲書 57)
- 62) 莊士雅子：フレーベル．牧書店，(1958)
- 63) 杉原一昭：発達課題－内山喜久雄．児童心理学事典，578-579，岩崎学術出版社：東京(1974)
- 64) 高田典衛，松浦義行，近藤充夫，森下はるみ，吉川和利：幼児期における調整力の生活との関連からみた構造と発達．体育科学，5，162-182，(1977)
- 65) 高城義太郎，小山一宏，小林芳文：幼児の positive health に関する研究，第1報，第2報．児童研究，53(1)，54(1)，(1974)，(1975)
- 66) 高城義太郎，小山一宏，小林芳文：前掲書 65)
- 67) 辻 義人，鈴木旬吾：福島市における通婚圏について．生物統計，2，4，(1954)
- 68) 渡辺 克：山村の民族衛生学的研究 第2報 金津地方の通婚圏．福島医学雑誌，6，(5)，6，(1956)．
- 69) 山本清洋，山宅紀子，山崎秀夫，舩本直文，酒井 誠：高層集合住宅と子どもの遊びや発達に関する研究－子どもの発達を規定する要因の分析．総合都市研究，27，65-74，(1986)

Study On Health Status And Physical Fitness Of Children Related To Their Leading Daily
Lives - Compared With Present Conditions In A Rural and In An Urban Districts -

Hitoshi HASUMI

The way of leading daily life brings great influence to maintain and to promote health. From the early stage of one's life, to establish normal life including as to 'eating' 'physical exercise' 'hygienic habits' 'sleeping and rest' etc. is effective to have healthy life style from the view point of life long health.

In order to grasp the present conditions of daily lives of children and to analyze them, the author carried out the investigation of questionnaire to the parents, mainly to the mothers of the objects from June to July 1992. The objects were school children from 4th to 6th grades and number was 159 in M village, a rural district, and was 238 in N city, an urban district. As to the rates of withdrawal was 89.6% in the rural district and was 79.0% in the urban districts, the number of the objects using analysis was 141 in the rural district and was 188 in the urban one. The questionnaire was consisted of items of 'eating' 'playing and playing places' 'attending so called Juku' 'the attitude of parents for fostering' etc.

The results were as follows;

- 1) 51.4% of the objects in the rural districts and 59.3% of the in the urban one answered that they used to help their domestic chores. Among them, 8.2% in the rural district and 4.4% in the urban one answered that they comparatively needed power when they engaged in their domestic chores. Before, the domestic chore itself needed power and children counted as important manpower of family members in agriculture and the other chores. Engaged in such works brought educational effects and increasing of physical fitness to the children. From the above, it seemed necessary that parents tried to prepare the domestic chores and to encourage them to engage in those works.
- 2) More parents of children who belonged to the group of higher physical fitness, intended to play their children actively in the open air from the early life stage compared with ones of children who belonged to the group of lower physical fitness in both districts.

The parents who put in practice for their children to play in open air in early life stage, was 18.2% in the rural district and this percentage showed significantly lower than 39.4% in the urban district ($p < 0.01$). In order to increasing of physical

fitness of their children. From the above, it was suggested that the parents put their children in the open air in order to be play in even in the rural district was necessary for increasing their physical fitness.

3) Among the group having high physical fitness, there were significantly more children whose personality were more positive($p < 0.01$) compared with personality of the children having not high physical fitness. It was suggested that increasing physical fitness brought effective influence to form personality.

4) There was not significant difference as to physical fitness between the family leaders whose main income were connecting with agriculture and the ones whose ones were not relation to agriculture.

5) Among children who attended to Juku, there more complaints of subjective symptoms as to 'complaint of fatigue' 'easily lay down' 'lack of concentration' 'complaint of pain of body' in both districts.

6) As ingestion of refreshments, there were no significant difference between children lived with grand grand father and/ or mother and grand father and/or mother, and children lived ^{with} not those families. In rural district, there were more children ingested refreshments in everyday among them lived with grandmother than those who lived no grand parents. There were significantly more skinny children in rural district ($p < 0.01$). and there were more overfed children in the both districts.

表 1 回収状況

小学校	対象数	回収数	
A	87 (100.0)	75 (86.2)	***
B	71 (100.0)	66 (93.0)	
C	238 (100.0)	188 (79.0)	
全 体	396 (100.0)	329 (83.1)	

数字=人数 (%) *** p<0.01

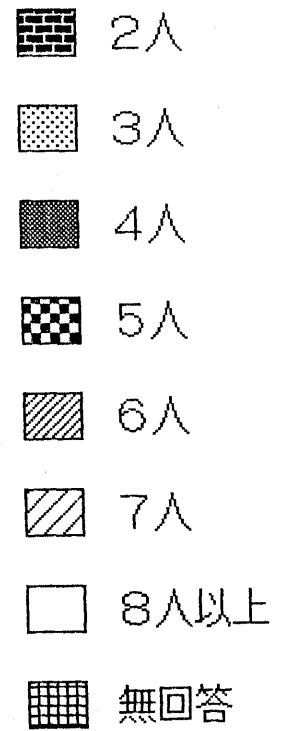
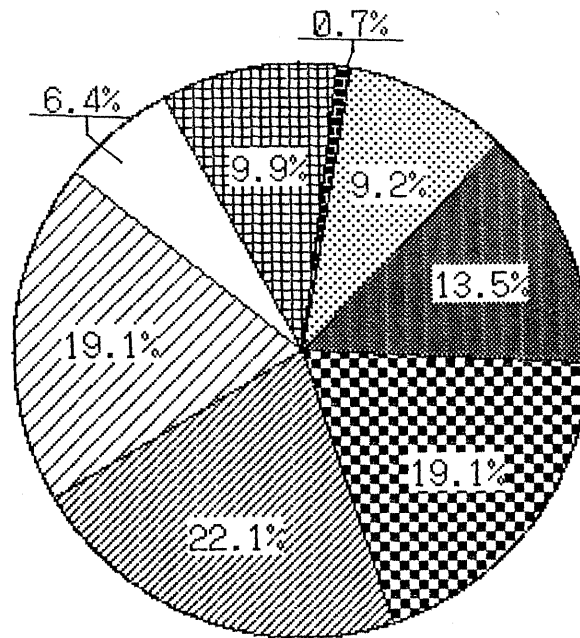
A, B = 農村部 C = 都市部

表 2 回答者年齢構成

年 齢	農村部	都市部
25～29才	0 (0.0)	1 (0.6)
30～34才	24 (17.3)	17 (9.4) **
35～39才	61 (43.9)	78 (43.1)
40～44才	47 (33.8)	68 (37.6)
45～49才	4 (2.9)	16 (8.8) **
50才以上	3 (2.2)	1 (0.6)
計	139 (100.0)	181 (100.0)

数字=人数 (%) ** p<0.05

農 村 部



都 市 部

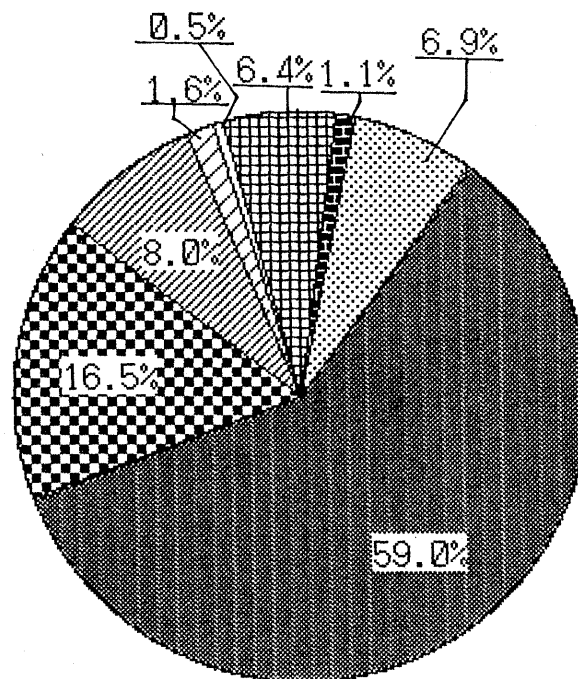
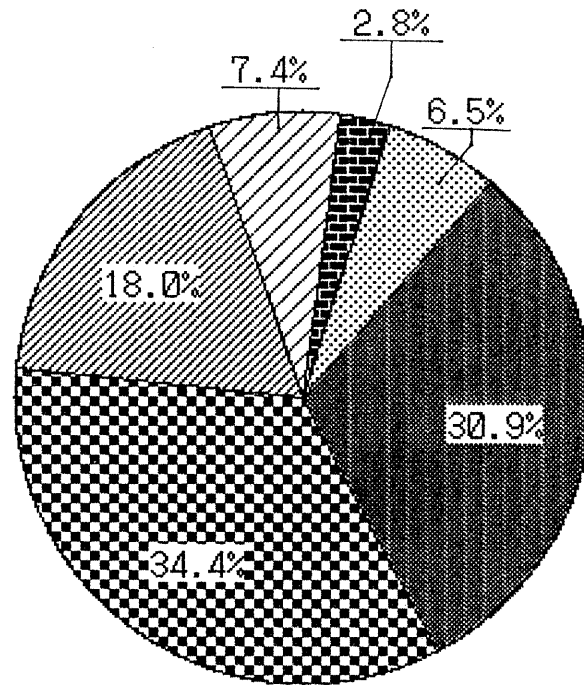


図1 世帯人員

農 村 部



-  曾祖父
-  曾祖母
-  祖父
-  祖母
-  いない
-  無回答

都 市 部

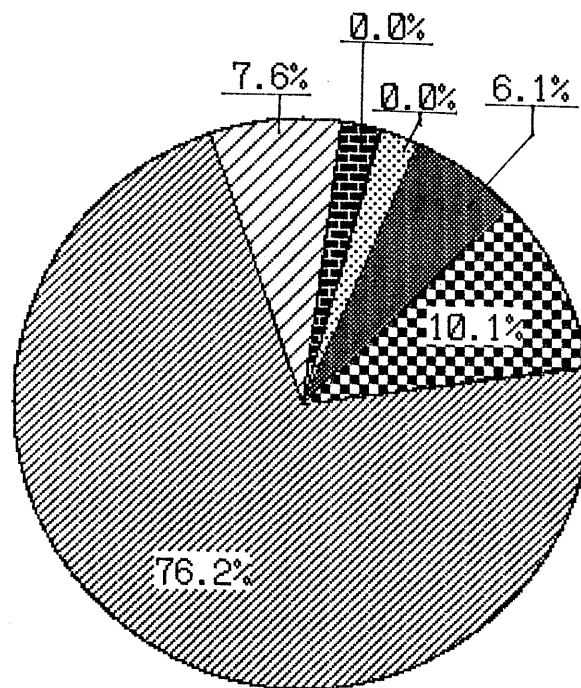
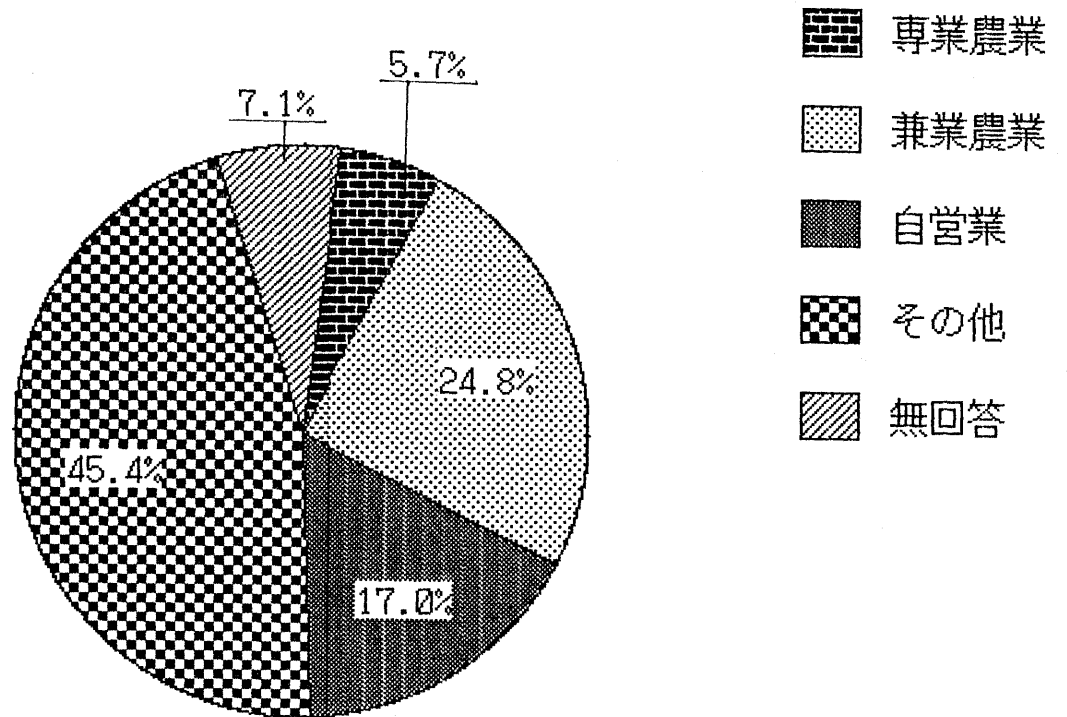


図 2 曾祖父母の同居の有無
(複数回答)

農 村 部



都 市 部

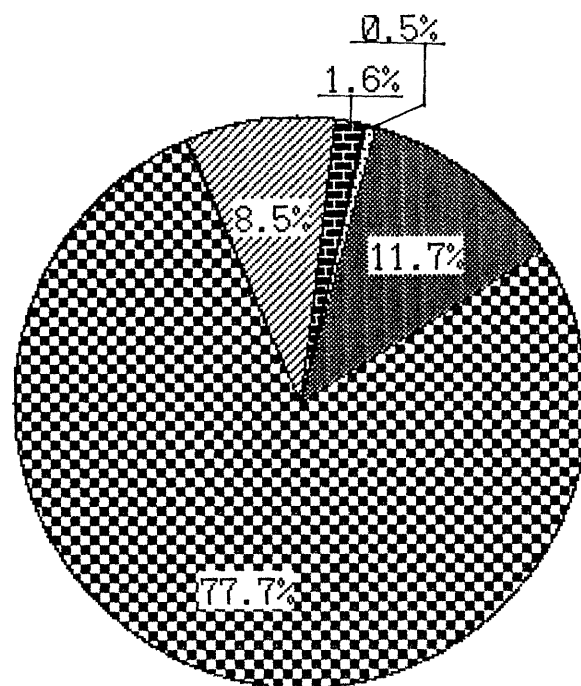


図3 主たる家計維持者の職業

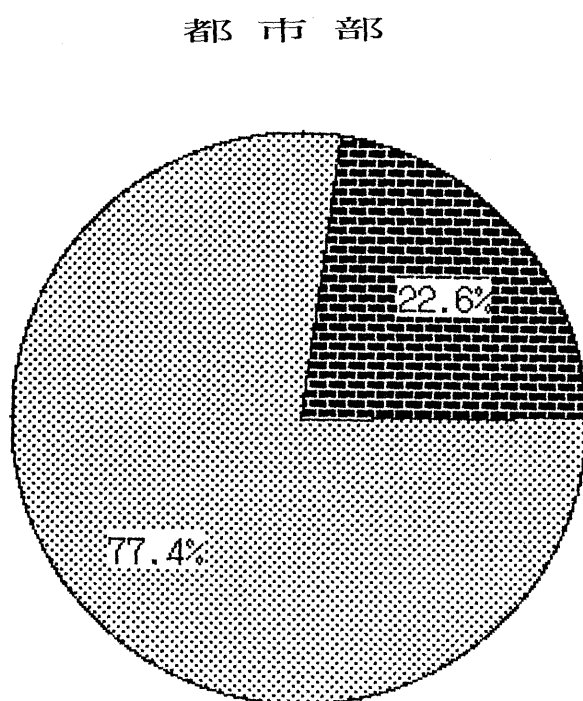
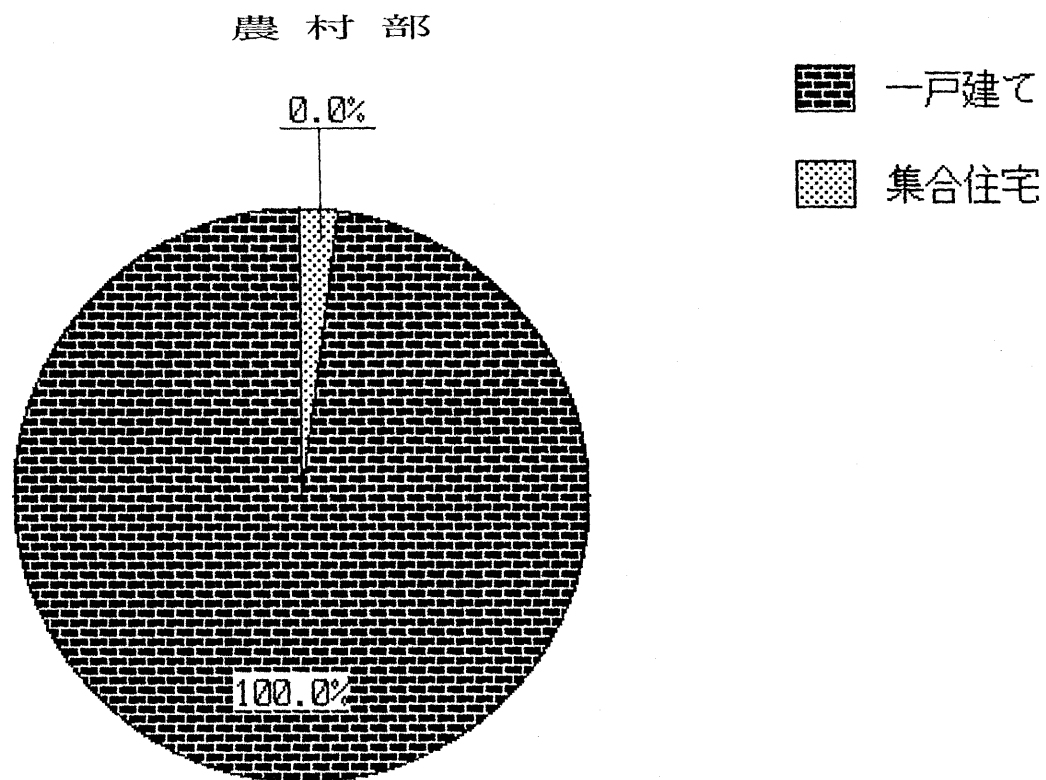


図4 居住環境

表3 親の小中学生の時の出身地

出身地	農村部	都市部
現在の市村	41 (34.5)	33 (17.7) ***
県内の市	12 (10.1)	12 (6.5)
県内の町	29 (24.4)	10 (5.4) ***
県内の村	9 (7.6)	2 (1.1) **
東京都23区内	5 (4.2)	39 (21.0) ***
東京都23区外	0 (0.0)	4 (2.2) **
県外の市	11 (9.2)	56 (30.1) ***
県外の町	8 (6.7)	25 (13.4) **
県外の村	4 (3.4)	5 (2.7)
計	119 (100.0)	186 (100.0)

数字=人数 (%)

** p<0.05 *** p<0.01

県内=千葉県 県外=千葉県以外の都道府県

表4 測定学年別・地域別の体位－身長，体重及びローレル指数

		男 子			女 子		
		農 村	都 市	有意差	農 村	都 市	有意差
身長 (cm)	4	128.9±5.4 (n=26)	134.2±5.7 (n=31)	***	133.7±6.3 (n=17)	135.2±5.4 (n=23)	
	5	138.9±5.6 (n=25)	139.4±6.0 (n=30)		142.0±7.3 (n=23)	142.6±6.9 (n=32)	
	6	145.9±7.4 (n=29)	146.3±6.4 (n=34)		145.8±7.3 (n=21)	147.7±5.6 (n=35)	
体重 (kg)	4	26.5±5.2 (n=26)	32.1±6.7 (n=31)	***	30.0±5.6 (n=17)	31.0±5.6 (n=24)	
	5	34.4±8.3 (n=25)	34.4±6.9 (n=31)		36.7±7.8 (n=23)	35.8±7.1 (n=32)	
	6	40.3±8.1 (n=29)	38.1±7.5 (n=34)		39.9±10.0 (n=21)	39.9±7.4 (n=35)	
ローレル 指数	4	122.6±13.6 (n=26)	132.4±21.9 (n=31)	**	125.1±16.5 (n=17)	122.6±17.1 (n=23)	
	5	127.6±26.3 (n=25)	124.6±15.2 (n=30)		126.9±16.0 (n=23)	122.2±14.1 (n=32)	
	6	129.8±23.5 (n=29)	121.1±19.6 (n=34)		127.1±20.2 (n=21)	123.0±15.5 (n=35)	

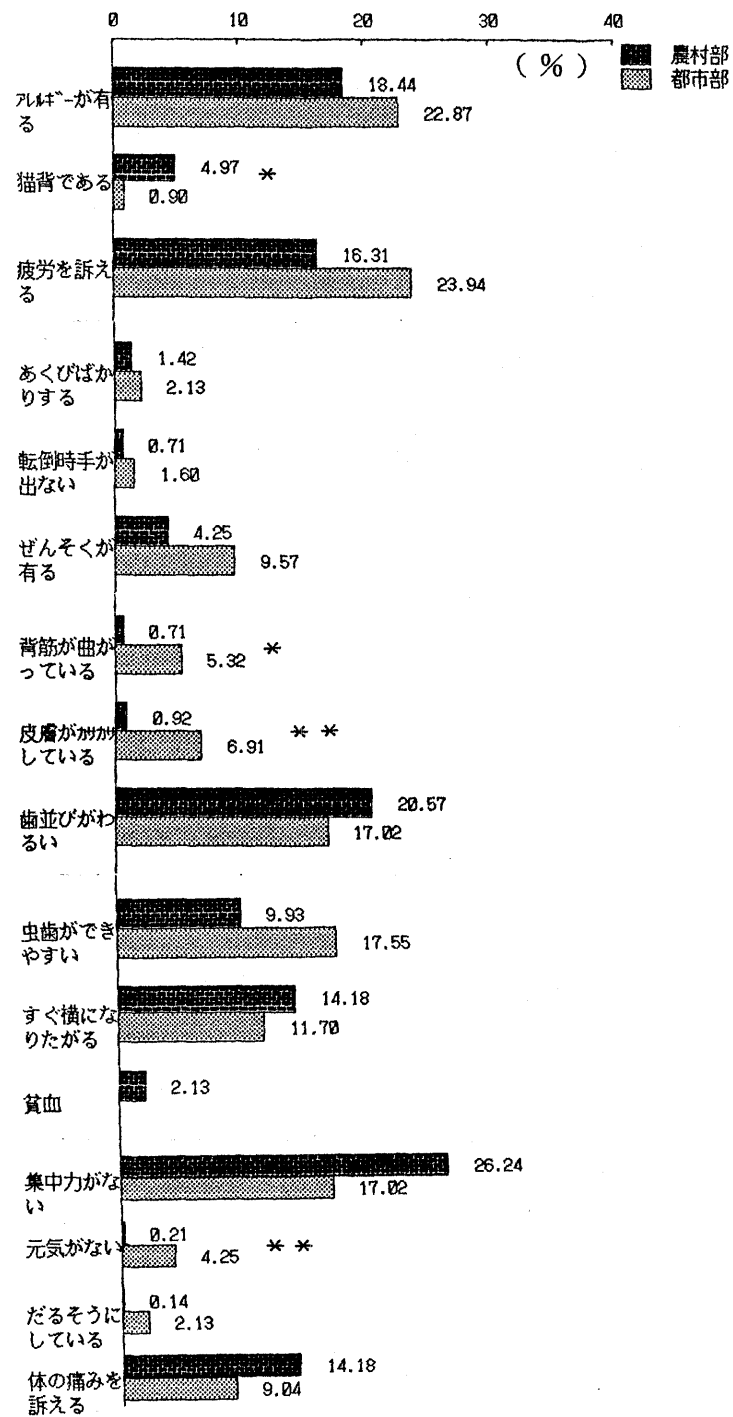
** p<0.05 *** p<0.01

表5 体力測定結果

項 目	農村部	都市部
反復横とび（回） （4点+5点）	35(37.6) n=93	71(53.8) *** n=132
垂直とび（cm） （4点+5点）	59(63.4) n=93	80(60.6) n=132
背筋力（kg） （4点+5点）	14(14.4) n=97	31(23.7) * n=131
握力（kg） （4点+5点）	29(29.9) n=97	36(27.5) n=131
伏臥状態そらし（cm） （4点+5点）	22(22.9) n=96	50(37.9) ** n=132
立位体前屈（cm） （4点+5点）	14(14.6) n=96	22(16.7) n=132
踏台昇降運動（判定指数） （4点+5点）	15(17.4) n=86	63(60.6) *** n=104
総合判定（級） （A+B：上位群）	18(20.9) n=86	48(47.1) *** n=102

数字=人数（％） * p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

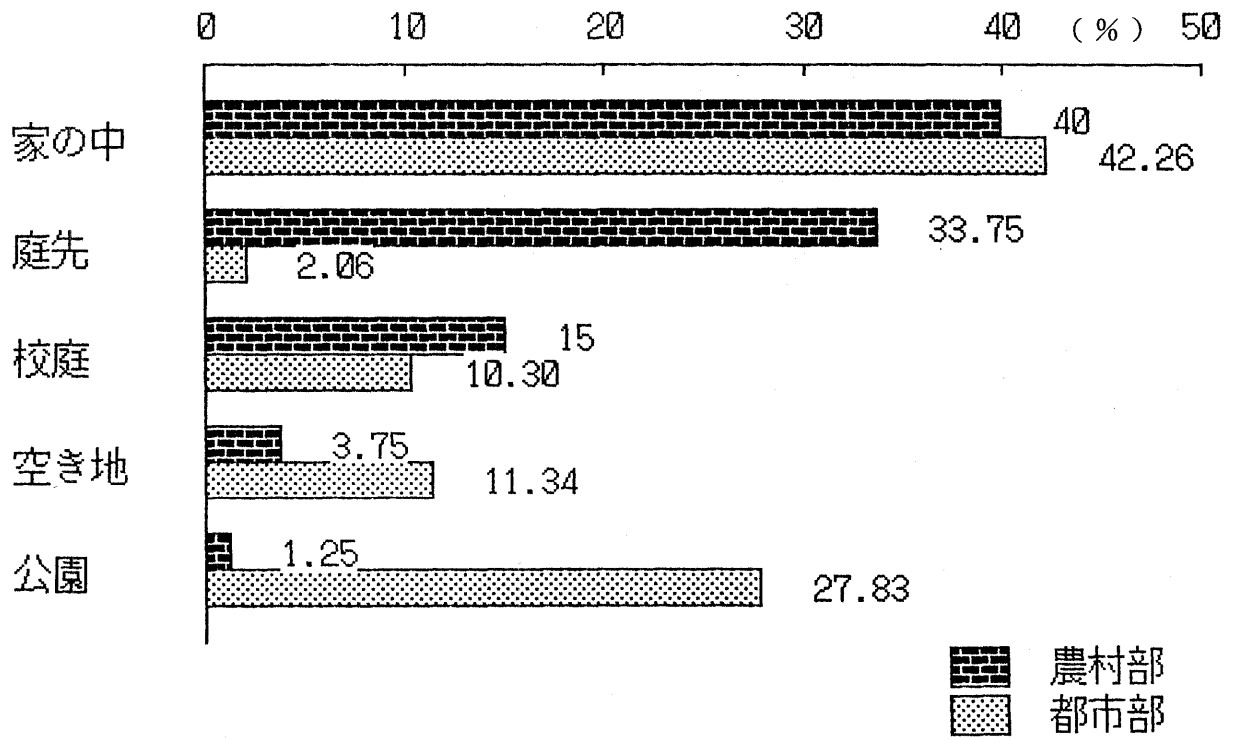
4点+5点=各種目の成績1～5段階のうちの上位の得点



* $p < 0.1$ ** $p < 0.05$

図5 子どもの健康状態・様子

男子



女子

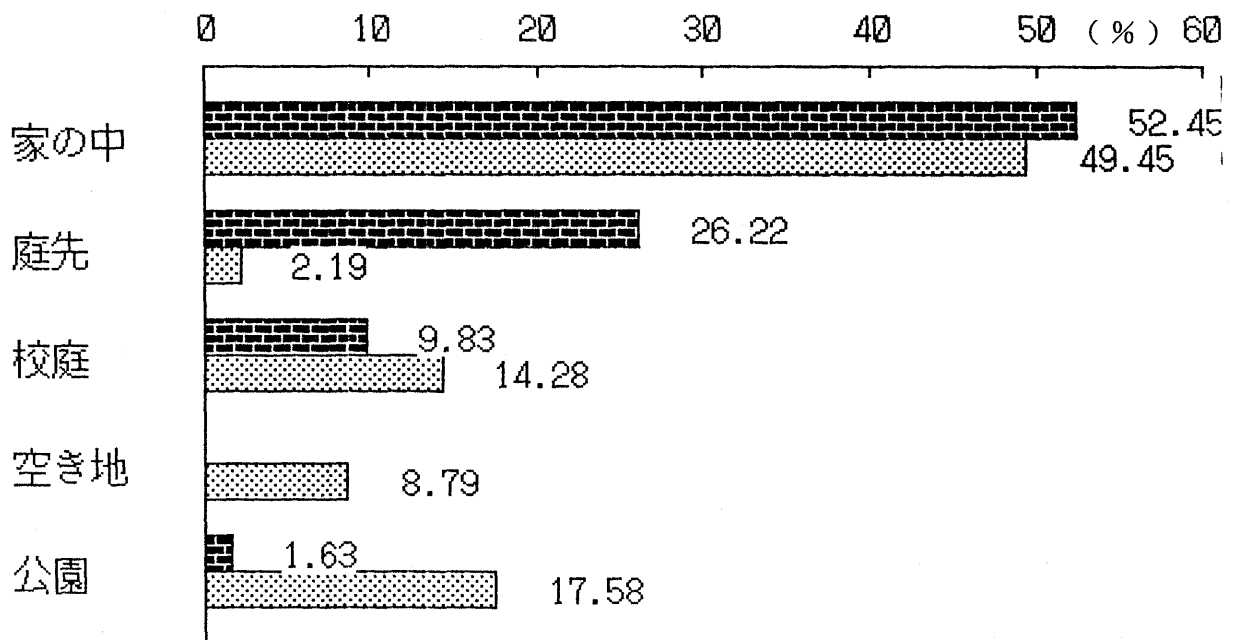


図6 遊び場所

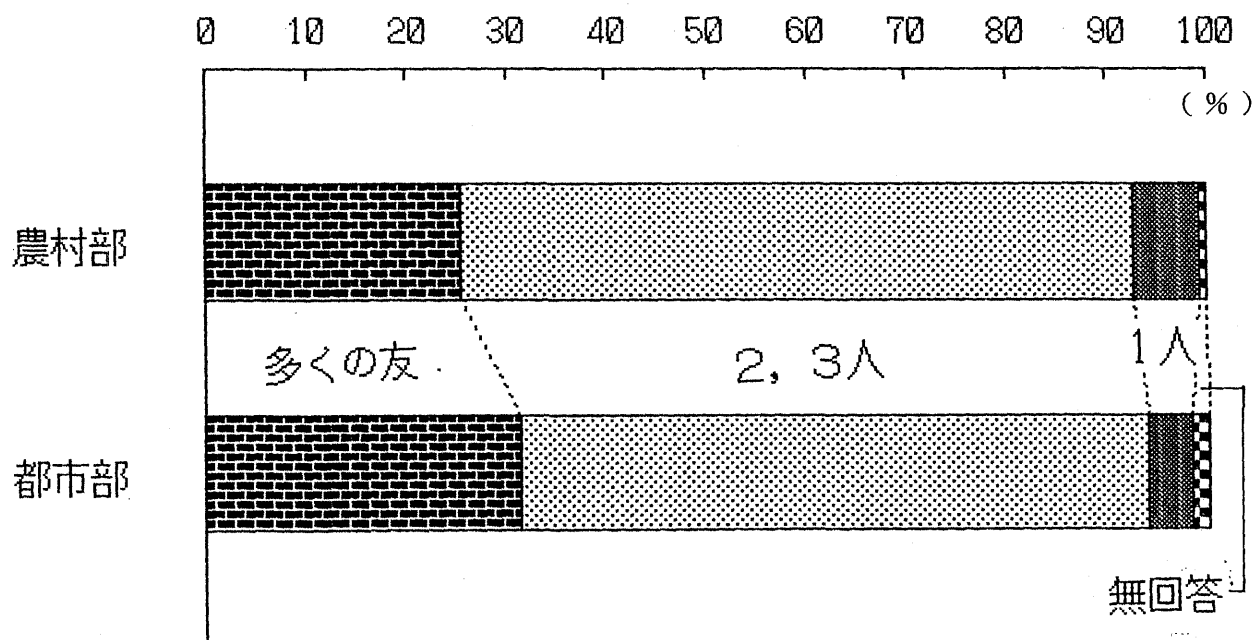


図7 遊び人数

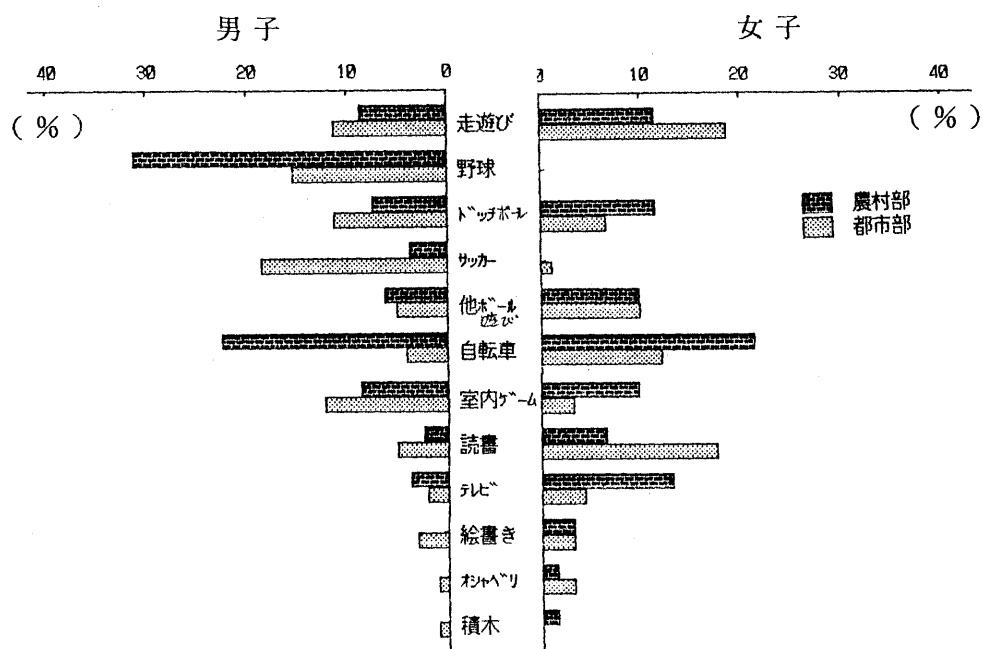


図8 遊び内容

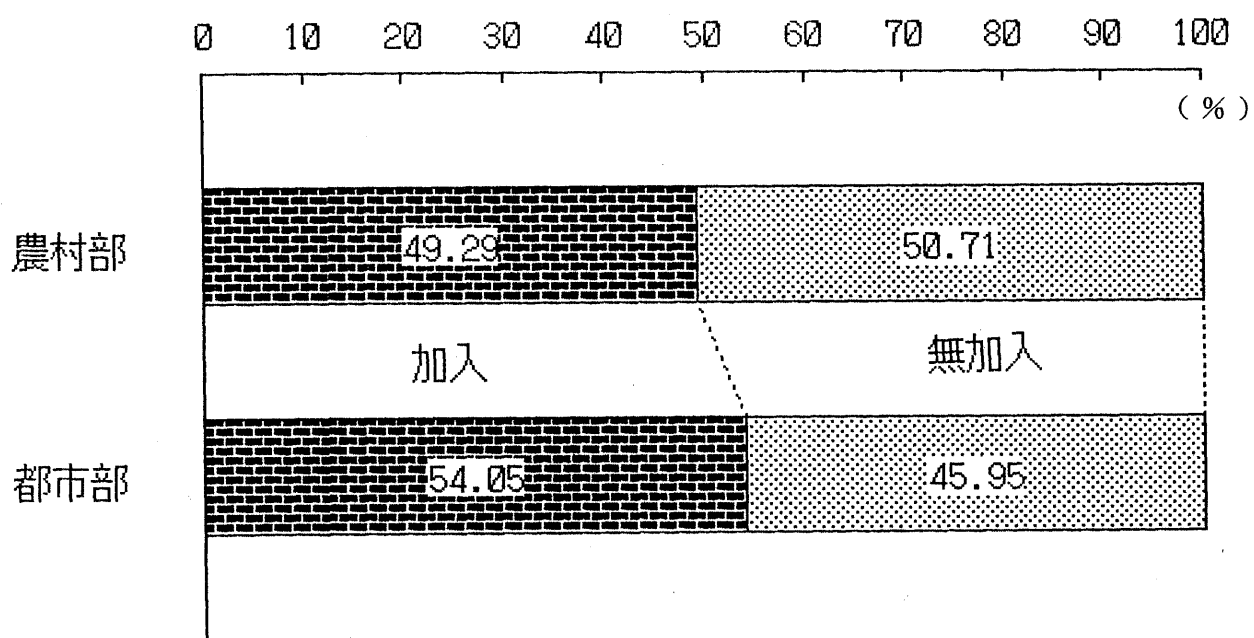


図9 スポーツクラブ加入状況

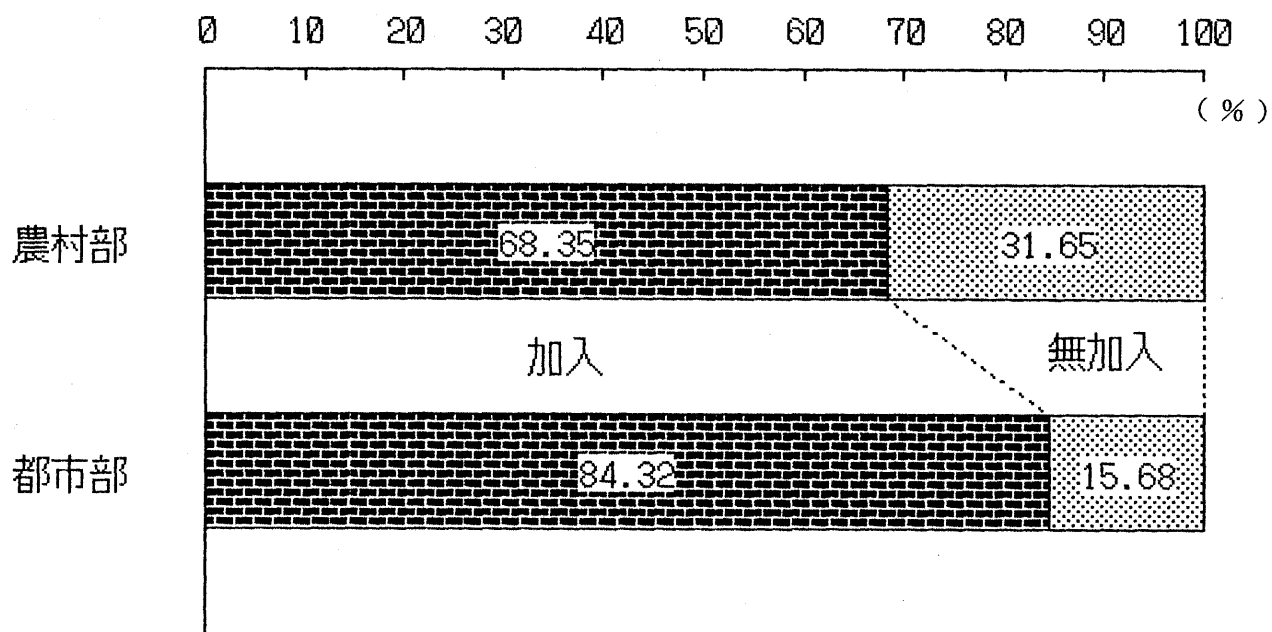


図10 塾・習い事の加入状況

表6 外遊び時間

	男 子			女 子		
	農 村	都 市	有意差	農 村	都 市	有意差
	M±SD	M±SD		M±SD	M±SD	
平 日	106.3± 68.5 (n=78)	77.5± 51.8 (n=92)	***	75.2± 41.2 (n=61)	58.0± 44.2 (n=85)	**
休日前日	183.0± 96.9 (n=78)	124.7± 91.0 (n=88)	***	132.1± 82.5 (n=61)	79.1± 66.0 (n=85)	***
休 日	287.8±124.5 (n=79)	199.4±124.0 (n=94)	***	206.6±106.2 (n=61)	142.8±103.8 (n=89)	***

数字=平均外遊び時間：分

** p<0.05 *** p<0.01

表7 テレビ視聴時間

	男 子			女 子		
	農 村	都 市	有意差	農 村	都 市	有意差
	M±SD	M±SD		M±SD	M±SD	
平 日	150.6± 63.6 (n=80)	127.4± 67.2 (n=95)	**	179.5± 70.7 (n=60)	103.4± 63.2 (n=91)	***
休日前日	186.4± 73.4 (n=80)	160.9± 79.0 (n=94)	**	221.2± 87.5 (n=59)	144.4± 72.3 (n=91)	***
休 日	229.0±104.1 (n=80)	191.1± 98.2 (n=93)	**	273.0±116.5 (n=60)	180.0± 96.1 (n=90)	***

数字=平均テレビ視聴時間：分

** p<0.05 *** p<0.01

表8 就寝・睡眠時間

	保 護 者			子 ど も		
	農 村	都 市	有意差	農 村	都 市	有意差
	M±SD	M±SD		M±SD	M±SD	
平日 就寝時間	22.7±0.9 (n=138)	23.2±1.3 (n=185)	***	21.6±0.5 (n=140)	21.7±0.7 (n=187)	
睡眠時間	7.0±1.0 (n=138)	6.7±1.0 (n=183)	***	8.5±0.7 (n=139)	8.7±0.7 (n=184)	**
休日前日 就寝時間	23.1±1.0 (n=137)	23.5±1.4 (n=183)	***	21.9±0.7 (n=139)	22.0±1.1 (n=185)	
睡眠時間	7.4±1.2 (n=137)	7.4±1.3 (n=179)		9.1±1.9 (n=138)	9.2±1.7 (n=183)	
休日 就寝時間	22.5±2.1 (n=136)	23.0±1.3 (n=182)	**	21.6±0.6 (n=140)	21.7±0.6 (n=186)	
睡眠時間	7.3±1.0 (n=136)	7.2±1.1 (n=180)		8.7±1.1 (n=138)	8.8±0.7 (n=184)	

数字＝平均時間：時

** p<0.05 *** p<0.01

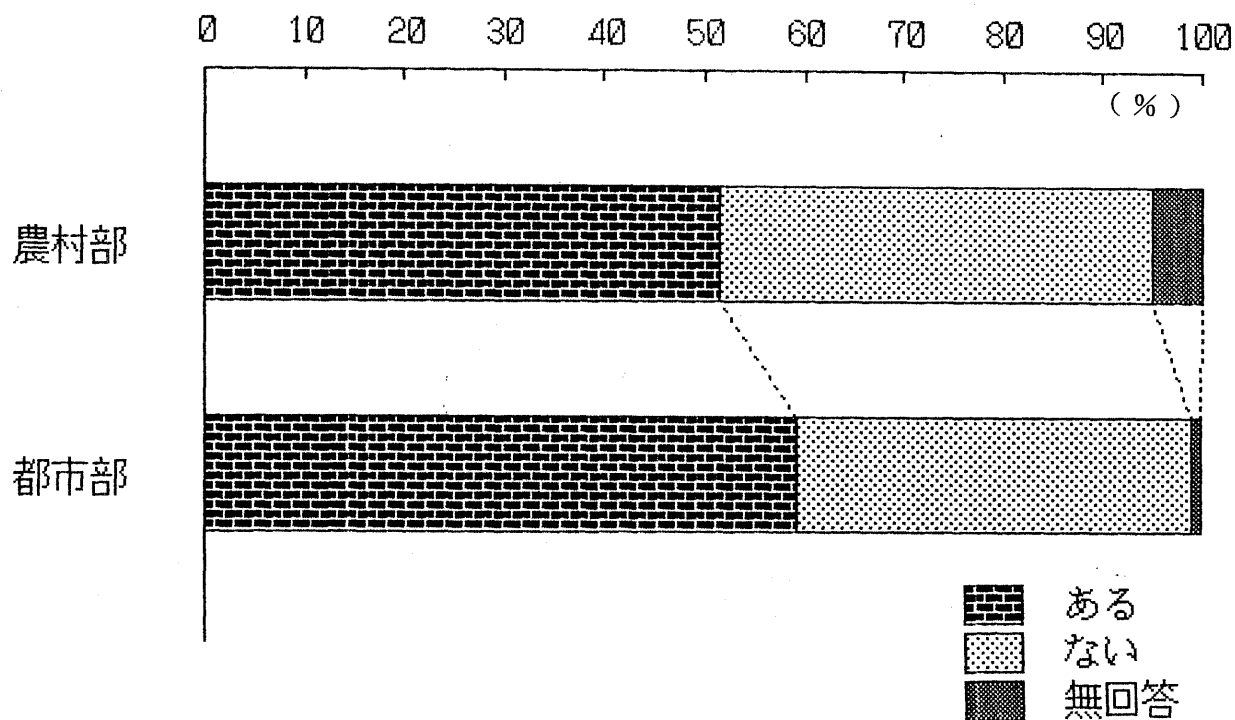


図11 家事手伝いの有無

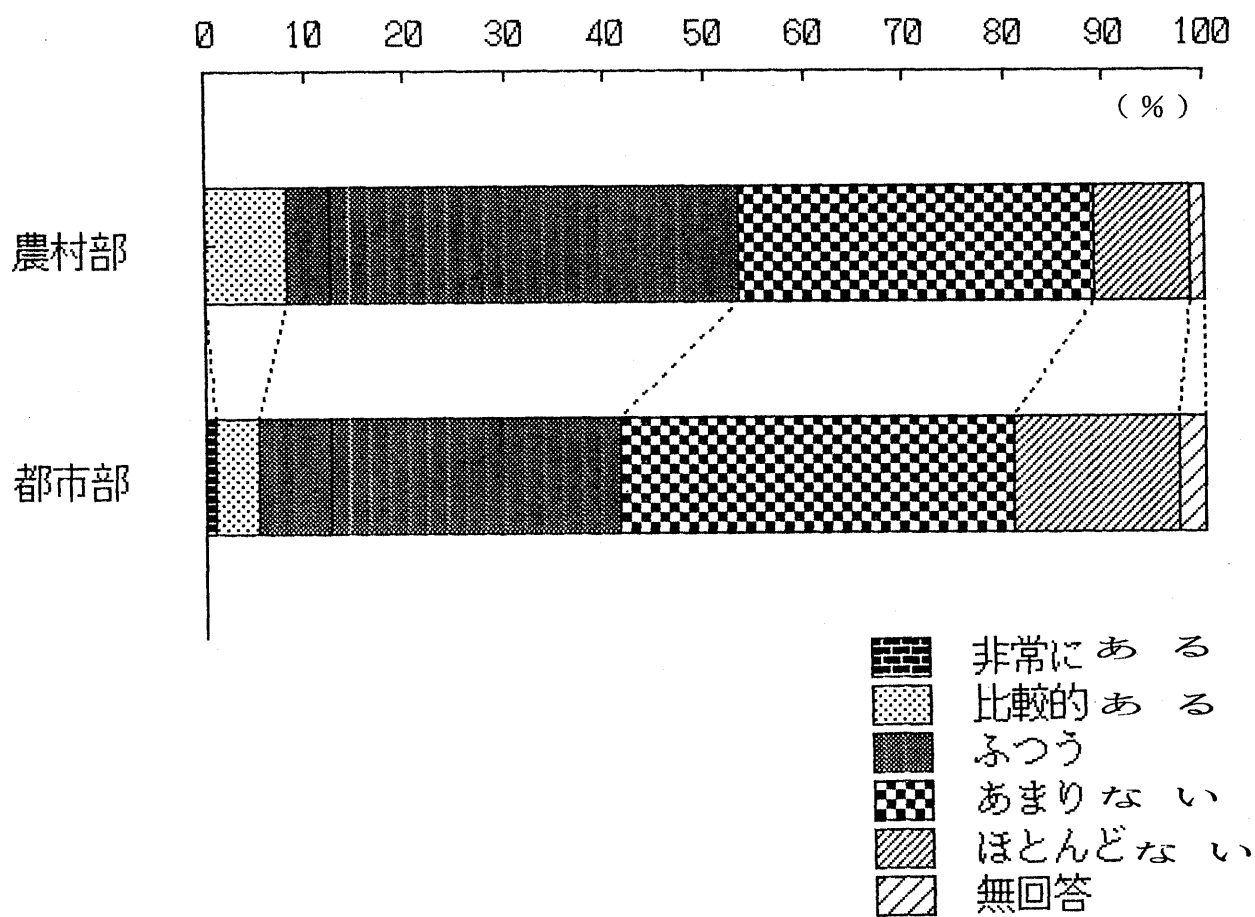


図12 家事手伝いで力を使うものの程度

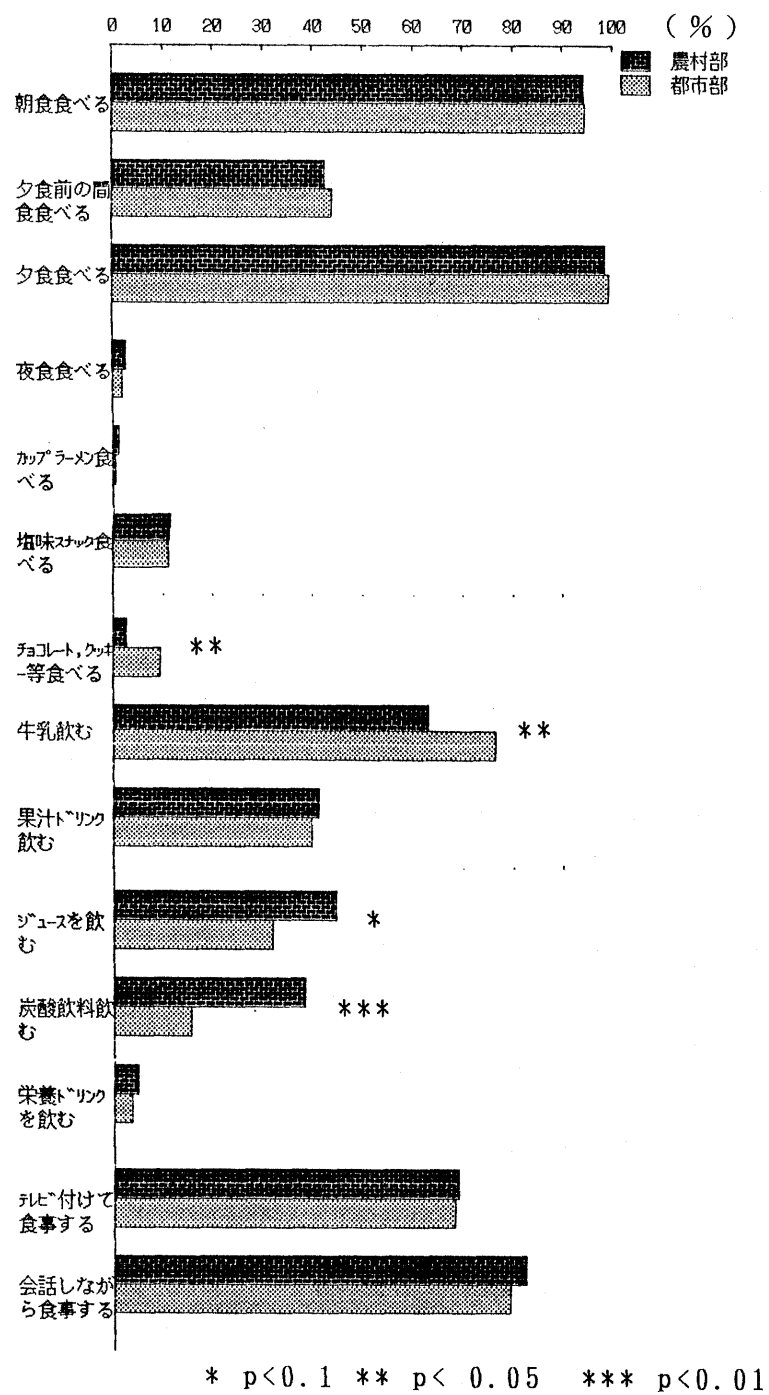


図13 摂取内容（毎日摂取する＋比較的摂取する）

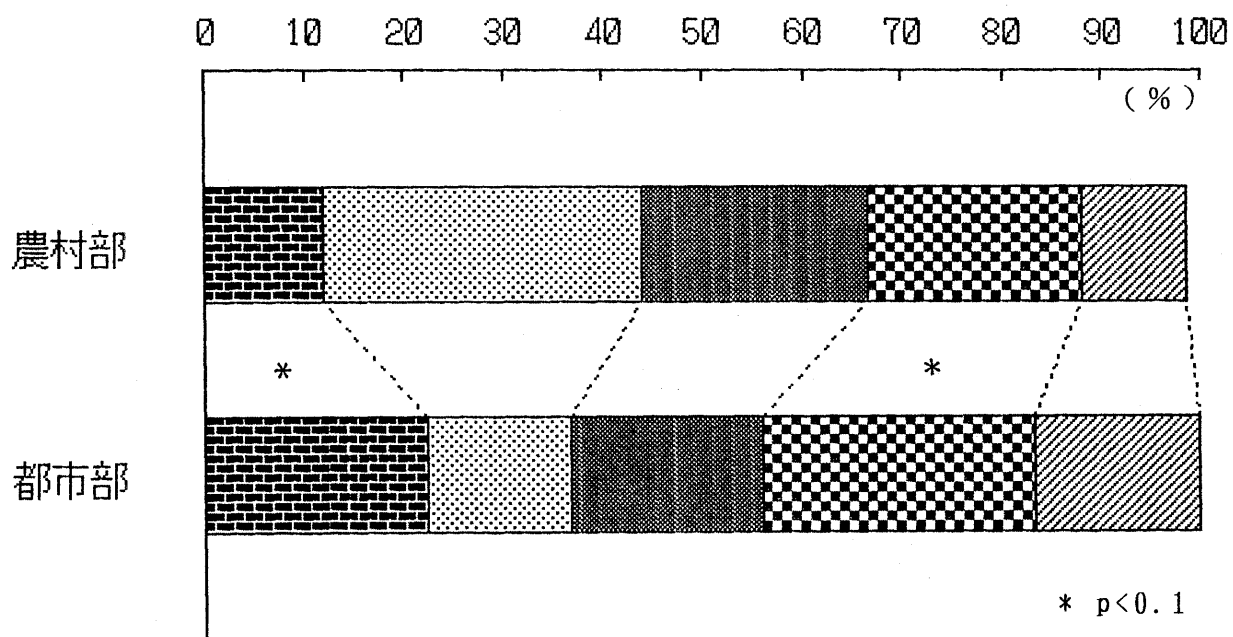


図14 家族揃っての朝食の状況

- 必ず揃う
- 殆ど揃う
- 時々揃う
- 余揃わず
- 全揃わず

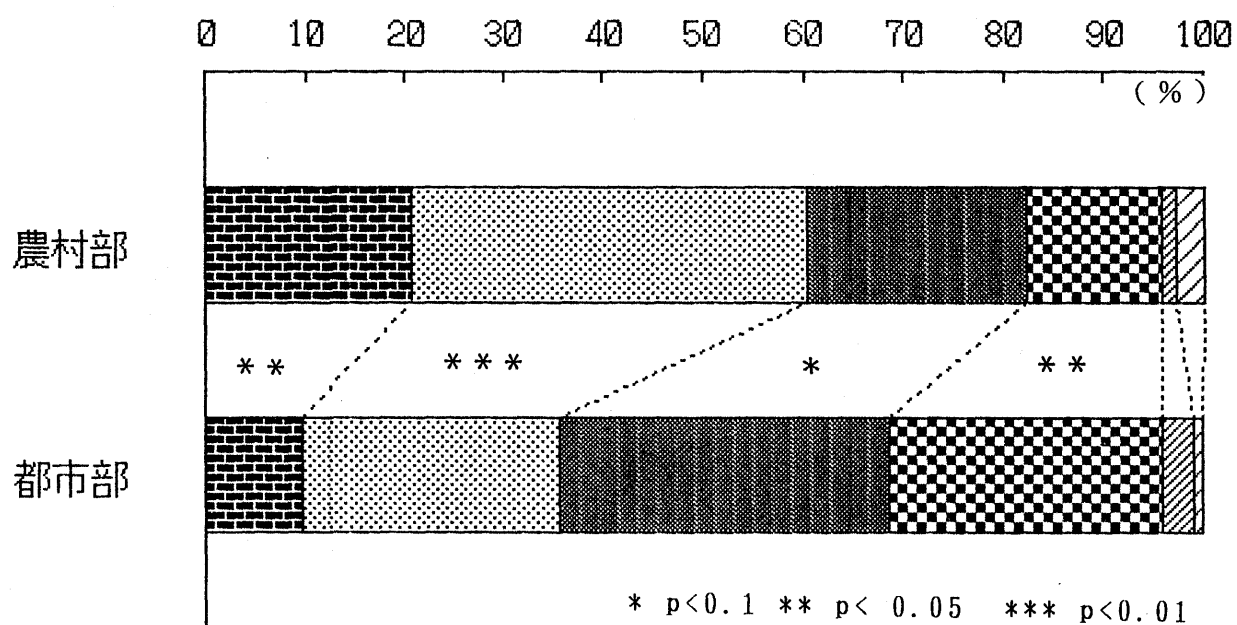


図15 家族揃っての夕食の状況

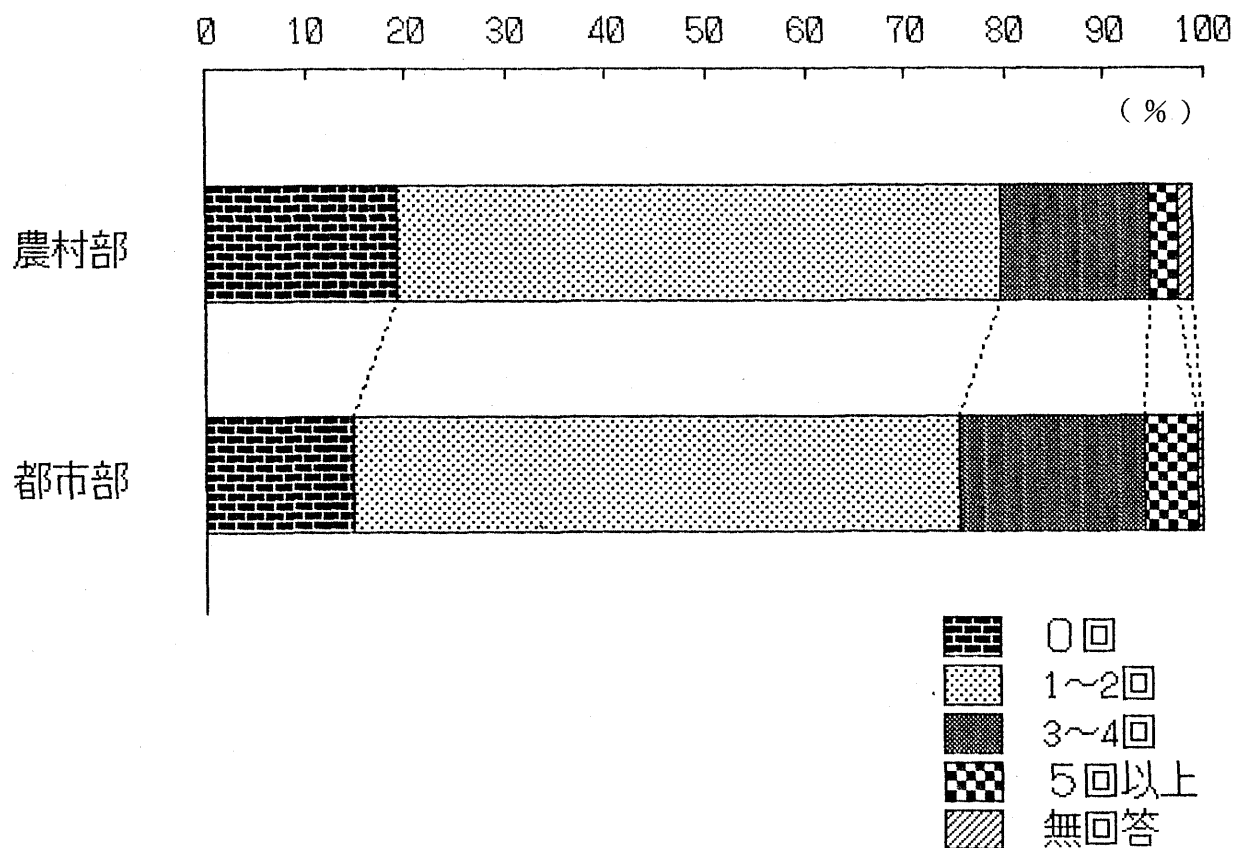


図16 1か月の外食、店屋物の利用回数

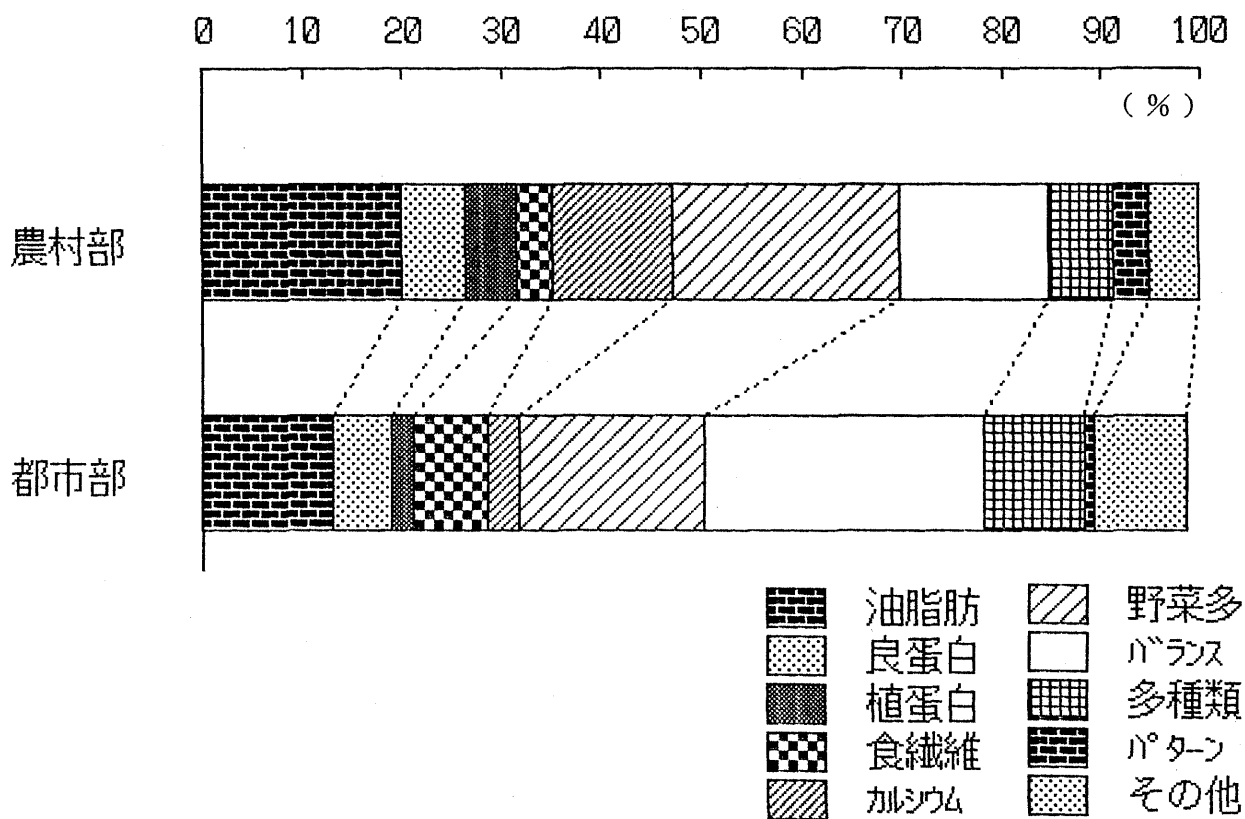


図17 調理をする時の意識

表9 親の出身地と子どもの体力

出身地	農村部			都市部		
	n	上位群	下位群	n	上位群	下位群
現在の市村	31	7 (22.6)	4 (19.4)	19	7 (36.8)	0 (0.0) ***
県内の市	9	1 (11.1)	3 (33.3)	7	1 (14.3)	1 (14.3)
県内の町	16	1 (6.25)	4 (25.0)	8	2 (25.0)	0 (0.0)
県内の村	5	2 (40.0)	3 (60.0)	1	0 (0.0)	0 (0.0)
東京都23区内	4	0 (0.0)	2 (50.0) **	30	15 (50.0)	3 (10.0) ***
東京都23区外	0	0 (0.0)	0 (0.0)	4	2 (50.0)	0 (0.0) **
県外の市	7	0 (0.0)	3 (42.9) **	42	15 (35.7)	3 (7.1) ***
県外の町	6	2 (33.3)	1 (16.7)	20	5 (25.0)	2 (10.0)
県外の村	3	2 (66.7)	0 (0.0) **	3	1 (33.3)	0 (0.0)

上位群＝体力診断テスト判定AまたはBの者

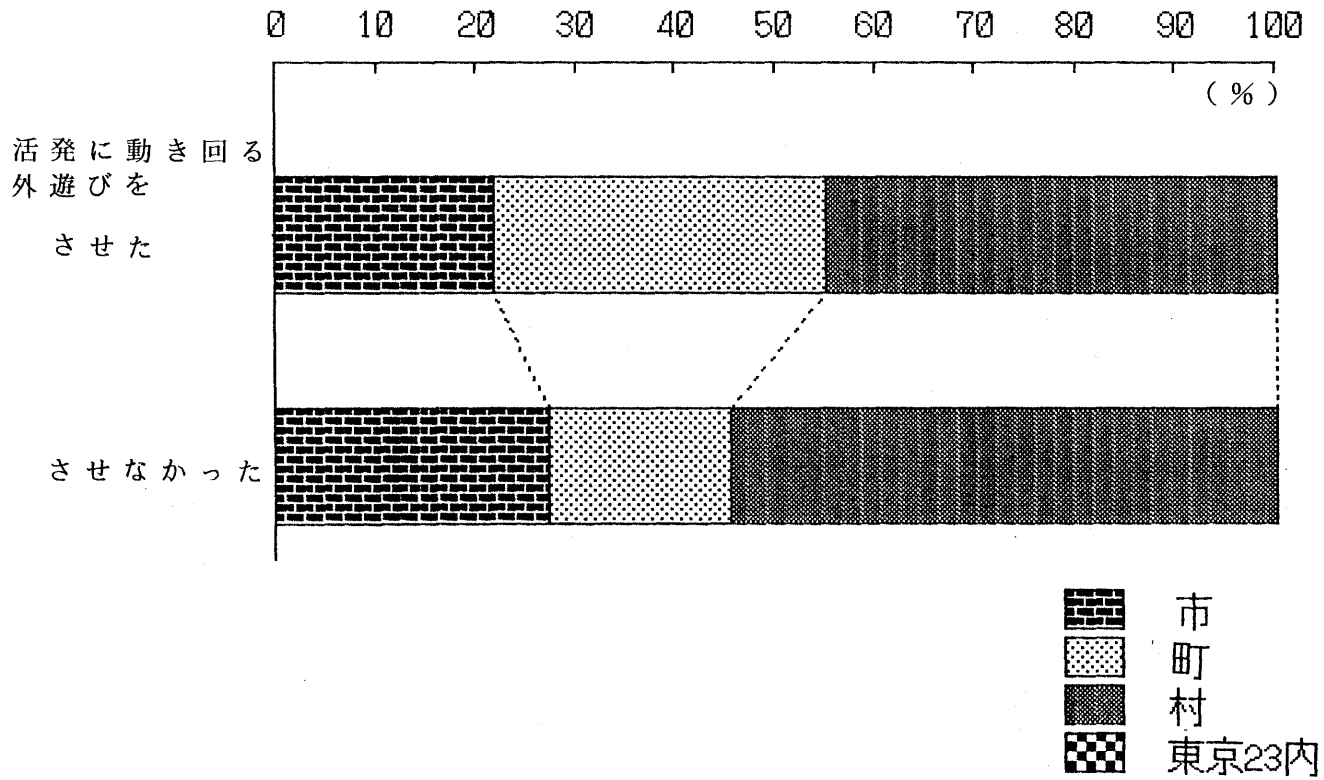
** p<0.05 *** p<0.0

下位群＝体力診断テスト判定DまたはEの者

県内＝千葉県 県外＝千葉県以外の都道府県

数字＝人数（％）

農村部



都市部

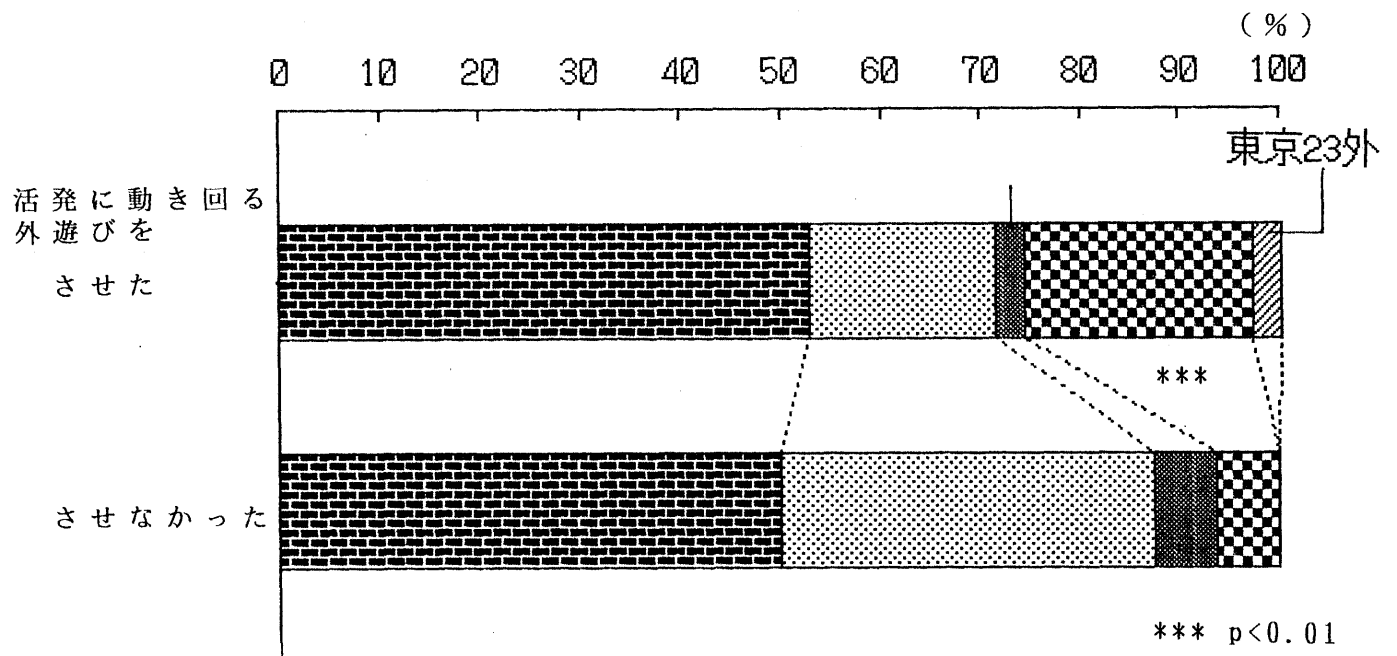
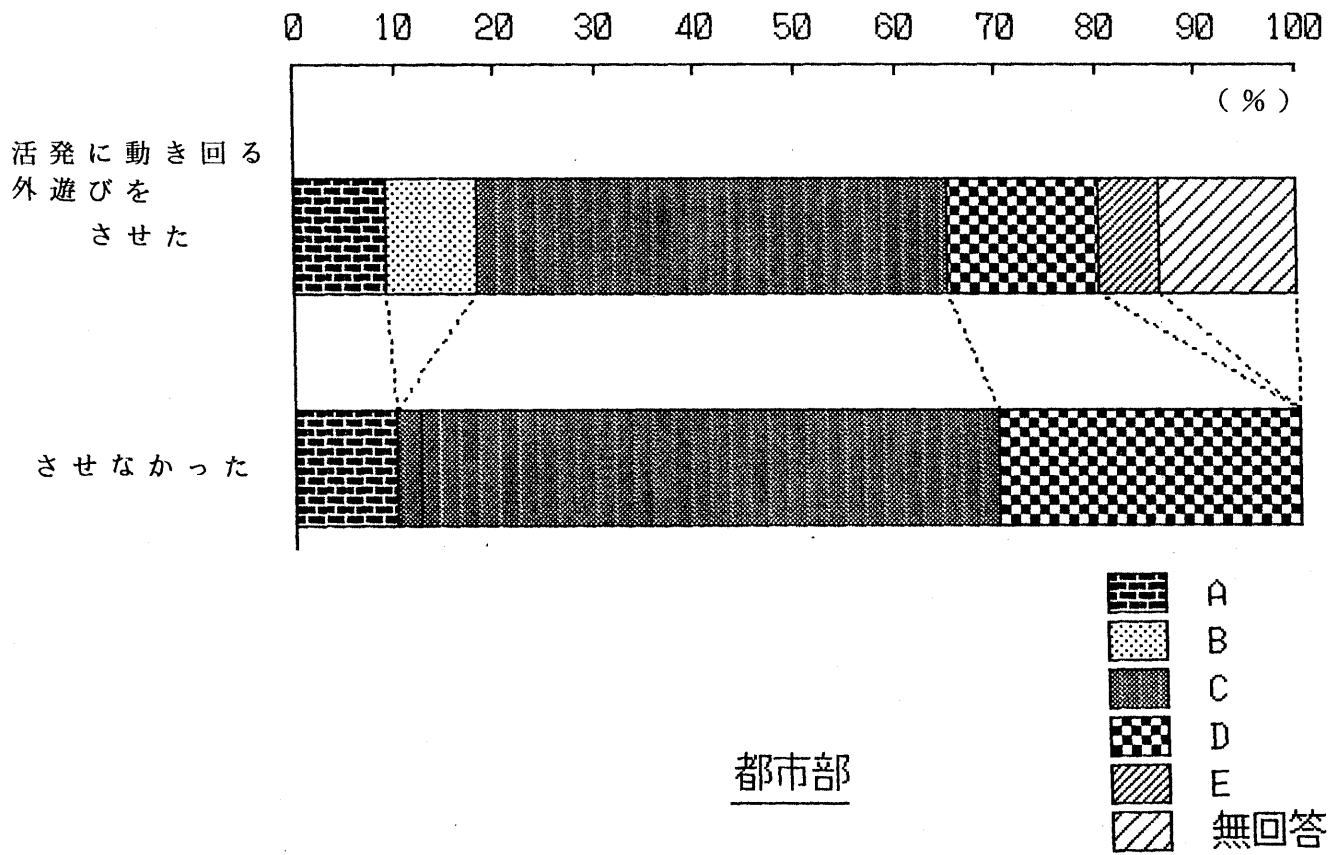


図18 親の子どもへの外遊びに対する意識と出身地

農村部



都市部

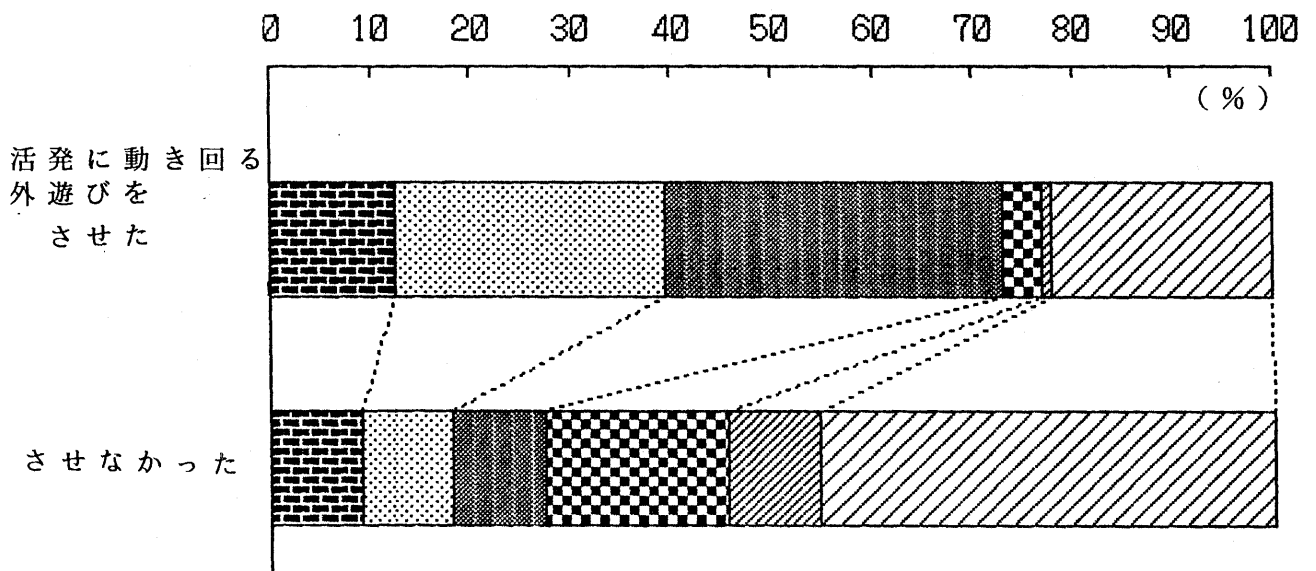
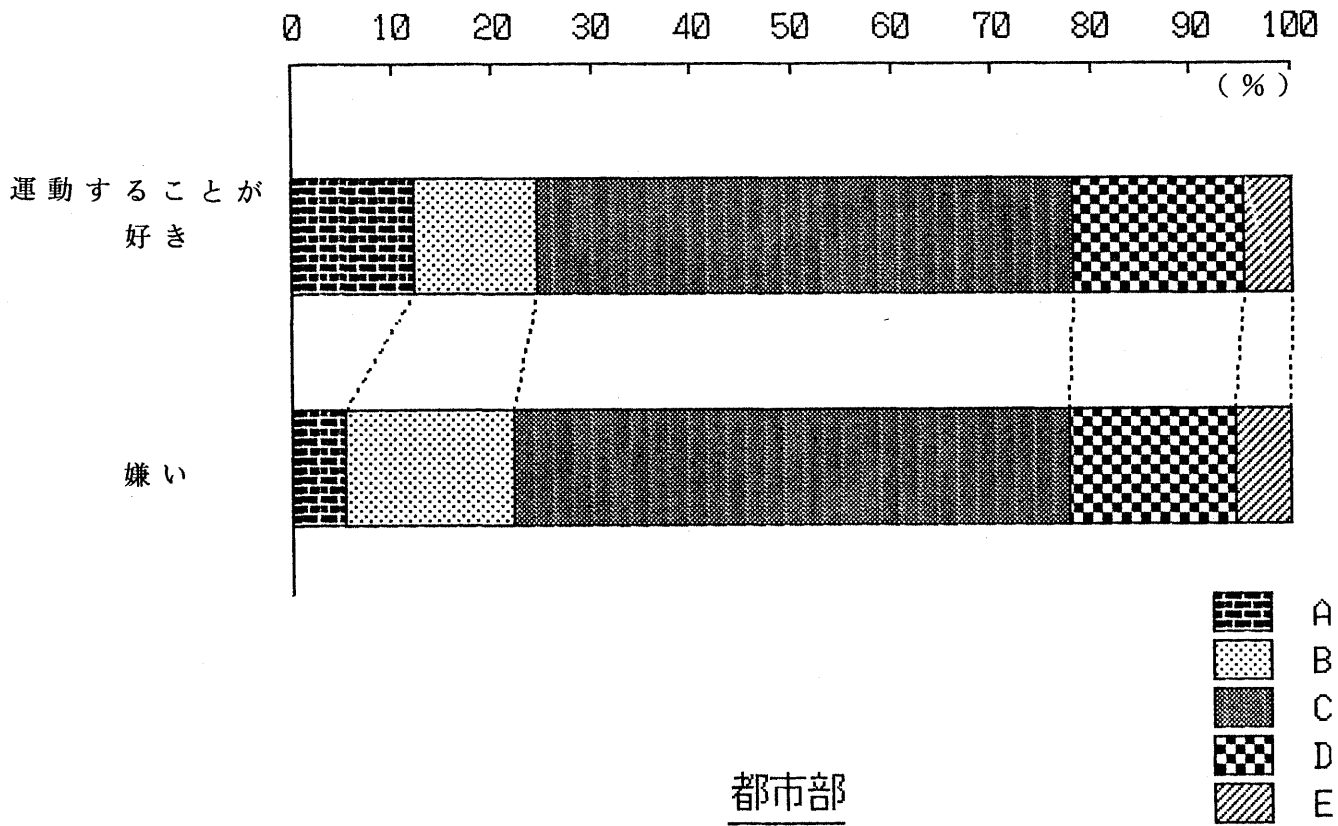


図19 親の外遊びへの意識と子どもの体力診断テスト判定

農村部



都市部

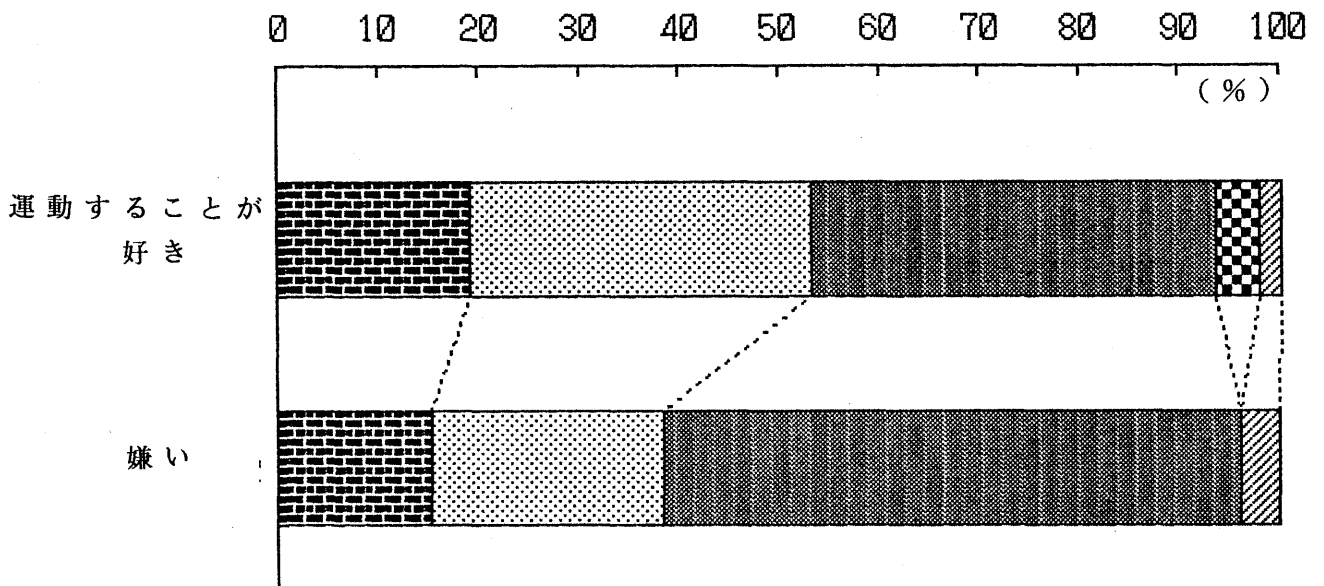
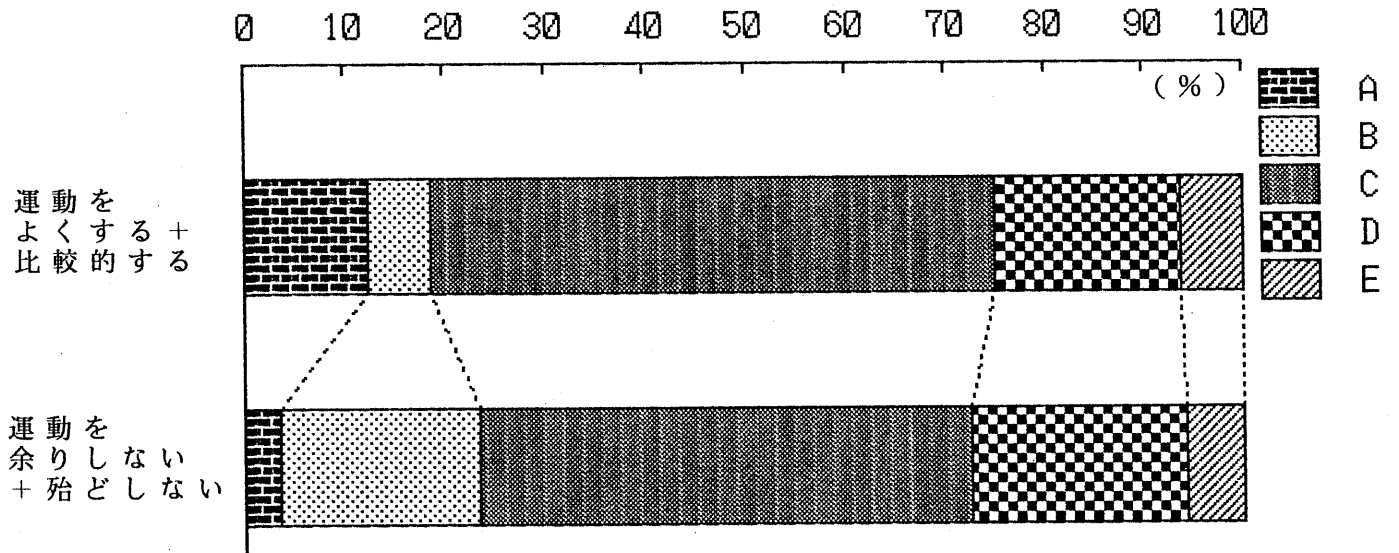


図 20 親の運動への関心と子どもの体力診断テスト判定

農村部



都市部

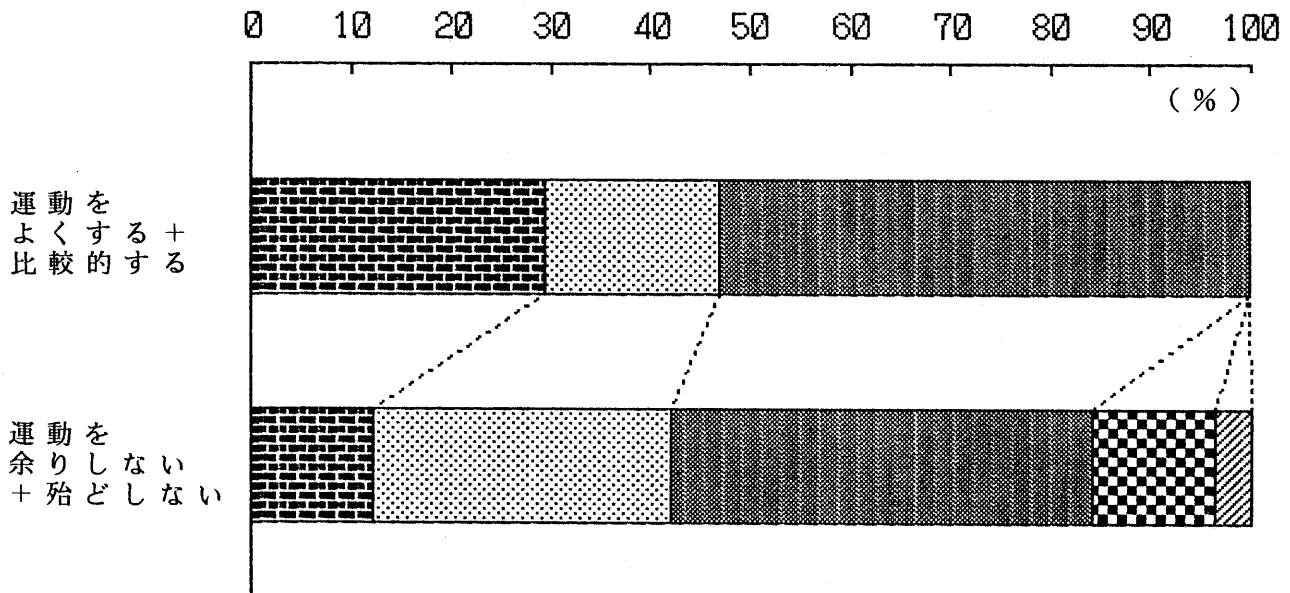
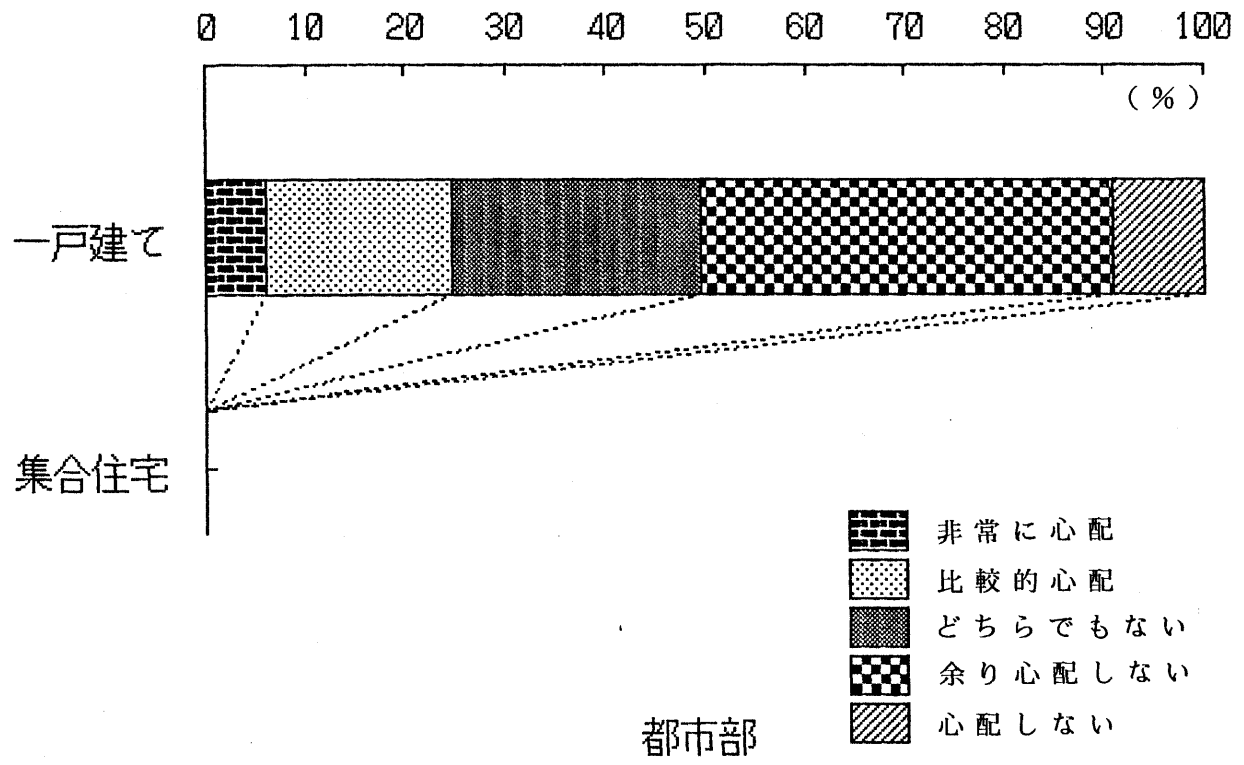


図 2 1 親の運動の実践状況と子どもの体力診断テスト判定

農村部



都市部

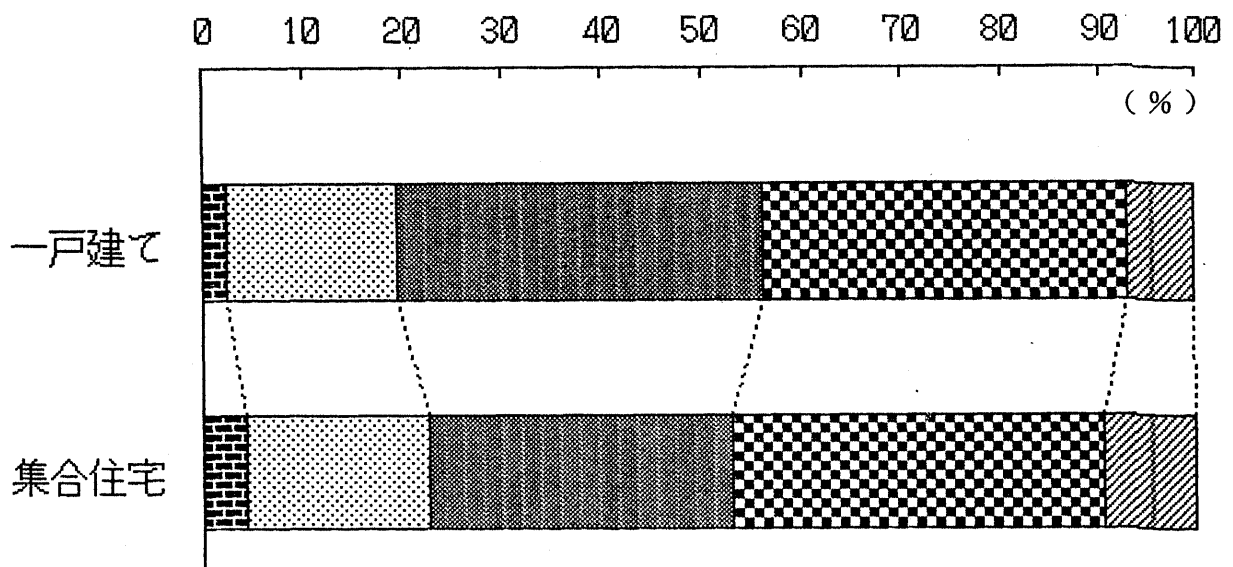
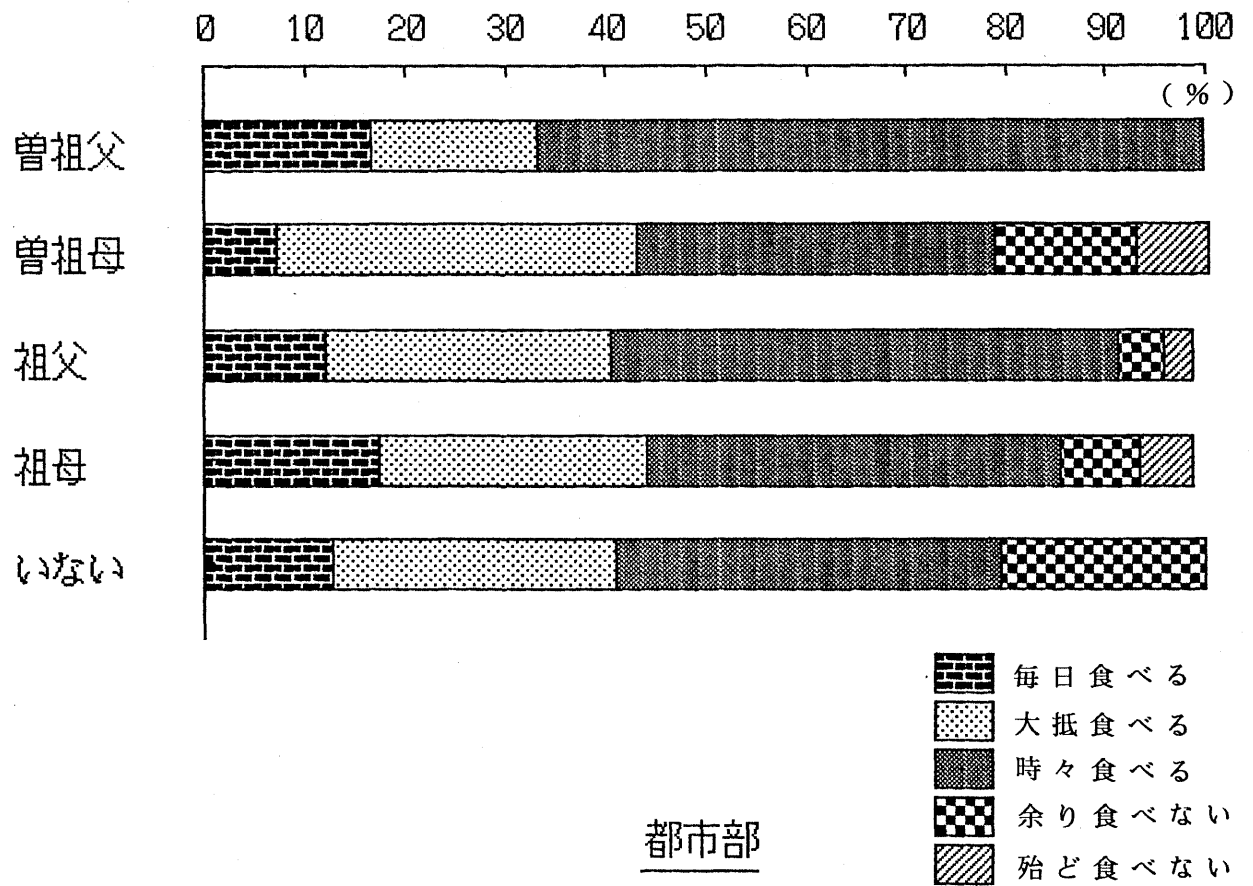


図22 居住環境と子どもの怪我への心配

農村部



都市部

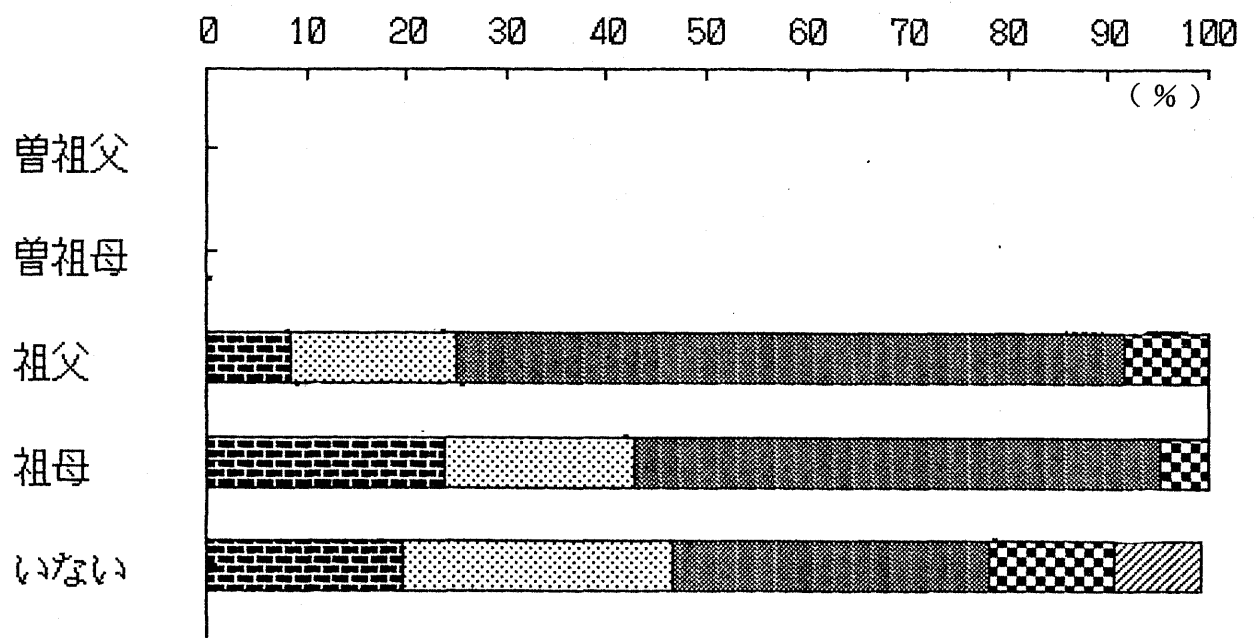
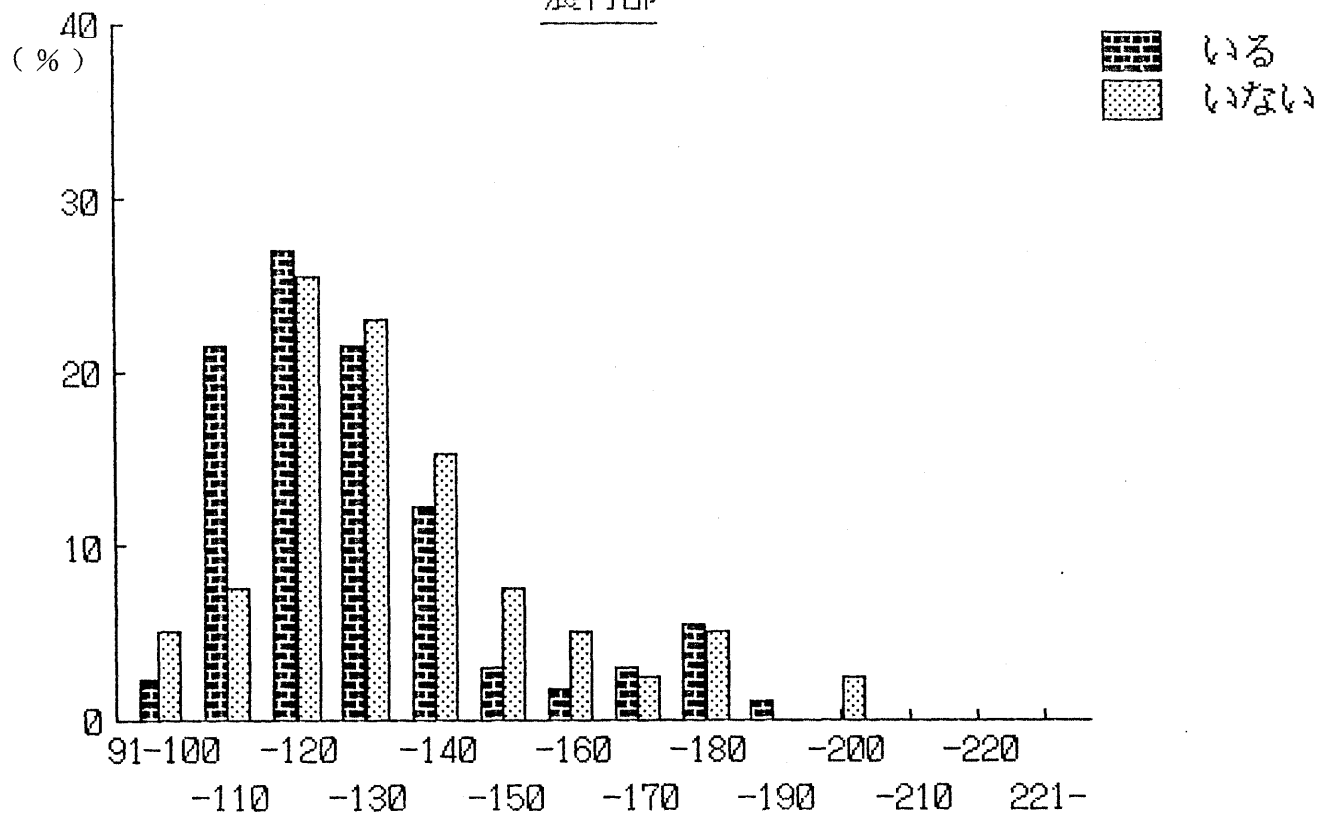


図 2 3 曾・祖父母との同居と間食摂取状況

農村部



都市部

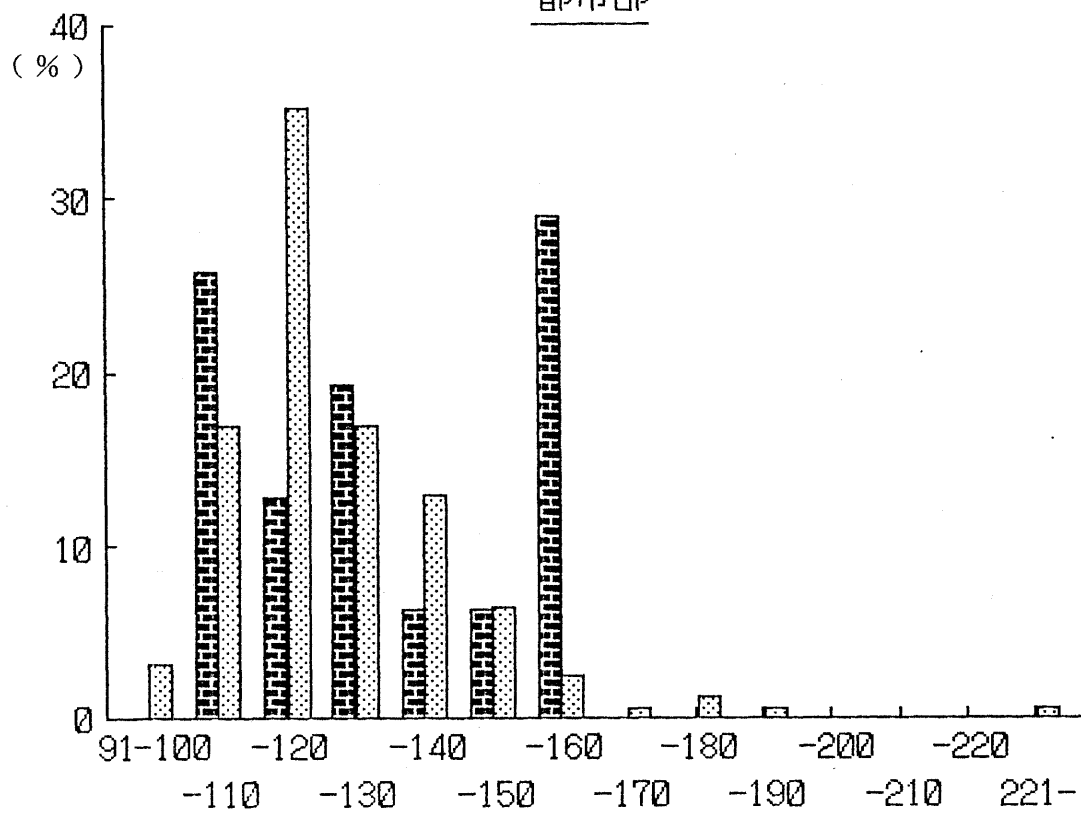


図 2 4 曾祖父母との同居と肥満度

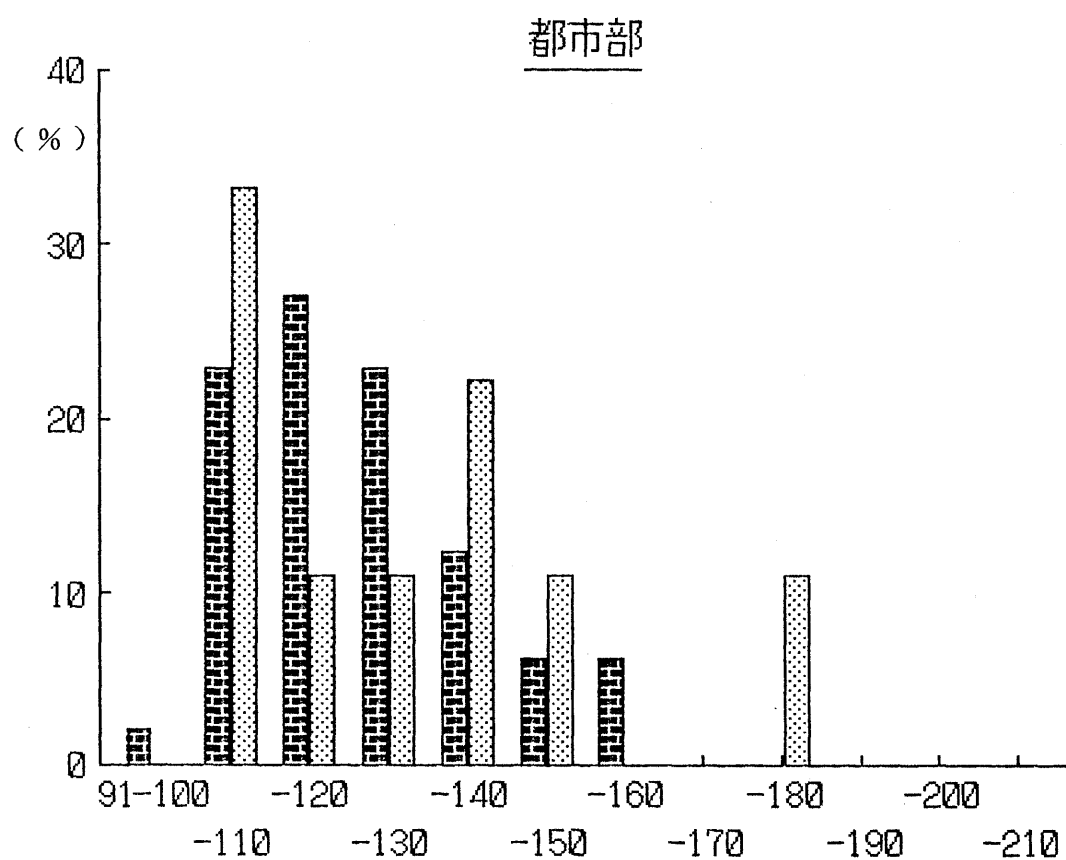
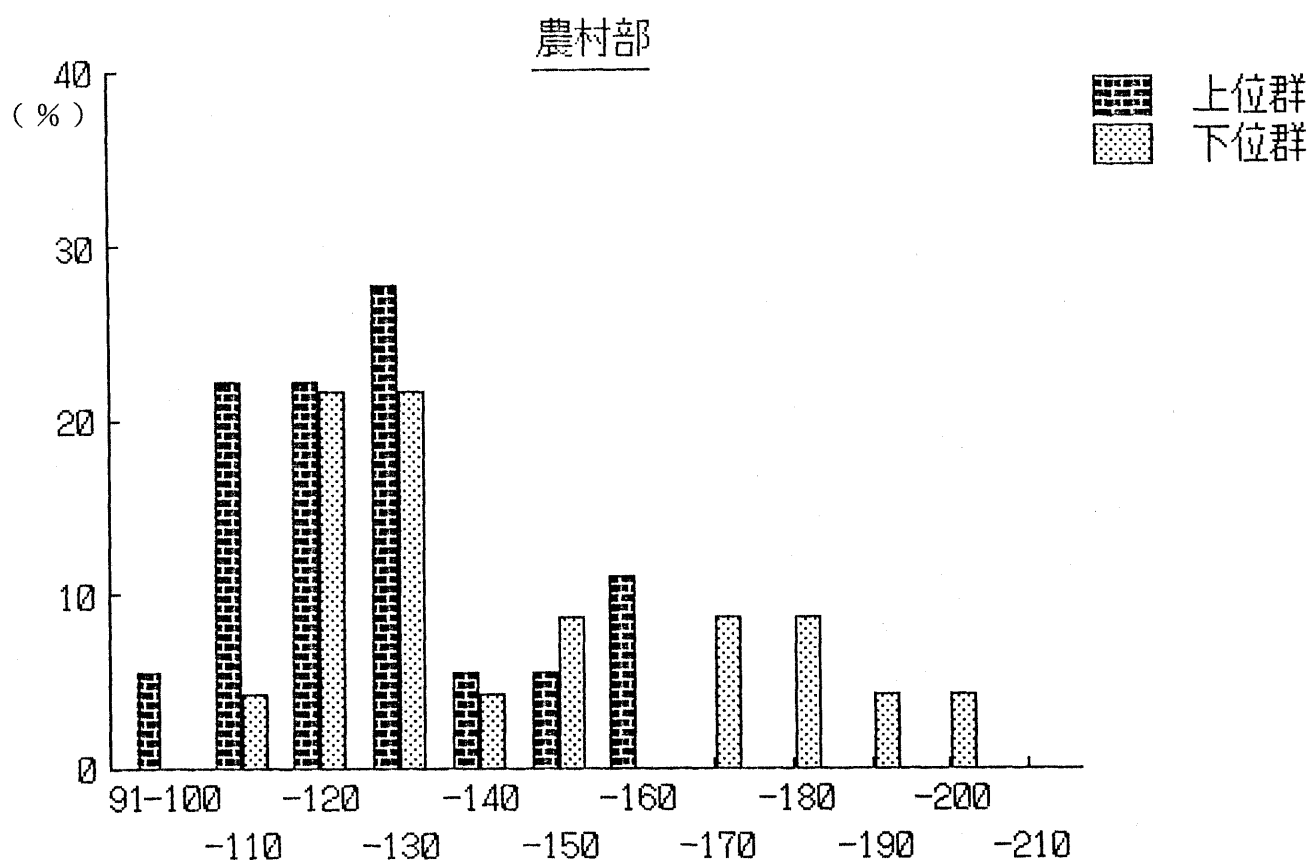
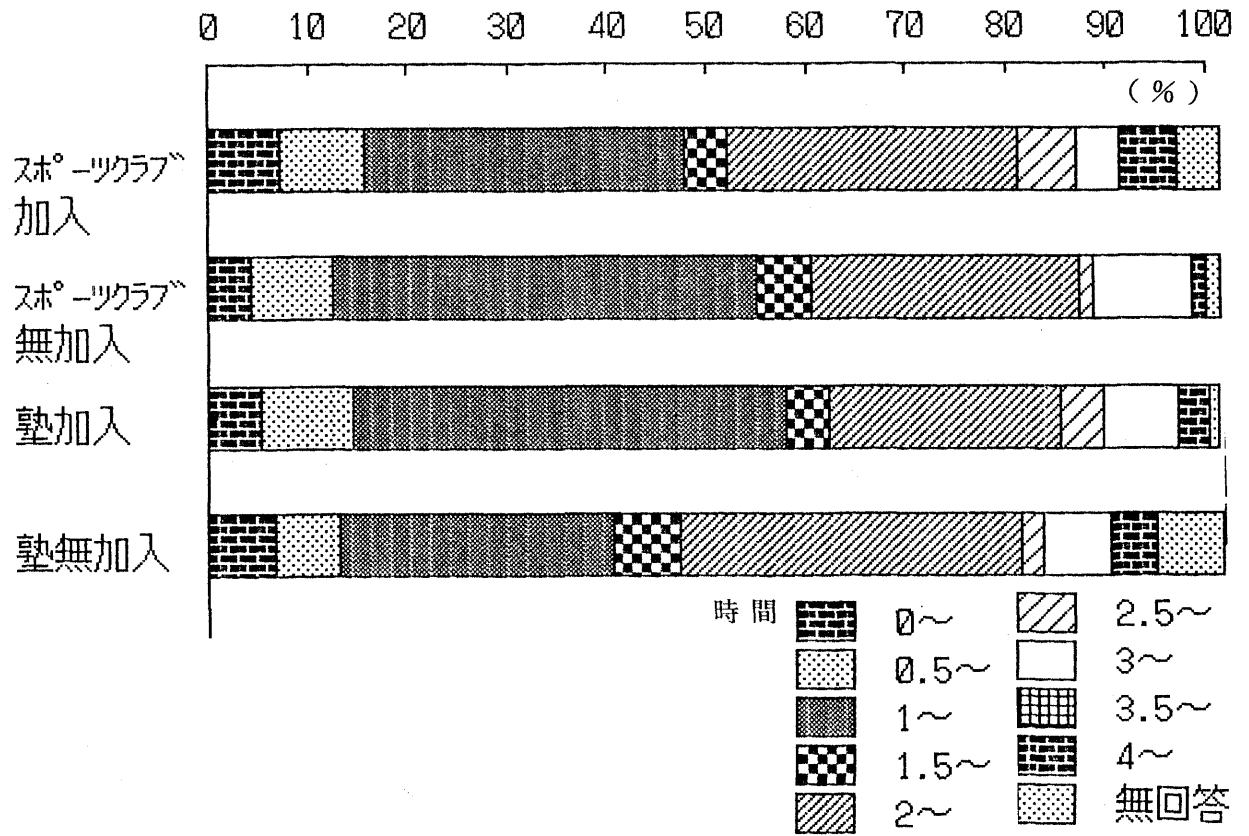


図 2 5 体力と肥満度

農村部



都市部

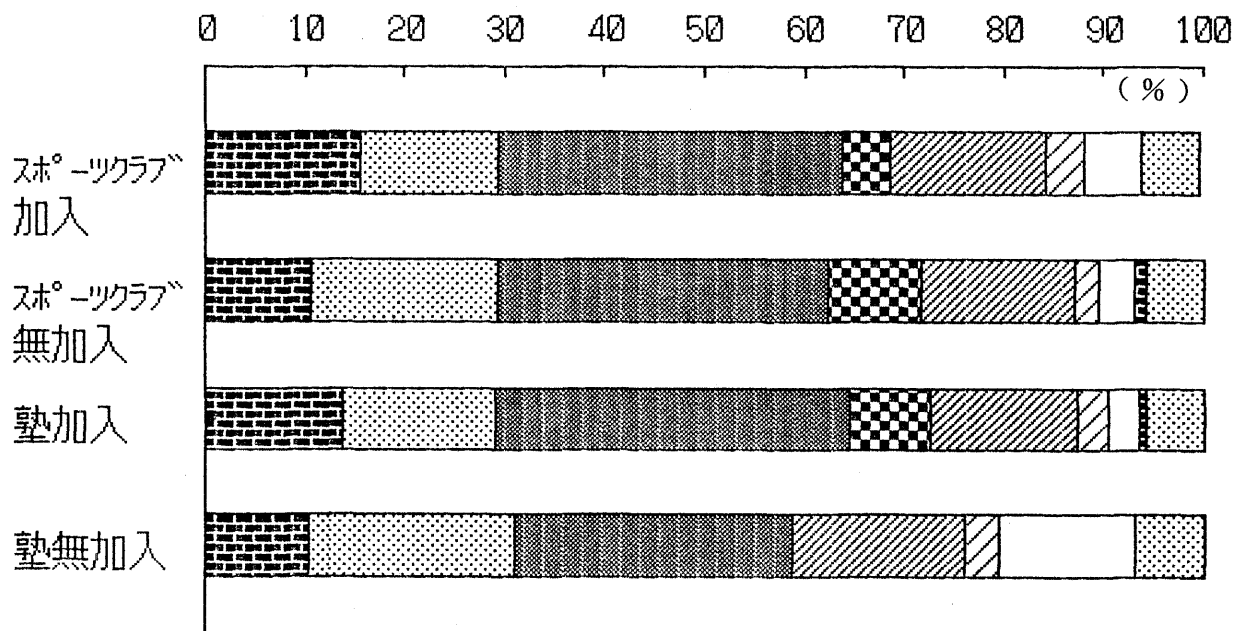
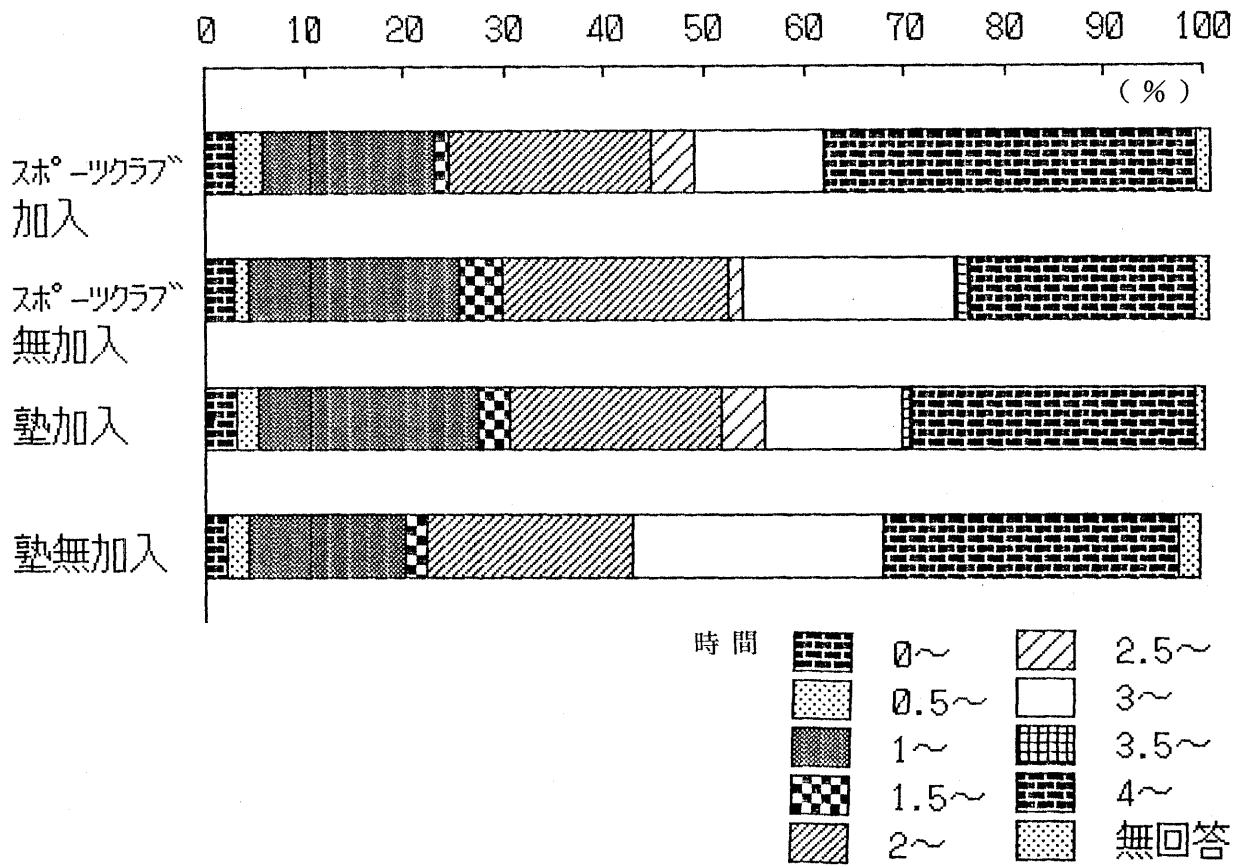


図26 スポーツクラブ、塾の加入状況と平日の外遊び時間

農村部



都市部

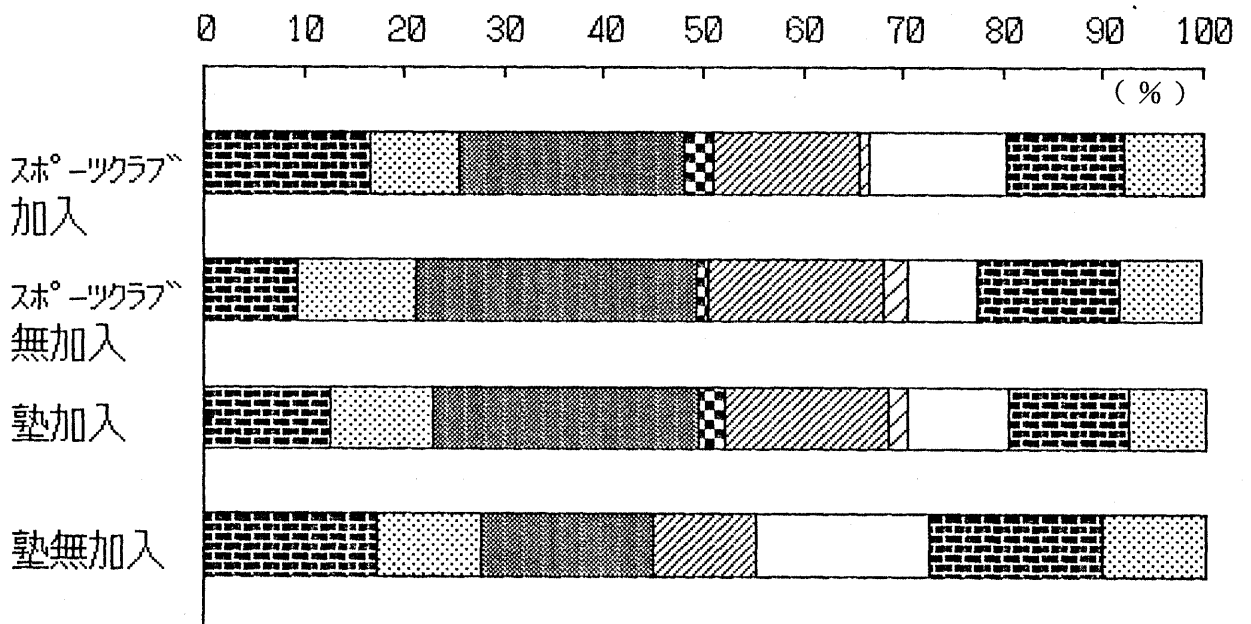
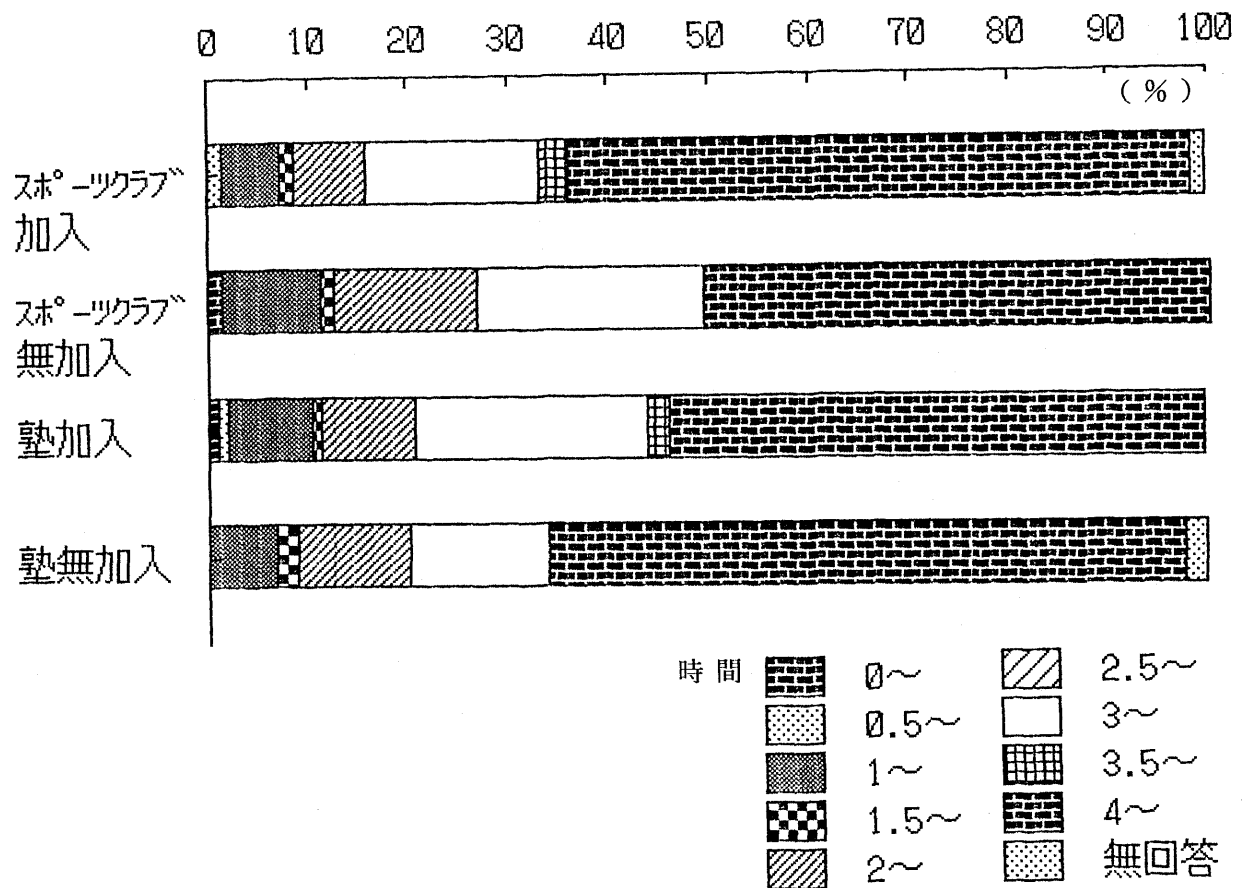


図27 スポーツクラブ、塾の加入状況と休日の前日の外遊び時間

農村部



都市部

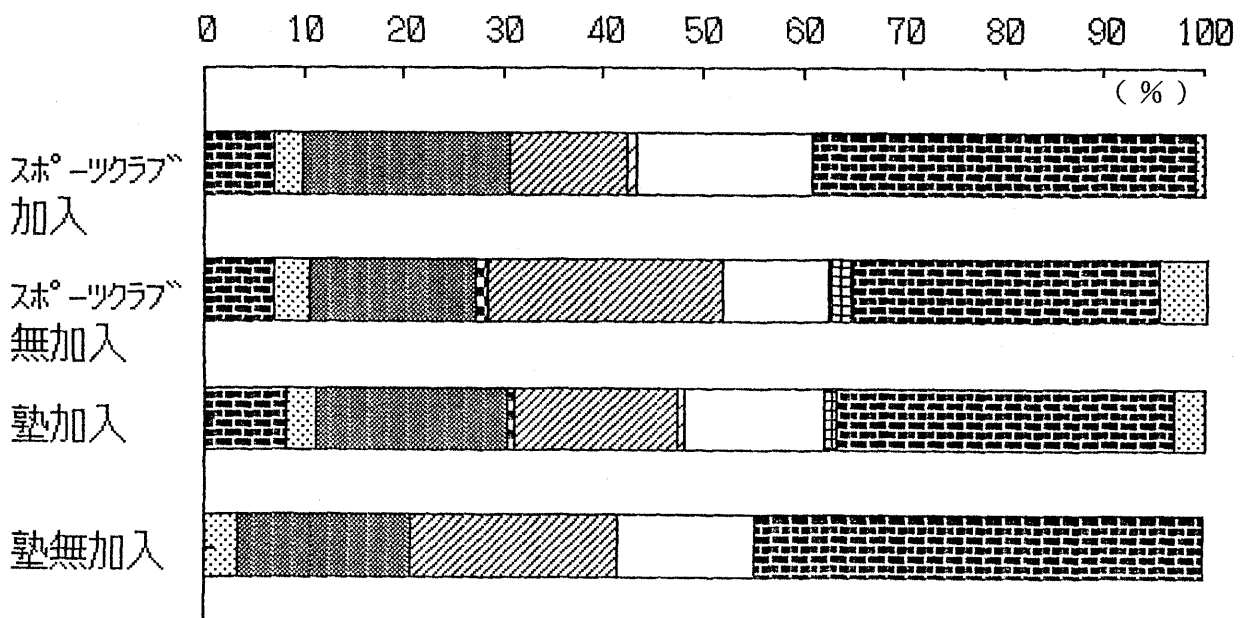


図 2 8 スポーツクラブ、塾の加入状況と休日の外遊び時間

農村部

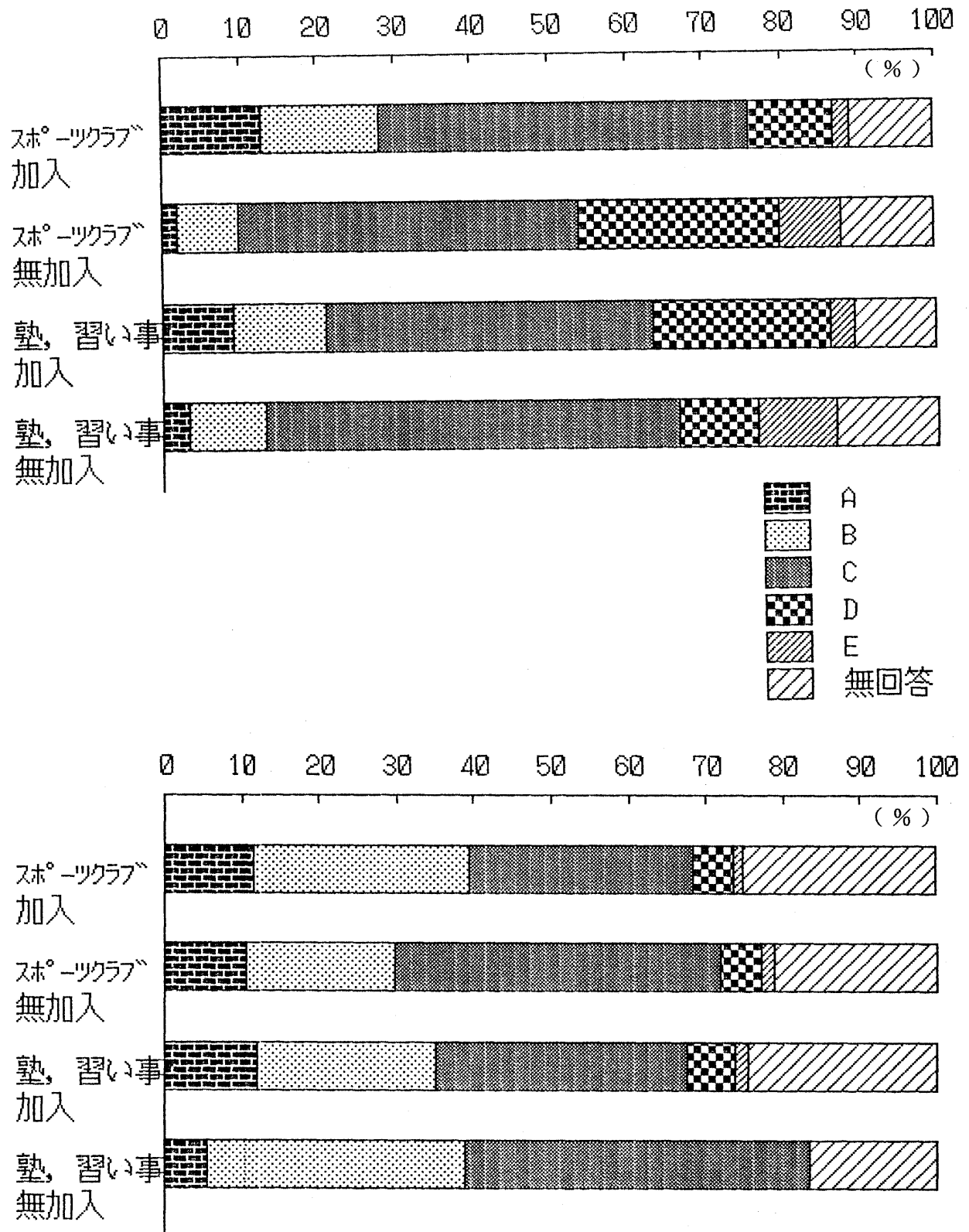


図 29 スポーツクラブ、塾の加入状況と体力

表10 スポーツクラブ加入の有無と健康状態
(複数回答)

項 目	農村部		都市部		全体	
	加入 N=69	無加入 N=71	加入 N=100	無加入 N=85	加入 N=169	無加入 N=156
アキアキあり	14(15.9)	12(10.0)	25(16.0)	18(11.8)	39(16.0)	30(11.0)
猫背	0(0.0)	7(5.8) ***	10(6.4)	7(4.6)	10(4.1)	14(5.1)
疲労の訴え	10(11.4)	13(10.8)	22(14.1)	21(13.8)	32(13.1)	34(12.5)
あくび	0(0.0)	2(1.7)	1(0.6)	3(2.0)	1(0.4)	5(1.8) *
転んだ時、 手が出ない	0(0.0)	1(0.8)	3(1.9)	0(0.0) *	3(1.2)	1(0.4)
喘息がある	2(2.3)	4(3.3)	10(6.4)	9(5.9)	12(4.9)	13(4.8)
背筋が曲が っている	1(1.1)	0(0.0)	7(4.5)	3(2.0)	8(3.3)	3(1.1)
皮膚がかか	6(6.8)	7(5.8)	7(4.5)	6(3.9)	13(5.3)	13(4.8)
歯並び悪い	11(12.5)	18(15.0)	13(8.3)	18(11.8)	24(9.8)	36(13.2) **
虫歯でき易 い	6(6.8)	8(6.7)	12(7.7)	20(13.2) **	18(7.4)	28(10.3) *
すぐ横にな りたがる	8(9.1)	12(10.0)	9(5.8)	11(7.2)	17(7.0)	23(8.5)
貧血	1(1.1)	2(1.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.4)	2(0.7)
集中力がな い	16(18.2)	21(17.5)	15(9.6)	15(9.9)	31(12.7)	36(13.2)
元気がない	2(2.3)	1(0.8)	4(2.6)	4(2.6)	6(2.5)	5(1.8)
全身にだる さを感じて いる	0(0.0)	2(1.7)	2(1.3)	2(1.3)	2(0.8)	4(1.5)
体の痛みを 訴える	11(12.5)	9(7.5)	7(4.5)	10(6.6)	18(7.4)	19(7.0)

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

数字 = 該 当 者 数

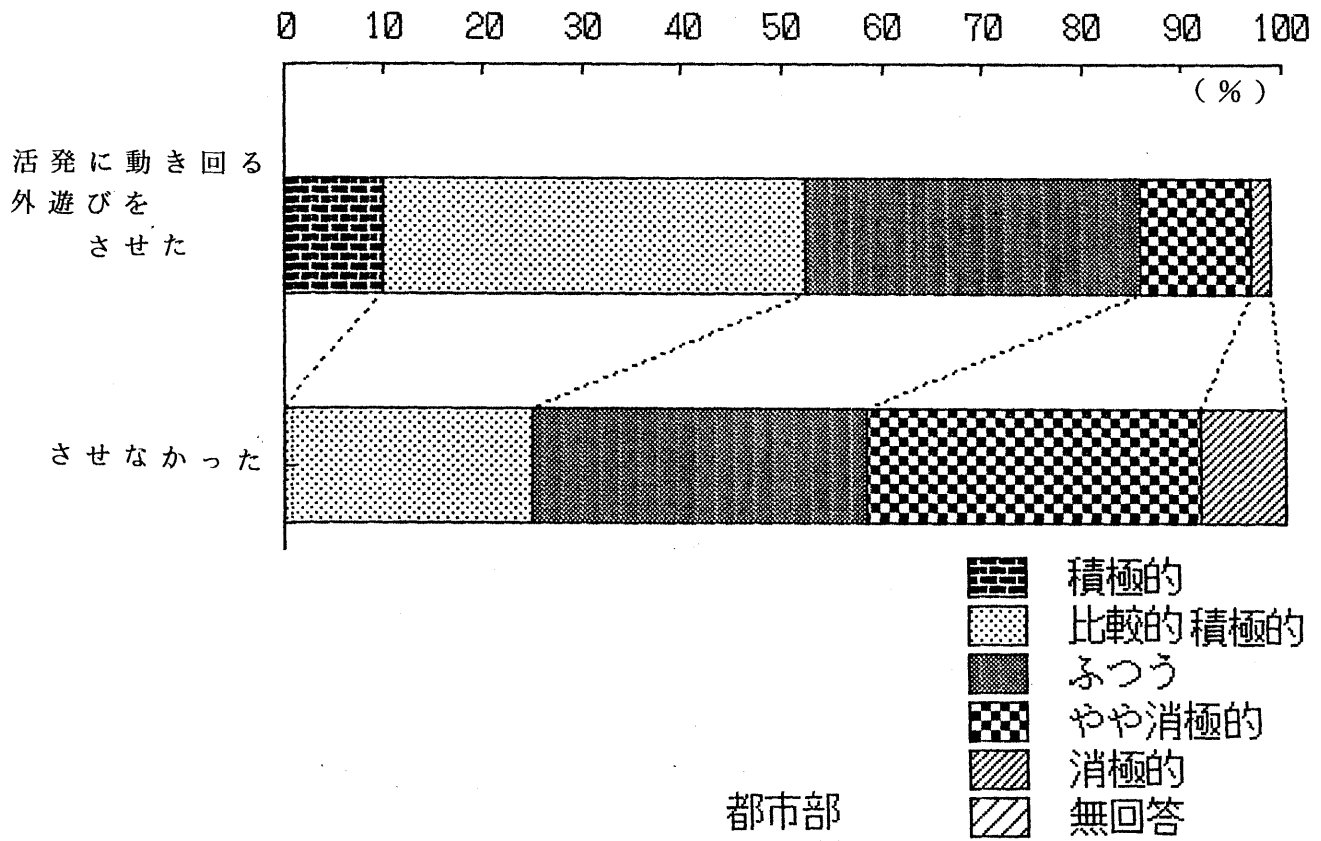
表11 塾・習い事の加入の有無と健康状態
(複数回答)

項 目	農村部		都市部		全体	
	加入 N=95	無加入 N=44	加入 N=156	無加入 N=29	加入 N=251	無加入 N=73
アレルギーあり	19(15.0)	6(7.9)	34(13.0)	8(17.0)	53(13.6)	14(11.4)
猫背	5(3.9)	2(2.6)	16(6.1)	1(2.1) *	21(5.4)	3(2.4)
疲労の訴え	12(9.4)	10(13.2)	39(14.9)	4(8.5)	51(13.1)	14(11.4)
あくび	0(0.0)	2(2.6)	3(1.1)	1(2.1)	3(0.8)	3(2.4)
転んだ時、 手が出ない	1(0.8)	0(0.0)	2(0.8)	1(2.1)	3(0.8)	1(0.8)
喘息がある	5(3.9)	0(0.0) *	15(5.7)	4(8.5)	20(5.1)	4(3.3)
背筋が曲が っている	1(0.8)	0(0.0)	8(3.1)	2(4.3)	9(2.3)	2(1.6)
皮膚がかか	8(6.3)	5(6.6)	11(4.2)	2(4.3)	19(4.9)	7(5.7)
歯並び悪い	16(12.6)	12(15.8)	27(10.3)	4(8.5)	43(11.1)	16(13.0)
虫歯でき易 い	11(8.7)	3(3.9)	29(11.1)	4(8.5)	40(10.3)	7(5.7)
すぐ横にな りたがる	10(7.9)	10(13.2) *	18(6.9)	3(6.4)	28(7.2)	13(10.6)
貧血	2(1.6)	1(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.5)	1(0.8)
集中力がな い	21(16.5)	16(21.1) *	26(9.9)	4(8.5)	47(12.1)	20(16.3)
元気がない	1(0.8)	2(2.6)	7(2.7)	4(2.1)	8(2.1)	3(2.4)
全身にだる さを感じて いる	0(0.0)	2(2.6)	4(1.5)	0(0.0) *	4(1.0)	2(1.6)
体の痛みを 訴える	15(11.8)	4(5.3)	12(4.6)	5(10.6)	27(6.9)	9(7.3)

数字 = 該 当 者 数

* p<0.1

農村部



都市部

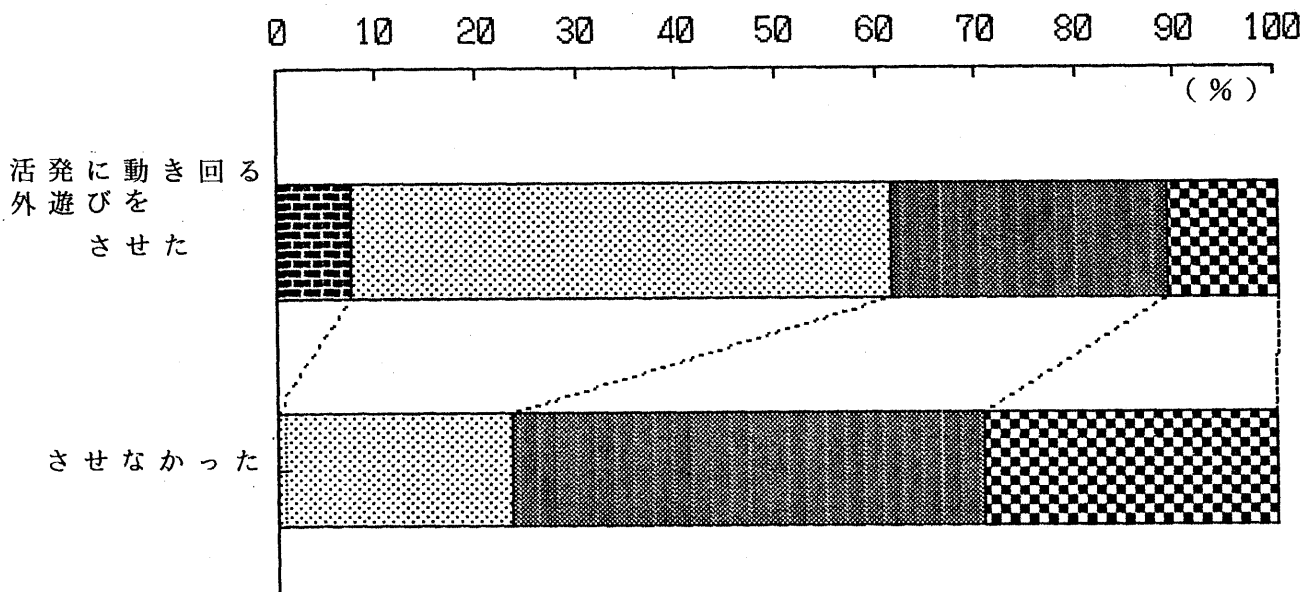


図30 親の外遊びへの意識と子どもの性格

農村部

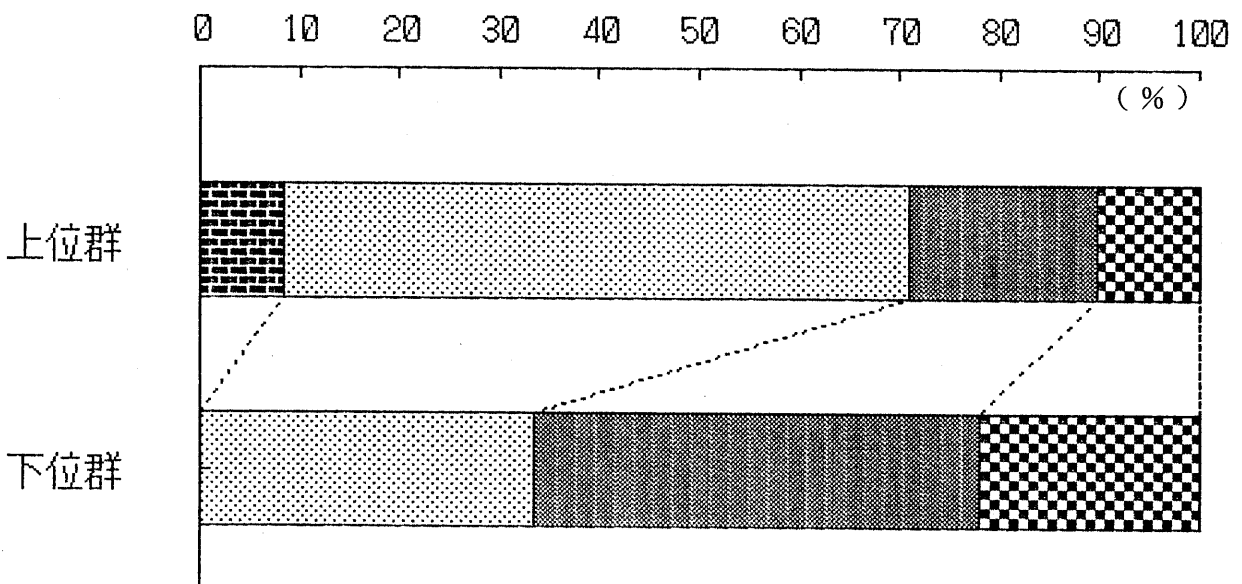
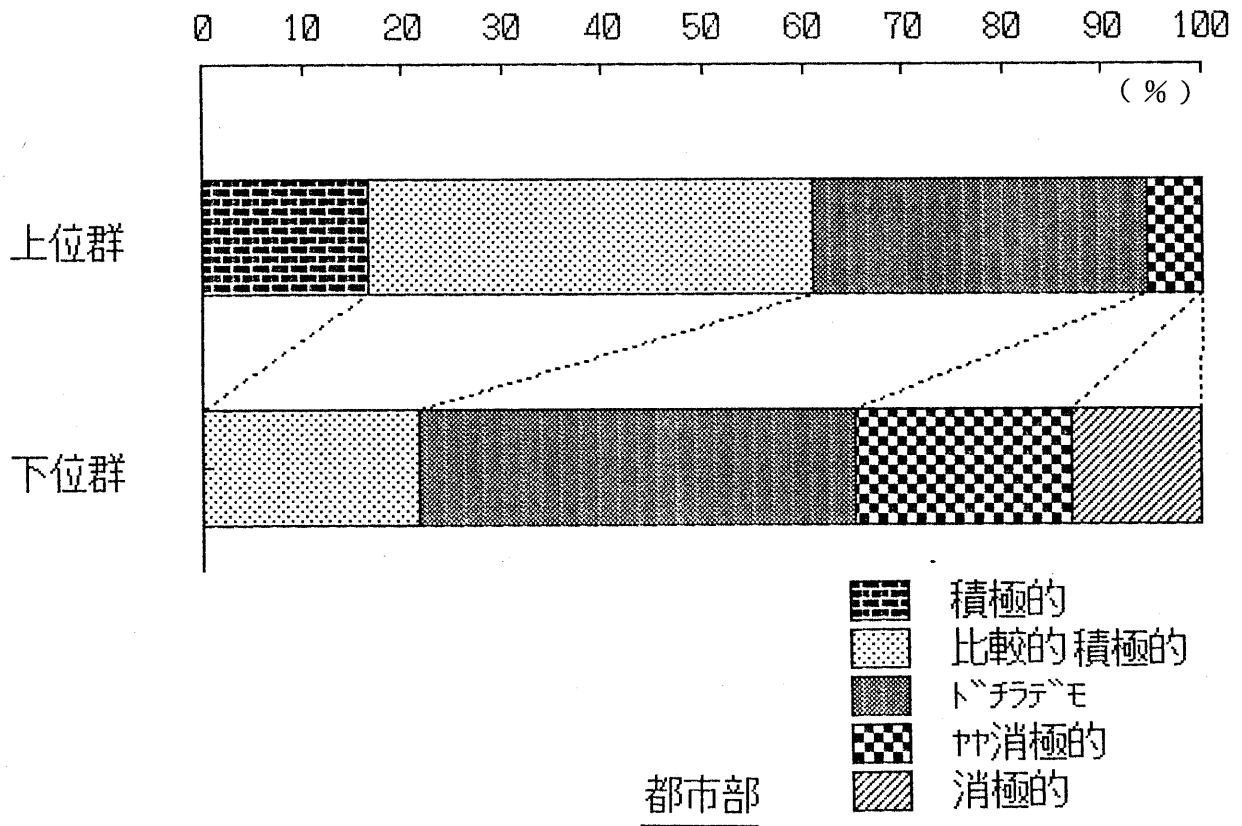


図 3 1 体力と性格

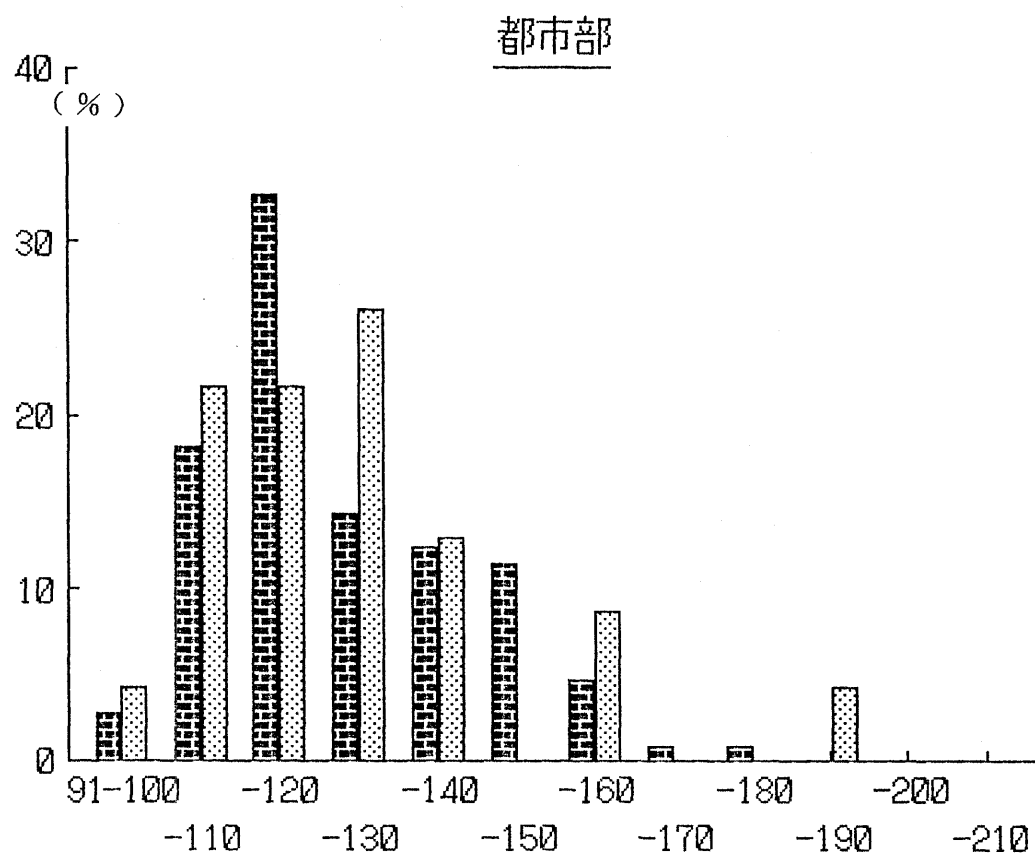
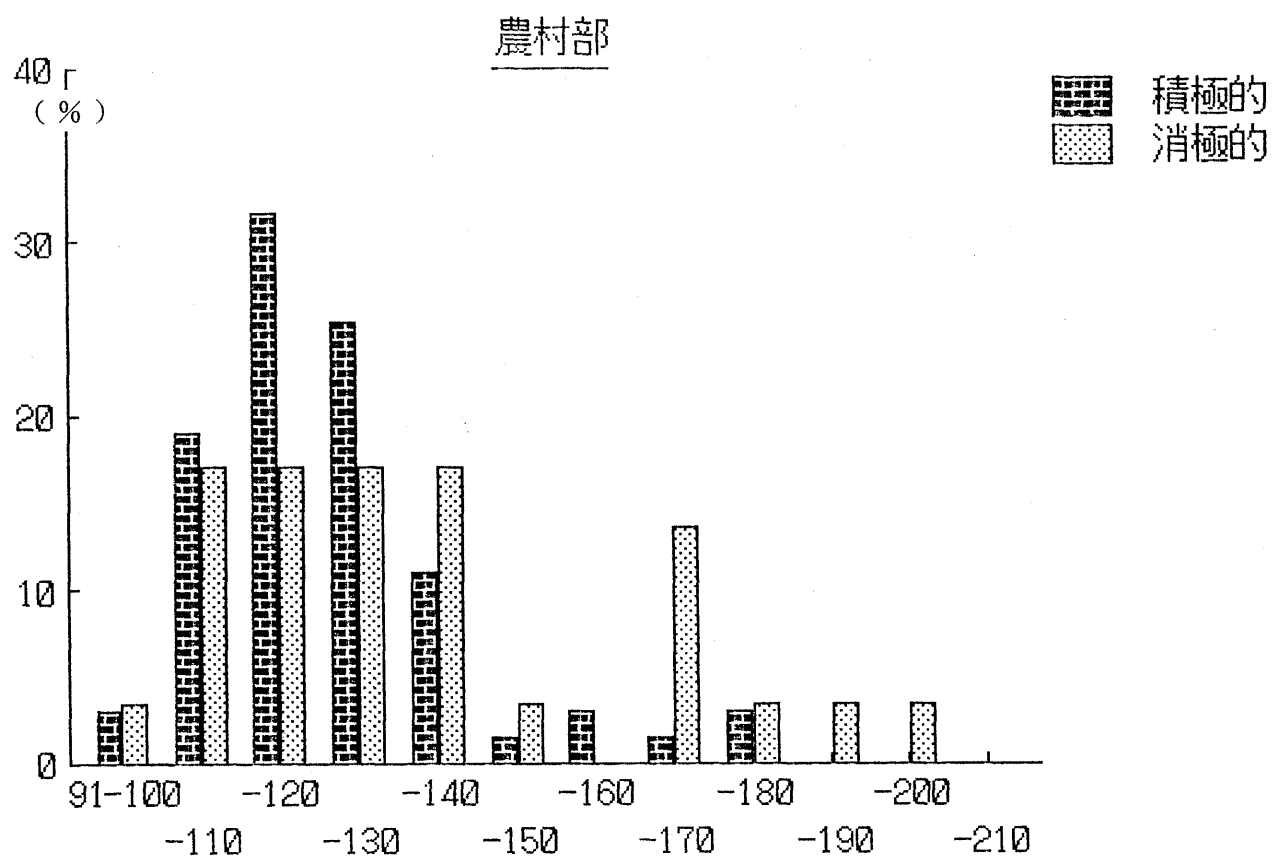
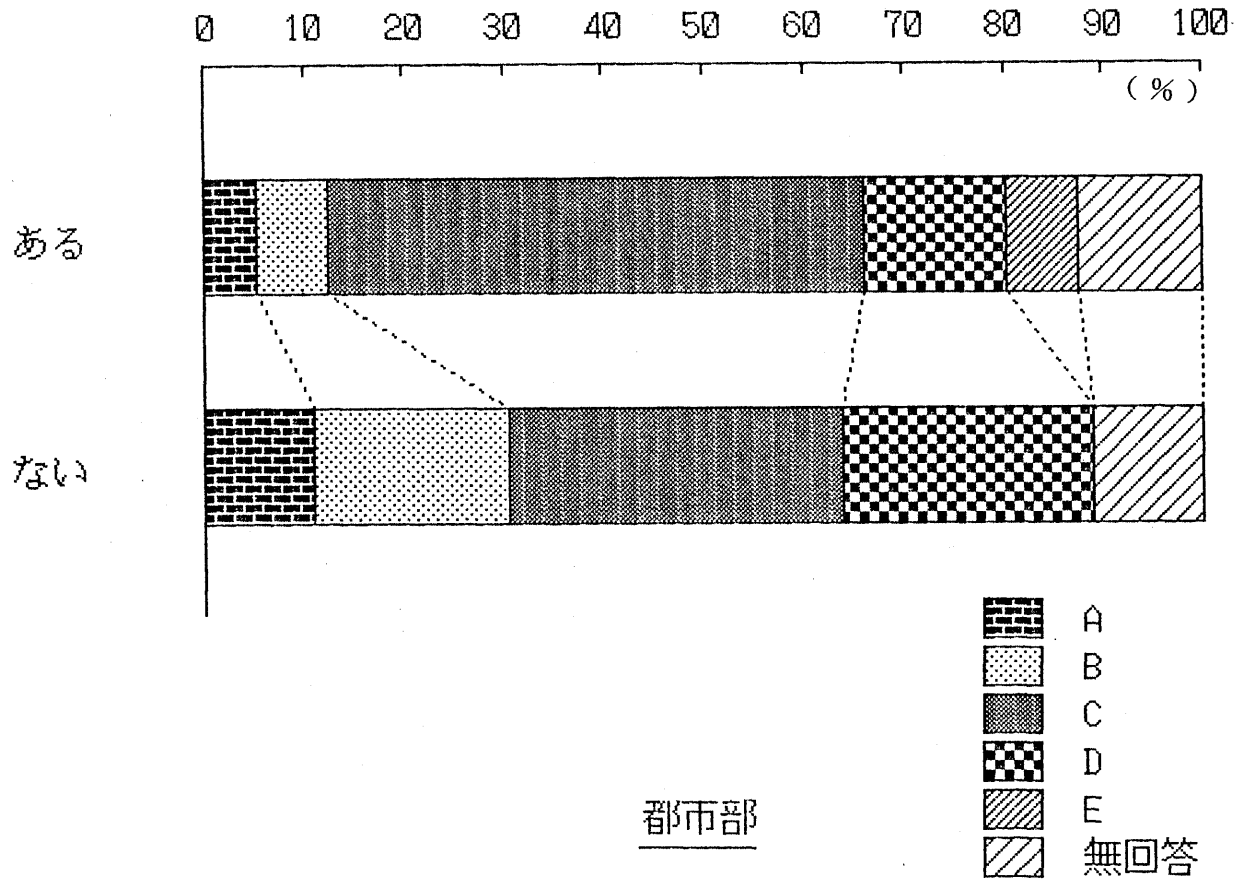


図 3 2 肥満度と性格

農村部



都市部

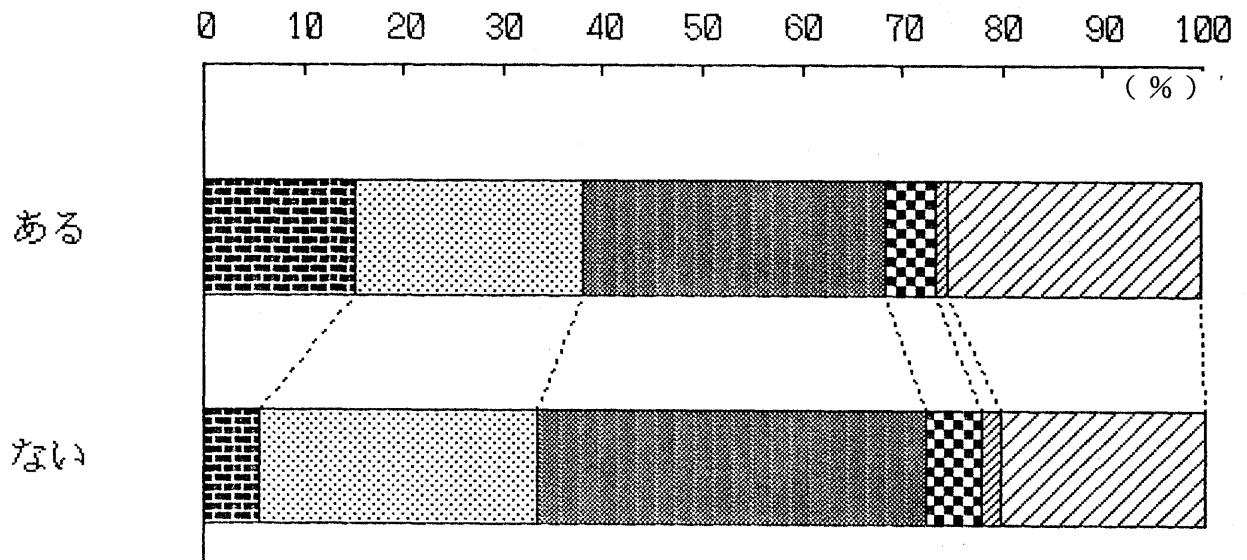


図 3 3 家事手伝いの有無と体力

「子どもの生活習慣と体力に関する調査」

ご記入に当たってのお願い

1. このアンケートは、保護者の方がお答え下さい。
2. この調査は表題の目的以外には使いません。
3. 本調査のデータはコンピュータにコード番号で登録され、集計もコンピュータで行ないますので個人名が出てご迷惑をかけるようなことは全くありません。
4. 調査研究の性格上、多少立ち入った質問もあるかもしれませんが分析を進める上で省くことができないことをご理解いただきご協力のほどをお願い申し上げます
5. アンケートの左端の ☐ は、コンピュータにデータを打ち込む際に使う欄ですので何も記入しないで下さい。
6. 回答は指示に従って回答欄に記入し、それ以外は番号に○印を付けて下さい。
7. 複数のお子さんがこのアンケートをお持ち帰りになった場合は、年上のお子さんを対象とし、アンケートは年上のお子さんにお持たせ下さい。
8. 来る7月18日(土)までに、担任の先生の所に提出して下さい。
9. 本調査に関するお問い合わせは下記にお願い致します。

千葉県印旛郡印旛村平賀学園台1-1 順天堂大学体育学部健康管理学研究室
TEL 0476(98)1001(内線387)

野原 三洋子
土屋 基
蓮見 仁

★アンケートを持ち帰ったお子さんの

学 校 名	学 年	出 席 番 号	性 別
小学校	年		男 ・ 女

★アンケートにお答えになった保護者の方の

性 別	年 齢
男 ・ 女	歳

A. あなたのご家族の生活時間についておたずねします

Q1. あなたは、日頃何時頃就寝し、平均睡眠時間はどのくらいですか？

		平日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する
		休日の前日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する
		休日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する

Q2. このお子さんは、日頃何時頃就寝し、平均睡眠時間はどのくらいですか？

		平日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する
		休日の前日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する
		休日	時 分	頃就寝し	時間 分	位睡眠する

Q3. このお子さんは一日どれくらいテレビを見ていますか？
(ファミリーコンピュータなどのゲームをしている時間もいれて下さい)

	平日	時間 分	位
	休日の前日	時間 分	位
	休日	時間 分	位

Q4. このお子さんは天気の良い日には一日どれくらい外で遊んでいますか？

	平日	時間 分	位
	休日の前日	時間 分	位
	休日	時間 分	位

B. 日頃の食事についておたずねします

Q5. あなたの家では、どの程度日常家族揃って食事できますか？

必ず揃う ほとんど揃う 時々揃う あまり揃わない 全く揃わない
事多い 事多い

朝食 1 2 3 4 5

夕食	1	2	3	4	5
----	---	---	---	---	---

Q6. このお子さんについて、次にあげる飲食物の摂取状況等をお答え下さい。

毎日 食べる	大抵 食べる	時々食べる	あまり 食べない	ほとんど 食べない
-----------	-----------	-------	-------------	--------------

	1	2	3	4	5
朝食					

夕食前の
間食

1 2 3 4 5

夕食 1 2 3 4 5

夜食	1	2	3	4	5
----	---	---	---	---	---

☐ カップ°
 ラーメン種類 1 2 3 4 5

☐ ポテトチップス
 などの 1 2 3 4 5
 塩味スナック

	1	2	3	4	5
チョコレート クッキーなど	よく飲む	比較的 飲む	時々飲む	あまり 飲まない	ほとんど 飲まない

☐ 牛乳 1 2 3 4 5

果汁
ドリンク

1	2	3	4	5

シールズ 1 2 3 4 5

	よく飲む	比較的 飲む	時々飲む	あまり 飲まない	ほとんど 飲まない
☐ 炭酸飲料	1	2	3	4	5
☐ 栄養ドリンク	1	2	3	4	5
	よくする	比較的する	時々する	あまりしない	ほとんど しない
☐ テレビを付けて食事する	1	2	3	4	5
☐ 会話しながら食事する	1	2	3	4	5

Q7. お宅では、できあいのレトルト食品、インスタント食品、冷凍食品など比較的簡単に使える食品を日頃どの程度使っていますか？

	非常に よく使う	比較的 よく使う	時々使う	あまり 使わない	ほとんど 使わない
☐	1	2	3	4	5

Q8. お宅で主に食事をまかなう人はどなたですか？

☐	1. あなた	2. ご主人	3. 祖父	4. 祖母	5. 子ども
	6. その他 ()				

Q9. あなたは調理をする際にどのような事を意識して作りますか？下記の項目から意識している順に3つ選んで下さい。

- | | |
|-------------------------|-------------------------------------|
| ①油や脂肪分を多くしない | ②良質タンパクを多くする |
| ③植物性タンパクを多くする | ④動物性タンパクを多くする |
| ⑤食物繊維が多いものを加える | ⑥カルシウムを多くする |
| ⑦野菜を多くする | ⑧栄養のバランスを考えて料理する |
| ⑨なるべく色々な種類の材料を使う | ⑩料理のパターンを多くする
(ワンパターンにならないようにする) |
| ⑪かたいものを食べさせる | ⑫高カロリーのをひかえる |
| ⑬コレステロールの多く含む材料の使用をひかえる | ⑭その他 |

1		2		3	
---	--	---	--	---	--

Q10. あなたのお宅では1ヶ月に何回くらい外食や店屋物を利用しますか？

☐	月	回	くらい
--------------------------	---	---	-----

Q11. あなたとこのお子さんの日常における生活の規則性はどの程度ですか？

☐ 規則正しい生活である ほぼ規則正しい生活である どちらともいえない あまり規則正しい生活ではない 不規則な生活である

あなた 1 2 3 4 5

この子 1 2 3 4 5

C. ご家族の運動への関心についておたずねします

Q12. お宅では、この子の就学前に下記のことについてどの程度実施しましたか？

非常に 比較的 時々 あまりさせ ほとんど
よくさせた よくさせた させた なかった させなかった

☐ 子どもに活発に動き回る外遊びを 1 2 3 4 5

☐ 外でその場座り（ままごと、砂遊び等）の遊びを 1 2 3 4 5

☐ 子どもに家の中での遊びを 1 2 3 4 5

非常に 比較的 時々した あまりし ほとんど
よくした よくした なかった しなかった

☐ 親が子どもと一緒に外で活発に動き回る遊びを 1 2 3 4 5

☐ 親が子どもと一緒に家の中での遊びを 1 2 3 4 5

Q13. あなたは子どもが外で遊ぶ際、怪我をするのではないかと心配になる方ですか？

☐ 非常に心配になる 比較的心配になる 時々心配になる あまり心配しない ほとんど心配しない
1 2 3 4 5

Q14. 日頃の運動についてお聞かせ下さい。

☐ あなたは運動が 非常に好き 比較的好き どちらでもない あまり好きではない 嫌い
1 2 3 4 5

☐ ご主人は運動が 1 2 3 4 5

非常によく 比較的 時々して あまり ほとんど
している している いる していない していない

☐ あなたは日頃運動を 1 2 3 4 5

☐ ご主人は日頃運動を 1 2 3 4 5

Q15. 日頃、このお子さんはどのような遊びをしていますか？下記の項目の中から、よく遊ぶ順に3つ選び記号を書いてください。

- ①走り回るごっこ遊び ②野球 ③ドッチボール
④サッカー ⑤その他のボール遊び（どんな：）
⑥自転車のり ⑦めんこ ⑧フリースビー
⑨ローラースケート ⑩なわとび ⑪固定遊具（すべり台、鉄棒など）
⑫かけっこ ⑬木登り ⑭室内ゲーム（ファミリーゲーム、トランプなど）
⑮本を読む ⑯テレビを見る
⑰絵を書く ⑱おしゃべり ⑲積木、ブロックなど
⑳その他（具体的にお書き下さい：）
㉑わからない

1		2		3	
---	--	---	--	---	--

Q16. 日頃、このお子さんは主にどのような場所で遊びますか？下からよく遊ぶ順に三つ選んで下さい。

- ①家の中 ②庭先 ③校庭、園庭
④空き地（団地・マンションなどの空き地、材木置き場なども含む）
⑤公園 ⑥造成地 ⑦雑木林 ⑧田畑
⑨神社、寺の境内 ⑩児童館、コミュニティなどの公的な施設
⑪団地、マンションの廊下 ⑫駐車場 ⑬自動車あまり通らない道路
⑭自動車のよく通る道路 ⑮その他（具体的に）
⑯わからない

1		2		3	
---	--	---	--	---	--

Q17. 日頃このお子さんは、何人くらいの友達と遊びますか？

- ☐ 1. 多くの友達と遊ぶ
2. 2～3人の友達と遊ぶ
3. 一人遊びが多い

D. お子さんの塾・習い事に関しておたずねします

Q18. このお子さんは地域や学校のスポーツクラブまたはスポーツ活動に入っていますか？

☐

1. 入っている 2. 入っていない

Q19. このお子さんは学習塾、習い事などに通っていますか？

☐

1. 通っている 2. 通っていない

→ (1. を選択した方は習っているものの全てを下表の中へ例に従ってご記入下さい)

	地域や学校の スポーツクラブ 及び 習っている教科	週に通う または 行う日数	家族との夕食時間 に重なってしまう か？ 1. 重なる 2. 重ならない
例	少年野球	2 回	1 , 2
	算数（学習塾）	1 回	1 , 2
	英語（家庭教師）	2 回	1 , 2
1			1 , 2
2			1 , 2
3			1 , 2
4			1 , 2
5			1 , 2
6			1 , 2
7			1 , 2

E. お子さんへの養育についておたずねします

Q20. あなたの家庭で、日頃このお子さんに任せている家事手伝いはありますか？

☐

1. ある 2. ない

a. どんな家事手伝いをさせていますか？
(手伝っているもの全てをお書き下さい)

b. 手伝わせているものには力を使うものが多いと思いますか？

☐

非常に多い 比較的多い ふつう あまりない ほとんどない
1 2 3 4 5

Q21. あなたは躾の重点を何においていますか？下記から一つお選び下さい。

☐

1. 勉強 2. あとかたづけ 3. あいさつ 4. 身だしなみ
5. 言葉使い 6. 早寝・早起き 7. 家事手伝い 8. 身の回りの生活
9. その他 ()

Q22. お宅ではお子さんの身の回りの清潔の習慣づけをどの程度実施していますか？

☐

外から帰った
時の手洗い

必ずさせ 比較的 どちら あまりさせ ほとんど
ている させている でもない ていない させていない
1 2 3 4 5

☐

外から帰った
時のうがい

1 2 3 4 5

☐

食後の歯磨き

1 2 3 4 5

☐

起床時の顔洗い

1 2 3 4 5

☐

入浴時に髪を洗う

1 2 3 4 5

F. お子さんまたはあなたについておたずねします

Q23. このお子さんが訴えている症状やお子さんの様子について下にあげたものに当てはまるものがありましたら記号に○印を付けて下さい。

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. アルミ~がある | 2. 背中が曲がっている(猫背) |
| 3. すぐ”疲れた”という | 4. あくびばかりしている |
| 5. 転んだ時手がでない | 6. ぜんそく |
| 7. 背筋が曲がっている | 8. 皮膚がカサカサしている |
| 9. 歯並びが悪い | 10. 虫歯ができ易い |
| 11. すぐ横になりたがる | 12. 貧血 |
| 13. 集中力がない | 14. 元気がない |
| 15. 全身にだるさを感じている | |
| 16. 体の痛みを訴えることが多い→部位(|) |

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

Q24. このお子さんは以下の a. b. についてどのようなですか？下記の項目から一つずつお選び下さい。

	何事にも非常に熱中しやすい	好きなことだけに熱中しやすい	どちらでもない	何事にもやや飽きっぽい	何事にも非常に飽きっぽい
☐ a. 熱中度	1	2	3	4	5
	何事にも非常に積極的である	比較的積極的である	どちらでもない	何事にもやや消極的である	何事にも非常に消極的である
☐ b. 積極性	1	2	3	4	5

Q25. あなたは現在どのような種類の住宅にお住みですか？

					エレベーターの有無
☐ a. 一戸建て					
☐ b. マンション				階	有 無
☐ c. アパート				階	有 無
☐ d. テラス					
☐ e. その他(					)

*エレベーターがある人にお聞きします。よく利用されますか？

☐	非常によく利用する	比較的良好に利用する	時々利用する	あまり利用しない	ほとんど利用しない
	1	2	3	4	5

Q26. あなたが小・中学生の時、一番長く住んでいた所はどこですか？

☐	a. 印旛村	b. 酒々井町	c. 印旛村を除く千葉県下の村	d. 千葉県下の町
	e. 千葉県下の市	f. 東京都下(23区内)	g. 東京都下(23区外)	
	h. 千葉県以外の市(	都・道・府・県)		
	i. 千葉県以外の町(	都・道・府・県)		
	j. 千葉県以外の村(	都・道・府・県)		

Q27. あなたのご家族は何人家族ですか？

人家族

また、お宅には下記の方たちがいらっしゃいますか？ いらっしゃる方に
○印をお付け下さい。

1. 曾祖父 2. 曾祖母 3. 祖父 4. 祖母

また、あなたのお宅の主たる家計維持者の職業は次のどれに当てはまりますか
か？ 番号に○印をお付け下さい。

1. 専業農業

2. 兼業農業

3. 自営業

4. 1～3以外の職業

以上、ご協力ありがとうございました。